

大学人の形成に関する研究

—日本の大学人へのアンケート調査—

高等教育研究叢書

38 1996年3月

大膳 司 編



広島大学

大学教育研究センター

大学人の形成に関する研究

－日本の大学人へのアンケート調査－

大 膳 司 編

広島大学大学教育研究センター

はじめに

1. 研究目的

現在の日本の経済的繁栄は、電子科学技術開発の成功によるものであると言っても言い過ぎではないであろう。その日本の経済的繁栄は、巨額な貿易不均衡とあいまって、経済大国としての日本の責任ある行動を求める声が内外から高まっている。

その一つに、日本は米国をはじめとする諸外国の「基礎研究」にタダ乗りしている、との批判があり、経済力に見合った「基礎研究」の充実が求められている⁽¹⁾。「基礎研究」を充実させることは、日本の国際的責務であるばかりでなく、日本自身にとっても将来の運命を左右する重大な課題でもあると思われる。

一般に、「基礎研究」を充実させるための方策としては「研究施設・設備の充実」や「潤沢な研究費の供給」などの研究環境の整備の重要性が叫ばれることが多い。しかし、その立派な研究環境下で独創的な研究成果を出すためには、その立派な研究環境を活かすことのできる創造的な研究者の存在が不可欠である⁽²⁾。

本研究の目的は、日本において「基礎研究」を充実させるための方策として、創造的な研究者の養成が重要ではないかとの前提にたつて、今後の研究者の養成のための課題を明らかにするための基礎データを収集することにある。

さらに、研究者の養成にとって、「他の研究者に影響を与え、研究者集団を組織化し、研究活動をリードしていく研究者（本研究では「重要な研究者」と命名）」の存在が重要ではないかとの仮説を設けて、その「重要な研究者」が形成されるためには何が重要な条件なのか、また、その時にいかなる問題点があるのかも明らかにした。

2. 研究内容と研究方法

本叢書の内容は以下5つの章から構成されている。

第1章では、日本の大学・大学共同利用機関・大学校に在職する教員（以下、大学人と称す）の研究活動の面での職業的社会化（科学的社会化）について明らかにすることを通して、日本の大学人が研究活動の面でどのように社会化されているのかを明らかにした。

第2章は、科学的社会化論の視点から「女性と学問」について論じたものである。男性が主要な構成員である科学界において女性大学人がどのように形成されているのか、その形成過程においてどのような障害に遭遇したのか、について明らかにした。

第3章は、専門分野の違いによって大学人の形成にどのような相違があるのか、専門分野を変えることは大学人の科学的社会化に対してどのような影響を及ぼすのか、を明らかにした。

第4章では、日本の大学人が科学的社会化される過程で影響を受けた人物（「重要な研究者」）を明らかにし、その「重要な研究者」の特性と形成過程を明らかにした。

第5章では、現代の日本の大学における研究者養成についての問題点をまとめた。

以上の5点を明らかにするために、二種類の質問紙調査を行ってデータを収集した。

第1回目の調査は、廣潤社発行の『全国大学職員録 平成3年版』に掲載された日本の大学人約13万人の中から、男性は100分の1を、女性は20分の1を無作為に抽出して選ばれた合計1734人を対象に、『大学人の科学的社会化に関する基礎調査』を平成4年7月に実施した。有効回答数は820名で、有効回答率は47.3%であった。

その質問紙調査票の中で、その大学人自身の成長に多大なる影響を与えたと思う人物（「重要な他者」）を五人指名してもらった。その際には、いかなる意味での影響力であったのか、その人物の現在の所属、その人物と出会った時期、なども回答してもらった。

第2回目の調査は、上記の調査によって選ばれた「重要な他者」のうちで、『全国大学職員録 平成3年版』に掲載されている大学人（「重要な研究者」）を確認し、所属大学が判明した517名を対象に、日本の研究者の活動に影響を与える「重要な研究者」の形成にいかなる要因が重要であるかを明らかにするための『「重要な研究者」の形成に関する基礎調査』を平成五年四月に実施した。有効回答数は373名で、有効回答率は72.1%であった⁽⁴⁾。

本報告は、「21世紀学術文化財団（平成3年度～平成4年度）」の研究奨励金によって実施された研究成果の一部である。本報告書の執筆者は、大膳司（琉球大学法文学部助教授）、加野芳正（香川大学教育学部助教授）、浦田広朗（麗澤大学外国語学部助教授）の3名だが、本研究には、西根和雄（広島大学学校教育学部教授）、島田博司（武庫川女子大学教育研究所助教授）、相原総一郎（大阪薫英女子短期大学講師）の3名も共同研究者として参加している。また、有本章先生（広島大学大学教育研究センター教授）には、本研究奨励金への応募に際して、新堀通也先生（武庫川女子大学教育研究所長）とともに推薦者としてご援助いただくとともに、研究会で貴重な助言をいただいた。

〈注及び引用・参考文献〉

- 1) 猪瀬博『センター・オブ・エクセレンスの構築』日経サイエンス社、1990年。
- 2) 大膳司「日本の高等教育機関の研究活動 -その実態と問題点」有本章編『「学問中心地」の研究 -世界と日本にみる学問的生産性とその条件』東信堂、1994年、228～305頁。
大膳司「日本の高等教育機関の学問的生産性」有本章編『学術研究の改善に関する調査研究 -全国高等教育機関教員調査報告書-』広島大学大学教育研究センター、1991年、41～65頁。
- 3) 「科学的社会化」とは曖昧な概念（名称）であるが、本研究では、本文にもあるとおり、大学人の研究活動の面での職業的社会的化を示す概念として使用する。
- 4) 厳密に「重要な研究者」を考えれば、日本の大学人だけではなく、家族、初等・中等学校の教師、留学先の研究者、過去の偉大な研究者、テレビの登場人物など様々考えられるが、本研究では、限界はあるものの日本の現職の大学人のみを対象に調査した。また、性別の回答率に関しては第3章の表2-1を参照のこと。

(大膳 司)

目次

はじめに	大膳 司	
第1章 日本の大学人の科学的社会化	大膳 司	1
第2章 科学的社会化論の視点から見た「女性と学問」	加野 芳正	11
第3章 科学的社会化の専門分野間比較	浦田 広朗	29
第4章 「重要な研究者」の特徴と形成過程	大膳 司	39
第5章 研究者養成上の問題点 —自由記述の要約—	大膳 司	51
おわりに	大膳 司	65
【付表1】 「大学人の科学的社会化に関する基礎調査」		69
【付表2】 「『重要な研究者』の形成に関する基礎調査」		97

第1章 日本の大学人の科学的社會化

本章は三つの節から構成されている。第1節では、大学人自身のこれまでの研究活動を質的な面と量的な面について自己評価してもらい、その評価に基づいて大学人を分類し、さらに、その評価の妥当性について検討する。第2節では、その大学人の分類が分化する要因を探るために、大学人の属性との関連性や、ライフコースの特徴を明らかにする。第3節では、より自己評価の高い大学人を対象に、本人の社會化にとって重要だった時期や事項について明らかにする。

1. 大学人の自己評価

(1) 自己評価

日本の大学人は、研究活動の面で、自己をどのように評価しているのだろうか。

本研究において、「あなたご自身のこれまでの研究活動の成果を日本にいる同じ専門分野で同年配の研究者と比較して、どの位置にあると思われますか」と尋ね、量的な面と質的な面それぞれについて、上位を1点、中位を4点、下位を7点とする七段階の分類に基づいて回答を依頼した。

表1-1は、量的自己評価と質的自己評価をクロスさせた結果である。

表1-1 質的・量的自己評価にもとづく大学人の分類

		質 的 自 己 評 価											
		上位 ←			中 位		→ 低位						
		高 質		中 質		低 質			(A)				
		1	2	3	4	5	6	7	不明	合計			
量 的 自 己 評 価	↑	高量	1	① 54 (6.9%)	15 (1.9%)	3 (0.4%)	1 (0.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	73 [9.2%]		
			2	16 (2.0%)	82 (10.4%)	17 (2.2%)	6 (0.8%)	1 (0.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	122 [15.4%]	
	中位	中量	3	② 13 (1.7%)	32 (4.1%)	③ 55 (7.0%)	13 (1.7%)	2 (0.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 [14.9%]		
			4	8 (1.0%)	35 (4.5%)	53 (6.8%)	157 (20.0%)	15 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.0%)	269 [34.0%]	
	↓	低位	低量	5	1 (0.1%)	10 (1.3%)	④ 28 (3.6%)	29 (3.7%)	⑤ 41 (5.2%)	7 (0.9%)	1 (0.1%)	0 (0.0%)	117 [14.8%]
				6	3 (0.4%)	3 (0.4%)	1 (0.1%)	9 (1.1%)	5 (0.6%)	31 (3.9%)	2 (0.3%)	1 (0.0%)	55 [7.0%]
				7	1 (0.1%)	1 (0.1%)	1 (0.1%)	4 (0.5%)	2 (0.3%)	4 (0.5%)	23 (2.9%)	1 (0.0%)	37 [4.7%]
	不明	0	0	0	0	0	0	0	29	29			
(B)	合計	96 [12.2%]	178 [22.7%]	158 [20.1%]	219 [27.9%]	66 [8.4%]	42 [5.4%]	26 [3.3%]	35	820 [100.0%]			

注1) ①は「高質高量」タイプの大学人、②は「高質中量」タイプの大学人、③は「中質中量」タイプの大学人、④は「中質低量」タイプの大学人、⑤は「低質低量」タイプの大学人、をそれぞれ示している。

注2) ()内の値は、有効回答数820名から評価の不明な35名を除いた785名に対する相対度数である。

注3) []内の値は、(A)列においては有効回答数791名に対する、(B)列においては有効回答数785名に対する相対度数である。

A列に示された「量的な評価」の分布をみると、自分は「中位（4レベル）」であると評価している大学人が最も多く（34.0%）、単純平均値を求めると3.7となる。

B行に示された「質的な評価」についても、自分は「中位（4レベル）」であると評価している大学人が最も多く（27.9%）、単純平均値が3.3となる。

「量的な評価」にしても、「質的な評価」にしても、最頻値である「中位（4レベル）」の付近を平均値とする正規分布に近い分布となっている。

続いて、「質的自己評価」「量的自己評価」とともに、「1レベル」と「2レベル」を「高位」、「3レベル」と「4レベル」を「中位」、「5レベル」「6レベル」と「7レベル」を「低位」とし、「質的自己評価」と「量的自己評価」との関係から、表一の中の黒枠で示された①から⑤の五つのグループに分類した⁽¹⁾。

①のグループは、質的自己評価が高く、量的自己評価も高い「高質高量」のグループである。②のグループは、質的自己評価は高いが、量的自己評価は中位の「高質中量」のグループである。以下同様に、③は「中質中量」のグループ、④は「中質低量」のグループ、⑤は「低質低量」のグループとなる。

（2）社会的評価との関連性

これらの評価は、あくまでも自己申告に基づいており、大学人の研究面における評価尺度としては客観性に欠けるのではないかと、また、その自己評価の高さははたして科学的社会化のより進んだ状態を示しているのだろうか。

この2つの疑問に答えるために、自己評価に基づく大学人の分類（以下では、「大学人分類」と呼ぶ）と「学術賞受賞の有無」や「受賞学術賞数の平均値」によって代表された研究活動の【社会的評価】や、「研究活動の重視度の平均値」や「海外の学会等への平均参加回数」に代表される【研究活動志向性】との関連性を明らかにする。

表1-2に示された「大学人分類」と「学術賞受賞の有無」とのクロス集計結果をみると、危険率0.1%において有意な関連性があり、「ある」を1、「ない」を2としてケンドールの順位相関係数をもとめると、0.25となり、危険率5%において有意な相関関係がある。すなわち、質的評価が高く量的評価も高い大学人ほど、学術賞受賞者の割合が高くなっている。

また、「大学人分類」別に「受賞学術賞数の平均値」を算出した表をみると、「高質高量」の大学人で0.58回、「高質中量」の大学人で0.36回、「中質中量」の大学人で0.17回、「中質低量」の大学人で0.08回、「低質低量」の大学人で0.10回となり、「高質高量」のそれと「高質中量」のそれとの間には危険率5%において有意な差があり（*印一つ）、「高質高量」のそれと「中質中量」「中質低量」「低質低量」のそれとの間には危険率0.1%において有意な差がある（*印が3つ）。

以上のことから、「自己評価」は、主観的な評価とはいいながらも、学術賞の受賞という【社会的評価】との有意な関連性からみて、大学人のこれまでの研究活動面の客観的評価尺度としても扱うことができるのではないだろうか。特に、「高量高質」の大学人は、他の分類の大学人に比べて【社会的評価】が高くなっている。

表1-2 「大学人分類」と【社会的評価】や【研究志向性】との関連

「大学人分類」	【社会的評価】		受賞学術賞数の平均値				
	学術賞受賞の有無 +++		2	3	4	5	
	1. ある	2. ない					
1. 高質高量	61人 (79.2%)	16人 (20.8%)	0.58回	*	***	***	***
2. 高質中量	19人 (21.6%)	69人 (78.4%)	0.36回		*	*	**
3. 中質中量	36人 (12.9%)	242人 (87.1%)	0.17回				
4. 中質低量	6人 (8.3%)	66人 (91.7%)	0.08回				
5. 低質低量	7人 (6.0%)	109人 (94.0%)	0.10回				

「大学人分類」	【研究活動志向性】					海外の学会等への平均参加回数				
	研究活動の重視度の平均値					2	3	4	5	
	2	3	4	5						
1. 高質高量	1.24	***	***	***	0.75回	**	***	***	***	
2. 高質中量	1.31	**	**	***	0.48回		**	***		
3. 中質中量	1.52			***	0.35回		*	**		
4. 中質低量	1.61			***	0.18回					
5. 低質低量	1.98				0.14回					

カイ2乗検定 +++ p<.001
t検定 *** p<.001 ** p<.01 * p<.05

注) 「重視度」は、「大変重要であった」を1点、「少し重要であった」を2点、「どちらともいえない」を3点、「あまり重要でなかった」を4点、「全く重要でなかった」を5点、として平均値を算出したもの。平均値が小さいほど、より重視されていることを示している。

続いて、【研究活動志向性】の指標としての「研究活動の重視度の平均値」を「大学人分類」別に算出した表をみてみよう。

なお、「研究活動の重視度の平均値」は、研究活動を「大変重視している」に1点、「重視している」に2点、「普通」に3点、「重視していない」に4点、「全く重視していない」に5点を当てはめて算出した。

最も研究活動を重視しているのが「高質高量」の大学人で(1.24)、最も研究活動を重視していないのが「低質低量」の大学人である(1.98)。「高質高量」の大学人と「高質中量」の大学人との間には有意な差はなく、その他の分類との間には危険率0.1%において有意な差があった。

続いて、平成三年度において海外の学会や学術会議に何回参加したのかたずね、「大学人分類」別に平均値を算出した。

最も多く海外の学会や学術会議に参加しているのが「高質高量」の大学人で(0.75回)、最も少ないのが「低質低量」の大学人である(0.14)。「高質高量」の大学人と「高質中量」との大学人との間には危険率1%で、その他の分類との間には危険率0.1%で有意な差があった。

以上の二変数の分析結果から、質的評価や量的評価が高くなるにつれて、【研究活動志向性】も高くなっていることが明らかとなった。「高質高量」の大学人は、他の分類の大学人に比べて特に研究活動指向性が高くなっている。

2. 大学人のライフコース

(1) 「大学人分類」と属性

「大学人分類」別にみて、大学人はどのような属性があるのだろうか。ここでは、属性として、「所属組織の設置者」「職階」「性別」を扱った。「大学人分類」と各属性とのクロス分析結果を表1-3に示した。

【所属組織の設置者】「大学人分類」は、「(a) 所属組織の設置者」と独立しているのだろうか。

表1-3 「大学人分類」別の属性とライフコース

【属性】										
「大学人分類」	(a) 所属組織の設置者			(b) 職階				(c) 性別		
	1. 国立	2. 公立	3. 私立	1. 教授	2. 助教授	3. 講師	4. 助手	1. 男性	2. 女性	
1. 高質高量	81 (48.5%)	21 (12.6%)	65 (38.9%)	105 (63.6%)	39 (23.6%)	10 (6.1%)	11 (6.7%)	149 (89.2%)	18 (10.8%)	
2. 高質中量	36 (40.9%)	7 (8.0%)	45 (51.1%)	50 (56.8%)	25 (28.4%)	8 (9.1%)	5 (5.7%)	71 (80.7%)	17 (19.3%)	
3. 中質中量	113 (40.6%)	28 (10.1%)	137 (49.3%)	130 (47.3%)	76 (27.6%)	43 (15.6%)	26 (9.5%)	208 (74.8%)	70 (25.2%)	
4. 中質低量	34 (47.2%)	10 (13.9%)	28 (38.9%)	23 (31.9%)	18 (25.0%)	12 (16.7%)	19 (26.4%)	50 (69.4%)	22 (30.6%)	
5. 低質低量	35 (30.2%)	15 (12.9%)	66 (56.9%)	26 (22.8%)	22 (19.3%)	24 (21.1%)	42 (36.8%)	65 (56.0%)	51 (44.0%)	
全体	299 (41.5%)	81 (11.2%)	341 (47.3%)	334 (46.8%)	180 (25.2%)	97 (13.6%)	103 (14.4%)	543 (75.3%)	178 (24.7%)	

【生育家庭の環境】										
「大学人分類」	(d) 家庭の学歴レベル				(e) 家庭の経済状態					
	1. 小・中学校卒	2. 高校卒	3. 短大卒	4. 大学卒	1. 裕福だった	2. 平均的だった	3. 貧しかった			
1. 高質高量	43 (25.9%)	42 (25.3%)	27 (16.3%)	54 (32.5%)	20 (18.0%)	78 (70.3%)	13 (11.7%)			
2. 高質中量	20 (22.7%)	15 (17.0%)	14 (15.9%)	39 (44.3%)	7 (10.8%)	45 (69.2%)	13 (20.0%)			
3. 中質中量	56 (20.4%)	58 (21.2%)	46 (16.8%)	114 (41.6%)	36 (17.0%)	151 (71.2%)	25 (11.8%)			
4. 中質低量	7 (9.9%)	20 (28.2%)	11 (15.5%)	33 (46.5%)	8 (15.7%)	39 (76.5%)	4 (7.8%)			
5. 低質低量	18 (15.7%)	25 (21.7%)	18 (15.7%)	54 (47.0%)	12 (14.3%)	62 (73.8%)	10 (11.9%)			
全体	144 (20.2%)	160 (22.4%)	116 (16.2%)	294 (41.2%)	63 (15.9%)	375 (71.7%)	65 (12.4%)			

【生育家族における研究者の有無】		
「大学人分類」	1. いた	2. いなかった
1. 高質高量	67 (40.1%)	100 (59.9%)
2. 高質中量	34 (38.6%)	54 (61.4%)
3. 中質中量	111 (39.9%)	167 (60.1%)
4. 中質低量	25 (34.7%)	47 (65.3%)
5. 低質低量	39 (33.6%)	77 (66.4%)
全体	276 (38.3%)	445 (61.7%)

【学習歴】										
「大学人分類」	(g) 取得学位					(h) 留学経験の有無				
	1. 学士号	2. 修士号	3. 博士号(36歳以上)	4. 博士号(31~35歳)	5. 博士号(30歳以下)	1. 有る	2. 無い			
1. 高質高量	13 (8.1%)	28 (17.4%)	34 (21.1%)	39 (24.2%)	47 (29.2%)	110 (68.3%)	51 (31.7%)			
2. 高質中量	11 (12.6%)	15 (17.2%)	22 (25.3%)	19 (21.8%)	20 (23.0%)	51 (60.7%)	33 (39.3%)			
3. 中質中量	32 (11.8%)	66 (24.4%)	69 (25.5%)	56 (20.7%)	48 (17.7%)	134 (49.8%)	135 (50.2%)			
4. 中質低量	13 (18.6%)	17 (24.3%)	21 (30.0%)	12 (17.1%)	7 (10.0%)	21 (30.0%)	49 (70.0%)			
5. 低質低量	40 (36.0%)	26 (23.4%)	16 (14.4%)	16 (16.2%)	11 (9.9%)	21 (18.1%)	95 (81.9%)			
全体	109 (15.6%)	152 (21.7%)	162 (23.1%)	144 (20.6%)	133 (19.0%)	337 (48.1%)	363 (51.9%)			

【移動学部歴】(所属学部の質的評価)																				
「大学人分類」	(j) 学部時代					(k) 助手時代					(l) 助教授時代					(m) 教授時代				
	2	3	4	5	2	3	4	5	2	3	4	5	2	3	4	5	2	3	4	5
1. 高質高量	2.29	***	***	***	2.10	*	*	*	2.50	***	***	***	2.68	***	***	***	2.68	***	***	***
2. 高質中量	2.28	***	*	***	2.26	*	*	*	2.34	***	***	***	2.58	***	***	***	2.69	**	**	***
3. 中質中量	2.95			*	2.62				3.15			***	3.44	*	*		3.45			
4. 中質低量	2.79			*	2.77				3.51			*	4.01				3.81			
5. 低質低量	3.34				2.77				4.10				4.10				4.01			
全体	2.7				2.5				3.1				3.2				3.1			

カイ2乗検定 *** p<.001

t検定 *** p<.001 ** p<.01 * p<.05

注) (d) 家庭の学歴レベルとは、本人の父親の学歴レベルと母親の学歴レベルのうち、レベルのより高いものをいう

(e) 家庭の経済状態とは、小学校時代、中学校時代、高校時代の経済状況についての回答のうち、より高い評価の状況をいう

表1-3に示された、「大学人分類」と「(a) 所属組織の設置者」とのクロス分析の結果をみると、カイ二乗値は14.7で、自由度八であることから、「大学人分類」と「(a) 所属組織の設置者」との間に関連性があるとはいえないようである。

【職階】続いて、「(b) 職階」とのクロス分析の結果を示した表をみると、カイ2乗

値は109.4で、自由度12であることから、危険率0.1%において、「大学人分類」と「(b)職階」との間に関連性があるということが出来る。さらに、ケンドールの順位相関係数は0.29であり、このことから、「大学人分類」と「(b)職階」との間に危険率5%において相関関係があるということが出来る。

すなわち、自己評価が質、量ともに高くなるにつれて、大学人の「職階」もより高くなっている。

【性別】では、「大学人分類」は、「性別」に対して独立しているのであろうか。表1-3に示された、「(c)性別」とのクロス分析の結果をみると、カイ二乗値は43.3となり、自由度4であることから、危険率0.1%において、「大学人分類」と「性別」との間に関連性があるということが出来る。さらに、ケンドールの順位相関係数は0.22で、このことから、「大学人分類」と「性別」との間に危険率5%において有意な相関関係があるということが出来る。

すなわち、質、量とも自己評価が高くなるに従って、大学人において男性の占める割合が高くなっている。

(2) 「大学人分類」とライフコース

ここでは、「大学人分類」ごとに、【生育家庭の環境】【学習歴】【移動学部歴】の違いを明らかにすることを通して、どのようなライフコースの違いが「大学人分類」の相違と結び付いているのかを明らかにしたい。

【生育家庭の環境】まず最初に、【生育家庭の環境】と「大学人分類」との関係について検討してみよう。【生育家庭の環境】を示す指標として、「(d)家庭の学歴レベル」「(e)家庭の経済状態」「(f)生育家庭における研究者の有無」を取り上げた。

まず最初に、「大学人分類」と「(d)家庭の学歴レベル」とのクロス分析の結果をみると、カイ二乗値は15.7で、自由度12であることから、危険率5%において「大学人分類」と「(d)両親の学歴レベル」との間に有意な関連性があるとはいえない。

同様に、「(e)家庭の経済力」や「(f)生育家庭における研究者の有無」と「大学人の分類」との間にも有意な関連性があるとはいえないことが明らかとなった。

すなわち、本研究のデータによれば、【生育家庭の環境】は、「大学人分類」とは有意な関連があるとはいえないということである(注2)。

【学習歴】大学人の学習歴を示す指標として「(g)取得学位」と「(h)留学経験」を用いた。

「(g)取得学位」とのクロス分析の結果をみると、カイ二乗値は68.7、自由度16であることから、危険率0.1%において、「大学人分類」と「(g)取得学位」との間に関連性があるということが出来る。さらに、「学士号」を1点、「修士号」を2点、「博士号(36歳以上)」を3点、「博士号(31~34歳)」を4点、「博士号(30歳以下)」を5点として、ケンドールの順位相関係数を求めるとマイナス0.21となり、「大学人分類」と「(g)取得学位」との間に危険率5%において有意な相関関係があるということが出来る。

すなわち、自己評価が質、量とも高くなるにつれて、より高いレベルの学位を取得しており、さらに、同じ博士号取得といってもより若くして取得している大学人の割合が高くなっているということである。

研究者としての能力証明である博士号を若い時期に取得したということは、本人の能力が若くして支持され、その結果、正の「マタイ効果」によって研究機会も拡大し、そのことによって、早期から科学的社会化が加速したということではないだろうか。

続いて、「(h) 留学経験」とのクロス分析結果をみると、カイ2乗値は83.0、自由度が四であることから、危険率0.1%において、「大学人分類」と「(h) 留学経験」との間に関連性があるということが出来る。さらに、留学経験が「有る」を1、「無い」を2としてケンドールの順位相関係数を求めると0.31となり、「大学人分類」と「(h) 留学経験」との間に危険率5%において有意な相関関係があるということが出来る。

すなわち、自己評価が質、量ともに高くなるにつれて、「留学経験」をもつ大学人の割合が高くなっている。

【移動学部歴】ここでいう【移動学部歴】とは、「学部時代」から「教授時代」まで、研究活動面からみてどのような質の学部を移動したのか、ということである(注3)。

質問紙調査において、「あなたの「研究室」の研究活動は、日本の大学のなかで専門分野の同じ「研究室」と比べてどのような位置にありますか。」と尋ね、上位を1、中位を4、下位を7とする七段階で質的に評価してもらった。そのデータを学部単位で集計し、その学部単位での質的評価を、各時代における学部の質的評価として扱った(注4)。

「(i) 学部時代」から「(h) 教授時代」にかけての所属学部の質的評価の平均値の推移をみると、「(i) 学部時代」は2.74、「(j) 修士課程時代」は2.46、「(k) 助手時代」は3.12、「(l) 助教授時代」は3.18、「(h) 教授時代」は3.10となっている。すなわち、「(i) 学部時代」よりも、重要な研究能力養成期間である「(j) 修士課程時代」の所属学部の質的評価の方が高く、その後は、「(k) 助手時代」「(l) 助教授時代」と経るにつれて評価が低くなっている。

この傾向は、どの「大学人分類」においても同様である。

さらに、「大学人の分類」別に「(i) 学部時代」の所属学部の質的評価の平均値をみてみよう。その右の*印は、各「大学人分類」別の質的評価の平均値の間に有意な差があるかどうかを示したものである。「高質高量」の平均値2.29と「高質中量」の平均値2.28の間には、有意な差があるとはいえないが(*の提示なし)、「高質高量」の平均値2.29と「中質中量」の平均値2.95の間には、危険率0.1%において有意な差がある(*印が3つ)、ということである。

この表から、どの時代においても、「高質高量」と「高質中量」の間には有意な差がないこと、「(j) 修士課程時代」において「大学人分類」間で有意な差がもっとも少ないこと、「(j) 修士課程時代」を除いてどの時代においても「高質高量」と「高質中量」などの「高質」の分類群と他の分類群との間に有意な差が存在すること、などが明らかとなる。より質的評価の高い学部に所属することは、研究費や研究施設・設備などの研究環

境の面で恵まれとともに、日本における学問の中心地として、日本の科学を推進する科学者集団との交流が可能となり、科学的能力や技術が向上するとともに、より高い評価も得やすくなる。より質的評価の高い学部に所属する科学者は、これらの正の「マタイ効果」の中で科学活動が進んでいくのである⁽⁵⁾。

3. 科学的社会化にとって重要な時期と要因

本節では、大学人の科学的社会化にとって重要な時期はいつ頃だったのか、また、いかなる要因が重要であったのか、を明らかにする。大学人の中でも、科学的社会化が最も進んでいると思われる「高質高量」の大学人を対象に検討した。

(1) 科学的社会化にとって重要だった時期

「あなたの研究生活をふり返って、あなたが研究者として社会化される上で、以下に示す各時期での家庭、学校、社会における出会いや体験は、どの程度重要だったと思われますか。」とたずね、各時期ごとに、「大変重要だった」「重要だった」「どちらとも言えない」「重要でなかった」「全く重要でなかった」の中から選択してもらった。これらの選択肢に1点、2点、……、5点とあてはめ、「高質高量」の大学人について平均点を算出した。その結果が、表1-4である。

科学的社会化にとって重要だった時期は、重要な順に、「大学院時代」「30歳代」「初職当時」「40歳代」「大学学部時代」となっている。大学院時代を挟んで、その前後の時期が重要であったと指摘されている。

逆に、それほど重要でなかったのが、「小学校入学まで」「小学校時代」「中学校時代」となっている。

表1-4 科学的社会化にとって重要だった時期（「高質高量」の場合）

順位	時期	重要度
1位	大学院時代	1.44
2位	30歳代	1.50
3位	初職当時	1.60
4位	40歳代	1.73
5位	大学学部時代	1.85
6位	50歳代	2.06
7位	高等学校時代	2.45
8位	60歳代	2.50
9位	中学校時代	2.76
10位	小学校時代	2.86
11位	小学校入学まで	3.24

注) 「重要度」は、「大変重要であった」を1点、「少し重要であった」を2点、「どちらともいえない」を3点、「あまり重要でなかった」を4点、「全く重要でなかった」を5点、として平均値を算出したもの。「重要度」の値が小さい事項ほど、より重要だった時期を示している。

(2) 科学的社会化にとって重要だった要因

「あなたが一人前の研究者として成長する上で、次の事項はどの程度重要であったと思われますか」とたずね、各事項ごとに、「大変重要であった」「少し重要であった」「どちらともいえない」「あまり重要でなかった」「全く重要でなかった」の中から選択してもらった。それぞれの選択肢に1点、2点、……、5点とあてはめ、「高質高量」の大学人について平均点を算出した。その結果が、表1-5である。平均点の低い項目がより重要性の高いことになる。

表1-5 科学的社会化にとって重要だった事項（「高質高量」の場合）

順位	成長要因	重要度
1位	研究に対する情熱（気概）	1.16
2位	自分の才能	1.63
3位	留学経験	1.66
4位	自分のパーソナリティ	1.72
5位	自分の指導教授	1.76
6位	世界の学界をリードする研究者の下で研究を行った経験	1.83
7位	自分の受けた大学院教育	1.91
8位	独創性を求める科学の規範	1.92
9位	自分の配偶者の協力	2.01
10位	自分の研究費	2.12
11位	所属大学・学科の風土や知的雰囲気	2.13
12位	他の教員とのコミュニケーション網	2.31
13位	自分の受けた学部教育	2.33
14位	所属大学・学科の研究施設・設備	2.34
15位	研究の支えとなる若手研究者の存在	2.36
16位	研究情報データベースへの接近	2.54
17位	研究活動以外の仕事（教育、管理運営、社会サービス等）を少なくすること	2.54
18位	自分の育った家族の環境	2.64
19位	科学の先取権競争	2.66
20位	自分の受けた初等・中等教育	2.86
21位	自分の基本給与	2.87
22位	自分の性別	3.19
23位	自分の宗教・信条	3.53

注) 「重要度」は、「大変重要であった」を1点、「少し重要であった」を2点、「どちらともいえない」を3点、「あまり重要でなかった」を4点、「全く重要でなかった」を5点、として平均値を算出したもの。「重要度」の値が小さい事項ほど、より重要だった成長要因を示している。

研究者として成長すること（科学的社会化）にとって重要だった事項は、重要だった順に七位まであげると、「研究に対する情熱（気概）」「自分の才能」「留学経験」「自分のパーソナリティ」「自分の指導教授」「世界の学界をリードする研究者の下で研究を行った経験」「自分の受けた大学院教育」となり、平均点がすべて1点台だった。

これらの事項は、大きく分けて2つの内容に分類できよう。1つは、「研究に対する情熱（気概）」「自分の才能」「自分のパーソナリティ」など、「自分自身の能力」ということ、もう1つは、「留学経験」「自分の指導教授」「世界の学界をリードする研究者の下で研究を行った経験」「自分の受けた大学院教育」など、「重要な他者」との出会いということではないだろうか。

さらに、この「重要な他者」との出会いということは、表四で重要な時期として示された、「大学院時代」、「30歳代」、「初職当時」、「40歳代」ということと無関係で

はない。「大学院時代」の指導教官との出会いや、「留学」を通しての世界の学界をリードする研究者との出会いは、「高質高量」の大学人の科学的社会化に対して重要な影響を及ぼしているようである。

本章のまとめ

本章の目的は、「基礎研究」の推進者である大学人の科学的社会化の過程とその要因について明らかにすることにあった。その結果、次のようなことが明らかとなった。

質的自己評価と量的自己評価に基づいて大学人を5つに分類した。この自己評価は、学術賞受賞に代表される【社会的評価】とも有意な関連性があり、もともとは主観的な評価ではあるものの、客観性も確認された。特に、「高質高量」の大学人は、これまでの研究成果に対する【社会的評価】も高く、現在の【研究活動志向性】も高くなっていた。その「高質高量」の大学人には、他の分類に比べて男性の教授が多い。

「大学人分類」の違いは、【生育家庭の環境】の違いではなく、【学習歴】や【移動学部暦】の違いによるものではないと思われる。すなわち、出身家庭の学歴レベルや経済状態の違いではなく、本人がより高い学位を取得しているとか、留学の経験が有るとか、研究活動面からみてより質の高い学部を移動していた、などが「大学人分類」の違いと関連しているのである。

そして、大学人の中でも、科学的社会化が最も進んでいると思われる「高質高量」の形成に対して、「大学院時代」の指導教官との出会いや、「留学」を通して世界の学界をリードする研究者との出会いは重要な影響を及ぼしているようである⁽⁶⁾。

〈注及び参考・引用文献〉

- 1) ①から⑤までのグループに入らない大学人は、有効回答者785名中84名(10.4%)である。
- 2) もし、他の職業人と大学人とを比較した場合なら、【生育家庭の環境】の有意な差が現われていたかもしれないが、本研究のように、同じ大学人の間で比較したために、このような結果になったのであろう。
- 3) もし、当人が助教授であった場合には、「教授時代」の学部についてのデータは欠損値として扱われている。
- 4) 現在の学部の評価が、かならずしも過去の当該学部の評価と一致するとはいえないという問題を含んでいる。しかし、絶対評価するわけではなく、学部間で質的評価を比べることが本研究の目的であるから、それほど問題はないとも思っている。
- 5) 大膳司「第2章 日本の高等教育機関の学問的生産性」有本章編『学術研究の改善に関する調査研究 -全国高等教育機関教員調査報告書-』広島大学大学教育研究センター、1991年、41～65頁。
- 6) 以上の分析結果は、大学人一般の傾向なのか、それとも、世代別、年齢別、時代別、性別、専門分野別、で何がしかの特徴があるのか、今後の課題としたい。なお、第3章では性別の特徴、第4章では専門分野別での大学人の科学的社会化の特徴について

扱っている。(参照 Lawrence, Janet H. & Robert T. Blackburn, "Faculty Careers: Maturation, Demographic, and Historical Effects," Research in Higher Education, Vol.22, No.2, 1985, pp.135-154.)

※ 本章は、「第21章 日本の大学人の科学的社会化」片岡徳雄編『現代学校教育の社会学』福村出版、1994年、317～331頁、としてすでに発表している。再掲を許可いただいた福村出版に感謝いたします。

(大膳 司)

第2章 科学的社會化論の視点からみた「女性と学問」

はじめに

さまざまな専門的な職業への女性の進出が著しい。これは、社会全体の男女平等化への取り組みと、そのもとでの教育機会の平等化や、社会的な意識の変革が大きな力をもったからであろう。しかし、高等教育機関全体を眺めてみるなら、確かに学生や大学院生のレベルにおいては、女性の割合を大幅に増加させたが、そこでの教員の割合は依然として停滞したままである⁽¹⁾。しばしば、科学の世界における女性をたとえる話として「石油輸送管がもれている」－努力が徒労に終わる、「ガラスの天井に突き当たる」－見えない限界がある、「女性は梯子の最下段に詰め込まれている」－昇進の機会がない、といった比喩が用いられるが⁽²⁾、それは我が国の場合にも当てはまるであろう。

本章では、この共同研究で得られたデータを男女別に読み取ることによって、女性のおかれている高等教育機関（大学）内での地位を検討し、と同時に、女性大学人の意識や社会化のプロセスにおける特徴を探っていききたい。

サンプリングとデータ

本調査の概要についてはすでに述べられているが、サンプリングについて若干付け加えておきたい。本調査は『全国大学職員録 平成3年版』に掲載された日本の大学人約13万人の中から男性は100分の1を、女性は20分の1をランダム・サンプリングにより無作為に抽出した、合計1734人を対象にしている。層化抽出法を採用したのは、大学人に占める割合が女性は少なく、サンプル数を多めに取らないと男女間の比較が難しいからである。設置者別にみた配布数、回答数、回収率は表2-1の通りである。

表2-1 調査データの概要

設置者	性別	配布数	回答数	回収率
国立	男性	529	277	52.4%
	女性	157	65	41.4%
公立	男性	113	67	59.3%
	女性	63	28	44.4%
私立	男性	594	273	46.0%
	女性	273	110	39.6%
計	男性	1236	617	49.9%
	女性	498	203	40.8%
合計		1734	820	47.3%

女性だけに限定すると498の質問紙を郵送し、203を回収した。回収率は40.8%であった（男性の場合は回収率49.9%）。

1. 女性研究者の大学での地位と成育環境

(1) 大学内での分野と地位

ランダム・サンプリングを実施したので、所属学科や職階、大学院担当の有無などの属性は、そのまま大学内での男女間の相違を示している。また、このことが後に検討するような学問の達成感などに反映してくると思われるので、まず始めに、これらの点について質問紙調査の結果をまとめておきたい。

表2-2は所属する学科の分野を検討したものである。これをみると女性の多いのは家政学系や人文科学系、保健学系であり、反対に工学系、農学系の自然科学分野では極端に少なくなっていることがわかる。全体として医歯学系、社会科学系、人文科学系の分野において多くの研究者が含まれていることがわかる。

表2-2 所属する学部・学科の領域

	男性	女性		男性	女性
人文科学系	10.8	13.4	家政学系	0.5	10.9
社会科学系	15.2	13.9	教員養成系	3.3	4.5
理学系	9.6	6.9	芸術学系	2.1	5.9
工学系	19.1	2.5	体育学系	1.3	1.0
農学系	6.9	1.0	一般教養学系	4.2	6.4
医歯学系	25.0	26.7	その他	2.0	3.5
保健学系	0.2	3.5			

表2-3 大学内での職階

	男性	女性
教授	52.4	31.2
助教授	26.0	20.3
講師・助手	21.6	48.5

表2-3は、大学内での職階を示したものである。これをみると、男性の場合は教授の職にある者の割合が52.4%と半数を越えている。これに対して、女性では「講師・助手」の地位にある者が48.5%と、もっとも多くなっている。教授の地位にある者は31.2%に過ぎない。個々のサンプルを検討してみると助手の地位にある女性が、自然科学系を中心に多くなっている。この中には、いわゆる「昇進の可能性」を持たない者が少なからず存在することが予想された。一般に大学内での職階では女性の地位がかなり低くおさえられていることがわかる。もちろん、この背景には女性の年齢や学歴などが反映していることもあるかもしれない。ここでは、実態を押しさえておくだけで十分であろう。

表2-4は、現在の所属大学においてどの段階の教育を担当しているのか、また、どのレベル（学部学生、修士課程学生、博士課程学生）のゼミ生（学位論文指導学生）の教育に関心があるのかをたずねた結果である。どの段階を担当しているかをみると、段階が高くなるにつれて男女間の差が増大していることがわかる。学部段階だけをみると、男性の86.2%に対して、女性は80.8%が担当しているが、博士課程の段階では男性の40.5%に対して、女性はわずか9.4%と大きな開きが見えてくる。また、授業を担当しない者が、女性では18.2%に達する点にも注目する必要があるだろう。結局、『大学職員録』に名前を連ねてはいても、授業を担当しない「助手」が、女性の中に多いことが、このような結果をもたらすのである。この点は、あわせて、先の表2-3を参照されたい。

表2-4. 教育研究指導の段階と関心領域

	教育研究指導の担当段階		教育研究指導の関心段階	
	男性	女性	男性	女性
学部段階	86.2	80.8	18.6	34.2
修士段階	45.9	22.7	13.4	16.8
博士段階	40.5	9.4	14.7	5.6
授業担当なし	9.8	18.2	—	—
すべての段階に関心あり	—	—	51.4	41.6
すべての段階に関心なし	—	—	1.9	1.8

同じく表2-4から、どの段階の教育に関心があるかを検討すると、男性の51.4%、女性の41.6%までが、「どのレベルの学生の指導も関心がある」と回答している。いずれかの段階に限って選択した者をみると、女性では「学部段階」の指導に関心があると回答した者の割合が34.2%と、かなり高くなっている。一方、「博士課程段階」についてみると、男性では14.7%であるのに対して、女性では5.6%に過ぎなくなっている。もちろん、博士課程段階の教育・研究指導に関わっている女性の少ないことが、こうした数字の背景にあることはいうまでもない。

(2) 生育家庭環境

次に、大学人を生み出す家庭環境に焦点をあてて考察したい。表2-5は、両親の学歴をたずねた結果である。学歴は「文化資本」を代表するインデックスであり、成育を支える家庭環境を象徴的に示す。この表から、一般的に女性の方が、両親の学歴が高いことがわかる。父親をみると、女性のほぼ半数が「大学・大学院卒業程度」という高学歴を有しているのに対して、男性では、この割合は36%に過ぎない。反対に、「小・中学校卒業程度」の者は、男性では32%に達するのに対して、女性ではわずか11%となっている。

表2-5 父親・母親の学歴

	父親		母親	
	男性	女性	男性	女性
小・中学校卒業程度	31.6	11.3	32.8	11.8
高等学校卒業程度(旧制中・女学校卒)	17.2	21.7	49.3	54.7
短期大学卒業程度(旧制高専卒)	14.9	18.2	11.0	19.2
大学・大学院卒業程度	36.2	48.7	6.9	14.3

母親についても同様である。義務教育程度の学歴を有する母親は、男性の場合は33%近くに達するのに対して、女性の大学人では、12%程度である。一方、大学卒以上の学歴を有する母親は、男性では7%であるのに対して、女性では14%と2倍になっている。もちろん、我が国に限らず、高学歴化の著しい進展は高度経済成長以降の現象であり、その点で世代によって親の学歴は大きく異なっている。そして、女性の高等教育への進出は比較的新しい現象であり、このことが、女性の方が両親の学歴において高くなっている背景にあるのかもしれない。

表2-6 高等学校時代の家庭の経済状態

	男性	女性
平均以上に裕福	16.1	16.3
平均的	63.1	72.8
貧しい	20.3	10.9

表2-7 家族・親族の中の研究者

	男性	女性
祖父	3.7	3.9
祖母	0.2	1.0
父親	10.7	13.8
母親	0.8	0.5
きょうだい	15.4	16.3

「経済資本」という点では、男女間にそれほどの差異はみられない。表2-6は、大学に入学するまでの家庭の経済状況が、学友の平均的な家計状況と比較してどうであったのかを、「高等学校時代」を一つの指標としてたずねたものである。それをみると、「平均以上に裕福であった」とする者は、男女ともに16%程度である。他方「貧しかった」とする者は、男性では20%に達するのに対して、女性では11%程度となっている。このように、細かく見れば、女性のほうが若干経済的に豊かな階層の出身ということもできるが、学歴のところで見られたほどの差異はない。もちろんこのことは、主観的な評価であるから、客観的な裏づけがあるわけではない。総じて、大学人の出身階層がとりたてて高いとはいえない。経済的なレベルでは、平均的ということができるのではあるまいか。

どの職業にも通じることであるが、親の職業を子どもが受け継ぐという傾向が少なからず見られる。もちろん、近代的な組織においては、親の地位を自動的に、子どもが受け継ぐことはできないが、親が大学人であったり、研究者であったりする場合は、それが子どもにとっても、自己の職業として意識される割合は当然高いであろう。表2-7は、祖父、祖母、父親、母親、きょうだいといった家族や親族の中に、研究者がいるかどうかをたずねた結果である。父親をみると男性の11%が研究者であり、女性では14%が研究者であった。

この数値を高いとみるか、低いとみるかは判断の別れるところであるが、職業全体に占める研究者の割合はわずかであり、確かに受け継がれる傾向があることは確認できたように思う。一方、母親をみると、男性、女性ともに1%にも満たない結果となっている。研究職についている女性がもともと少ないうえに、親の世代ともなると、その数はさらに限られたものになる。また、女性研究者の中には生涯を独身で過ごすことが、少なくないことがこのような結果となっているのであろう。自分以外に「きょうだい」の中に研究者がいる割合は、男女ともに15%程度である。このように家庭的な背景をみてくると、両親の学歴という点では、男女間に有意な差がみられたのに対して、家庭の経済状況や、研究者としての再生産化の程度では、男女間に有意な差はみられなかった。

(3) 結婚率

結婚についてたずねたのが表2-8である。今日では、女性の大学人には独身者が多いというイメージも払拭されつつあるが、我が国のみならず、女性の大学人の中には独身者が多いことが確認されている⁽³⁾。この調査では、表2-8にみるように男性の93.7%が既婚者であるのに対して、女性では61.7%とかなり低くなっている。

また、配偶者が研究者かどうかをたずねてみると、全体としては配偶者もまた研究者という人は、全体の17%であるが、女性の場合は59%と、この割合はさらに高くなっていることがわかる。

表2-7 研究者と結婚

	男性	女性	全体
結婚している割合	93.7	61.7	85.8
配偶者も研究者である割合	8.2	59.0	17.1

2. 研究活動と達成度

次に、研究活動の状況と、それをどのように評価しているのか、この点を検討していきたい。次頁の表2-9は、大学教員の社会的役割と考えられる4つの機能－「教育活動」「研究活動」「学内の管理・運営活動」「社会サービス活動」－を取り出し、それぞれについて、どの程度重視しているかをたずねたものである。

表2-9 大学教員の社会的活動とその重視度

		大変重視 している	重視して いる	普通	重視して いない
教育（授業）活動	男性	37.3	42.1	17.0	3.6
	女性	35.2	43.9	18.9	2.0
研究活動	男性	63.0	30.2	5.8	1.0
	女性	45.9	40.2	13.4	0.5
学内の管理・運営活動	男性	7.6	26.7	45.8	19.9
	女性	3.1	17.6	61.1	18.1
社会サービス活動	男性	5.9	24.8	40.1	29.3
	女性	1.6	15.5	46.0	36.9

それらを検討してみると、男女間で有意な差のないのは「教育活動」に関してのみである。この項目については、「大変重視している」が男性で37.3%、女性では35.2%、また「重視している」は男性が42.1%、女性が43.9%とほとんど差がないものとなっている。それ以外の3項目では、「重視」の割合が、いずれも男性において高くなっている。例えば「研究活動」をみると、男性の63.0%は「大変重視している」のに対して、女性での割合は45.9%となっている。また、「学内の管理・運営活動」をみると、「大変重視している」「重視している」を合計した割合は男性で34%、女性で21%となっている。もっとも女性の場合は、「講師・助手」という管理・運営活動を期待されるポジションの周辺部に置かれていることも考慮する必要があるだろう。全体を通して、教育活動以外の領域においては、「研究活動」「学内の管理・運営活動」「社会サービス活動」のいずれにおいても、

全般に男性の活動意欲が高くなっていることを理解することができよう。

なお、4つの社会的役割では男女ともに、研究活動をもっとも重視していることがわかる。以下では、その研究活動に焦点化して議論を進めていきたい。

研究活動についての自己評価をたずねた結果が、表2-10である。これは、これまでの研究活動の成果を日本にいる同じ専門分野で同年輩の研究者と比較して、どの位置にあるか、量と質それぞれについての主観的判断をたずねたものである。

表2-10 研究活動の量と質に関する自己評価

	量について		質について	
	男性	女性	男性	女性
上位	29.2	10.5	40.0	19.0
中位	48.5	50.3	47.6	49.5
下位	22.3	39.3	12.4	31.6

それをみると、自分が上位にあると判断している人の割合は、量と質の双方において男性の方が高くなっている。量についてみると、自分が「上位」にあると思っている人の割合は、男性で29.2%なのに対して、女性では10.5%に過ぎない。また、質についても男性の40.0%が「上位」にあると判断しているのに対して、女性では半数以下の19.0%に過ぎなくなっている。もちろん、主観的判断であるから、研究成果における女性の、客観的な劣位を示しているとはいえない部分もあるだろう。女性が全般的に謙譲の美德をもっていると考えられなくもないからである。しかし、この主観的な判断は、学術賞などの客観的な指標と、ある相関関係をもっていることも認められている⁽⁴⁾。

表2-11は、学術賞の受賞経験をたずねたものである。これをみると、男性の18.3%までが受賞しているのに対して、女性の場合は12.3%に過ぎない。つまり、賞を基準にみても女性の研究活動が男性に比較して劣位にあることがみてとれる。

表2-11 学術賞の受賞経験

	男性	女性
ある	18.3	12.3
ない	81.7	87.7

とはいえ、女性の研究環境を無視することはできない。研究はもちろん、個々人のアイデアや意欲が支えるものであるが、それらは真空状態にあるのではなく、多様なコミュニケーションのネットワークや、研究の風土が規定する部分が大きいためである。そこで、被調査者の所属する研究室の風土（その研究室が研究志向か教育志向か）に関してたずねた結果が次頁の表2-12である。

これをみると、どちらかといえば男性の方が「研究重視」の組織に所属していることがわかる。「研究重視」の機関に所属している人の割合は、男性が41.8%であるのに対して、女性は26.5%となっているからである。

表2-12 所属研究室の風土

	男性	女性
とりわけ研究を重視する研究室	15.8	9.9
どちらかといえば研究を重視する研究室	26.0	16.6
研究と教育をほぼ等しく重視する研究室	44.2	54.1
どちらかといえば教育を重視する研究室	11.6	13.8
とりわけ教育を重視する研究室	2.4	5.5

同じように、表2-13は回答者の所属する研究室の研究活動を、日本の大学のなかで専門分野の同じ「研究室」と比較してどのような位置にあるのか、量と質のそれぞれについてたずねた結果である。

表2-13 所属する研究室の研究活動

	量について		質について	
	男性	女性	男性	女性
上位	25.6	14.4	33.8	18.1
中位	54.9	52.3	52.5	52.1
下位	19.6	33.3	13.7	29.8

これをみると、男性が所属している研究室（組織）は、女性が所属している研究室（組織）よりも学問の生産性が高いことがわかる。量についていえば、男性の25.6%が（主観的に）上位にランクされる研究室に所属しているのに対して、女性ではこの割合は14.4%に過ぎない。同様に質の面から所属する研究室をみると、男性の33.8%までが上位にランクされる研究室に所属していると回答しているのに対して、女性は18.1%であった。つまり、男性の方が研究の刺激があり、より研究のエートスを重要視する研究室に所属しているのである。

3. 研究者としてのキャリア形成

戦後になり、制度的に研究者を養成する機関は大学院となった。今日では、大学院の入学をまって、研究者としてのキャリア形成が始まるのである。しかし、それ以前の小・中学校や高校、大学時代にも、研究者を目指すにいたった動機や、研究者としてのこれまでの活動に影響を与えたことがらがあるはずである。ここではライフサイクルの視点から、どのような動機、契機が研究者へと導き、また、どのようなプロセスの中で研究者としてのキャリアを積み上げてきたのか、このことを問題にしたい。

(1) 大学進学と周囲の助言

まず、大学進学の時点を振り返ってみよう。表2-14は大学進学の際に、誰の助言を参考にして学部を決定したかをたずねたものである。これをみると、「自分で決めた」と回答した者は男性では75%に達するのに対して、女性では58%とかなり低くなっていること

がわかる。つまり、どのような学部を選択するかという点において、他者の意見を参考に
する度合が女性ではなかり高くなっているのである。

表2-14 大学進学と助言

	男性	女性
自分で決定	74.6	58.1
父親の助言	11.5	17.2
母親の助言	6.7	14.8
高校教師の助言	7.8	12.3
友人の助言	2.4	2.0

では具体的に誰の助言を参考にしたのか、ここでは、「父親」「母親」「高校教師」
「その他」として、それぞれ選択してもらった（複数選択）。

それをみると、いずれの項目においても、助言を受けた割合は女性の方が高くなっているが、統計的にみて特に有意な差があるのは「母親」の項目である。大学・学部を選択するにあたって、母親の助言を受けたとする者は、男性では6.7%なのに対して、女性では14.8%に達している。

それでは具体的に、どのような助言を誰から受けたのであろうか。母親以外の人も含め、具体的な助言の内容について検討してみよう。あくまで事例の域を脱しないが、以下のよう
なものがあった。

- ・これからは女性でも社会で活躍する時代になるから、しっかり勉強して、なんらかの専門職につくことが望ましい（母親、人文科学系、45才）
- ・もっとも強い影響を与えたのは旧制女専教授である。語学と経済学的な発想を身につける事が重要であると言われた。その影響で数人が旧制大学に進学した（社会科学系、66才）
- ・女性だから女性でもなじめる学部に進学した方がよい。また、これからはコンピュータの時代だから、ぜひそれを勉強しておくようにという助言があった（父親、人文科学系、37才）
- ・今からの女性は職業人としても活躍できるように学力を身につけなければならない（母親、体育学系、57才）
- ・教育の世界は比較的男女平等であること（父親、人文科学系、52才）
- ・女性が自立していくには教師が一つの道であり、英語に関心を持っているのでそちらの方面に進むとよい（教師、社会科学系、56才）
- ・これからの時代は女性も社会的に通用する力をつけるべきだ（母親、社会科学系、64才）
- ・クリスチャンであった父は、男と女に創られた人間は性を越えて平等である。神様は男性も女性も同じ人格につくられた。女性も学問すべきである。キリスト教的な人格論に立って教育する東京女子大学への受験も父にすすめられた（父親、人文科学系、60才）

以上は、今回のアンケート調査から得られた回答のほんの一部ではあるが、女性の自立、男女平等という視点からの援助、アドバイスの多いことが特徴の一つとなっている。

（2）研究者を意識し始めた時期と背景

ところで、大学の教員が現在の専門分野において研究者となることを意識し始めたのはいつ頃であろうか。また、そこには男女間でなんらかの差がみられるのであろうか。次頁

の表2-15では、研究者になることを意識し始めた時期が男女別に示してある。これを見ると、研究者になることを意識し始める時期は男性の方が若干早い傾向を、読み取ることができる。

表2-15 研究者を意識した時期

	男性	女性
小学生のころ	4.5	4.2
中学生のころ	6.4	4.7
高校生のころ	12.1	10.4
大学生のころ	46.4	44.0
大学卒業以降	30.7	36.8

しかし、統計的にはほとんど有意差はみられないようである。男女ともに、大学生の頃がもっとも多く、男性の46.4%、女性の44%までがこの時期に研究者になることを意識し始めたと回答している。また、大学卒業後についてみると男子では30.7%であるのに対して、女性では36.8%となっている。

では、現在の専門分野において研究者になることを意識し始める契機としてどのようなことがあったのだろうか。自由記述によって回答を求めた。

- ・ローマの大学で、ある先生の講義を受けたときから。このような分野はまだ日本には殆ど無いが、非常に大切であることを意識した(人文科学系、49才)
- ・論文を研究誌に掲載してもらい、批判や励ましをもらったこと。他人からの薦め(人文科学系、51才)。
- ・夫が重病、幸い九死に一生を得たあと。病院で長期にわたり看病し、隣室の人たちの死をまのあたりにしたとき、人の命のはかなさを知り、やりたいことをやらねばと決心した(社会科学系、64才)
- ・キュリー婦人の伝記を読んで(理学系、39才)
- ・勉強が好きだったからで、特に契機というものはないが、強いてあげれば、心理学科教授(女性)の輝くような研究者としての生き方が素晴らしいと思ったことか(社会科学系、62才)
- ・ギリシア政府奨学留学生として3年以上滞在し、地中海性貧血症を通じ遺伝学に興味をもった(医歯学系、41才)
- ・大学院進学を大学の先生より勧められたこと。学位を取得し母校の教壇に立つ気持ちがないかたずねられたこと(理学系、49才)
- ・心理臨床の実践家を専門としての道を歩むつもりであったが、日本の心理臨床家の養成とその研究がおくれていることを痛感したため(社会科学系、56才)
- ・ノーベル賞受賞者の自伝などを読んで(社会科学系、67才)
- ・恩師との出会い
- ・元々農学部で栄養化学を学び、県の脳卒中研究所に勤務中に、指導者もいないことがあったが、生化学をもう少しきちんと勉強しなければ先へ進めないと感じ、医学部に籍をおいた(医歯学系、46才)
- ・高校1年の理科1(生物)で遺伝学について学んだこと(医歯学系、26才)
- ・大学院の先輩、友人、教授からの刺激(人文科学系、64才)
- ・父のいとこが言語学者で、その研究態度を尊敬していたから。また、その子供が国語学者で、その研究態度を尊敬していたから

要するに、現在の専門分野で研究者になろうと意識し始める契機は多様である。ただ、研究者モデルの存在や指導教官、友人などからのサポートが重要な要因になっていること

がわかる。考えてみれば、研究者の世界は今日においてもなお、男性中心の社会である。その中で研究者を目指そうと思えば、とりわけ女性の場合、研究者になるためのサポートシステムが重要な要因になるのであろう。

(3) 大学院進学

ところで、研究者になるためには大学院に進学する必要がある。今日では大学院に進学することが、研究者としての道を歩む第1歩でもある。しかし、そうした選択が平均的な女性のライフサイクルからすれば、結婚・出産という出来事と重なることになり、男性と異なるプレッシャーがかかることになる。ここでは、大学院の進路決定に際して葛藤を起こしたり、何らかの問題が生じたりした経験、およびそれらの問題をいかにして克服したか、自由記述の形でたずねた。これについて紹介をしたい。

- ・4年生の時、就職を考えて幾つか会社説明会に出席したりもしましたが、自分の能力を生かせる様な場所が見当たらなかった。留学試験をパスした事が大学院への進学を決意させた(人文科学系、38才)
- ・大学卒業時には大学院を決断できず結婚後に大学院に進学した(人文科学系、45才)
- ・父の破産があり、アルバイトと奨学金でしのいだ。結婚問題があったが、田舎の両親の勤める縁談を断って進学した(人文科学系、45才)
- ・結婚が遅れるのではないかと心配が家族にはあったが、自分がしてみたいことを一生懸命してみようと思いつめた(家政系、48才)
- ・父が女性としての平凡な家庭生活を望んだが、私の家は女性でも「勉強したい」という点では非常に協力的で、すぐ理解してくれた(社会科学系、55才)
- ・もともと理科系の学科に興味があったので、理科系の大学院をやり直そうと考え、どうせなら外国でと思い、カリフォルニア大学の留学許可を取ったが、既に婚約者がいたため結局果たせず、そのまま文科系の大学院を続けた(人文科学系、59才)
- ・将来の生活に対して心配だった(人文科学系、40才)
- ・学費をどうするかについて困ったが、高校の時間講師の職を見つけ、奨学金ももらえたので大丈夫であった(人文科学系、50才)
- ・学部では「世界史」を専攻したが、大学院では「日本史」をしたくなったため、受験のとき理解してもらったのに困った。また、実際専攻を変更したため、大学院での勉強は基礎知識不足で苦労した(人文科学系、51才)

葛藤の要因には多様なものがあるが、とりわけここには、学問研究というユニバーサルな世界と、結婚や出産というパティキュラーな世界との葛藤に直面する姿をかいまみることができる。

(4) 女性研究者の再生産

このことと関連して、女性研究者は女性によって育てられる傾向がある。表2-16に示すように、これまで大学院生を指導し、研究者を輩出した経験をもつのは男性が325人(サンプル617人の中の52.7%)に対して、女性は46人(サンプル203人の中の22.7%)とかなり少なくなっている。しかし、その中で女子院生を指導し、研究者を養成した者の割合をみると、男性では102人(31.4%)であるのに対して、女性では32人(69.6%)と

かなり高くなっているからである。この背景には女性研究者が女性研究者を育てるにあたっての親和性があることも一つの理由であろうし、専攻分野が「女性領域」ということで一致する場合もあろう。女性教員は大学院生に対してモデルとしての役割を提供することになるし、女性としての共通の悩みを克服してきた先輩として、適切なアドバイスを提供することもできる。そのことが、女性研究者が女性研究者の下から育っていくという傾向の背景にあるのであろう。

表2-16 大学院生の指導経験と女性研究者の輩出率

	サンプル数	院生指導+研究者輩出	女性研究者輩出
男性	617	325 (52.7)	102 (31.4)
女性	203	46 (22.7)	32 (69.6)

表2-17 科学的社会化にとっての重要な時期

		大変重要	重要	どちらとも	重要でない
小学校時代	男性	13.9	23.1	36.7	26.3
	女性	14.7	26.5	38.2	20.6
中学校時代	男性	11.7	28.4	41.6	18.5
	女性	13.3	34.6	38.8	13.3
高校時代	男性	19.3	33.4	32.8	14.5
	女性	17.7	47.7	25.3	9.4
大学時代	男性	39.7	37.9	17.2	5.2
	女性	40.1	45.9	11.1	2.9
大学院時代	男性	64.0	27.2	6.5	2.3
	女性	70.9	21.8	6.4	0.9
30歳代	男性	51.8	31.4	14.8	2.1
	女性	50.0	33.3	12.3	4.4
40歳代	男性	38.1	35.8	24.4	1.7
	女性	52.7	33.3	11.8	2.2

(5) 科学的社会化とライフサイクル

さて、女性が研究者として自立し、研究者としてのポストを獲得することは、男性に比較してより多くの困難が生じる。これらの実現に向けては、周囲の援助や豊かな人間関係に支えられる必要があるだろう。このことを社会化の問題として検討していきたい。

まず、研究者としての(基礎的な)能力や行動様式・心構えなど研究活動に影響を与える資質を身につけるにあたって、どの時期が重要であったと考えているのだろうか。これまでの研究生生活をふり返って回答してもらった結果が表2-17である。

これをみると、男性、女性ともに大学・大学院学生の時代から、30歳代、40歳代に

かけての時期が科学的社会化にとって重要であったと回答していることがわかる。特に大学院生時代は9割以上が「大変重要であった」「重要であった」と回答している。研究者としての基盤を形成する時期として、大学院時代は特に重要な位置を占めていることが伺える。男性と比較して差が大きいのは「40歳台」である。40歳台が「大変重要である」と回答した人の割合は、男性が38.1%であるのに対して、女性では52.7%に達している。出産・育児などが30歳代での学問研究にしわよせすることが、後の40歳代を社会化の時期として、重要なものにさせているのかもしれない。

ではそれぞれの時期がなぜ、重要であったのだろうか。そのことを探るために、具体的にそれぞれの時期に、どのような体験や人間的な出会いがあったのか、自由記述の回答を整理しつつ検討してみた。以下は女性の7割までが「大変重要である」と回答した、大学院時代以降について検討したものである。

【大学院時代】

- ・留学先のフランスでの指導教官、その他の先生方の博識さと、教育・研究への情熱から見習うべきものが非常に多かった（人文科学系，36才）
- ・研究方法について、指導教授、先輩、大学院生から指導を受けたとともに、ともに討議して自ら方法を考える能力を育てた（医歯学系，36才）
- ・大学院生同志で、研究テーマについて話し合う機会を多く持てた（人文科学系，35才）
- ・博士課程はイギリスの大学であったため、それまで苦手であった英語に自信が付き、英語での論文や学会発表ができるようになった。指導教官や同じ教室の研究者たちからイギリス人の得意とする博物学的な思考をかいまみることができた（農学系，48才）
- ・研究者としてのテキスト解説の訓練がなされた（人文科学系，37才）
- ・良い研究テーマと史料にめぐりあえた。論文指導教官にマンツーマンで、直接指導・訓練された（教員養成系，29才）
- ・論文指導教官の暖かい指導。買いかぶられているのではと思われるほど、可能性を信じて下さったこと（理学系，42才）
- ・研究を熱心に行っている諸先輩を見て研究の面白さや研究者としての態度を学んだ（医歯学系，32才）
- ・どちらかという一人勉強していたが、ゼミを通じて先輩にめぐりあえ、複数の視点でものを見ることを学んだ（人文科学系，38才）
- ・かなり厳しいゼミの指導の中で、研究者としての姿勢をえた（理学系，44才）
- ・4回生から3年間、一つのテーマについて実験を進めていく中から、将来研究者として身を立てて生きたいと考えるようになった（家政学系，28才）
- ・指導教官により、研究者としての基本的な姿勢を身につけた（医歯学系，33才）
- ・指導教官に教えられることが本当に多かった（54才，社会科学系）
- ・好きな分野で誠意を尽くし努力しようと思うようになったのは、指導教官、先輩、当時は恋人であった夫の影響が大変大きい（人文科学系，33才）
- ・研究テーマ設定の独自性や、論証展開の綿密さで説得力のある論文を書くように厳しく指導された（人文科学系，63才）
- ・二度の留学や専門領域を異にする研究者との接触を通じて、知的好奇心、研究への意欲を高めることができた（家政学系，33才）
- ・自分の研究室の出身者に限らず、多くの先輩に出会い、様々な研究者としてのスタイルを見て自分なりの目標やモデルを形成することができた（教員養成系，34才）
- ・在学の大学院をベースにして、他大学、あるいは在野の研究者の指導、先輩からの助言が大きく影響した（芸術系，51才）
- ・40才で入学した。他分野であったが、私の研究を発展させる為の親身の指導があった。研究者とし

- ・ での在り方を学んだ（社会科学系，46才）
- ・ 指導教官から研究の厳しさと物理的考察の面白さを教わった（理学系，59才）
- ・ 院生の研究環境が自由で素晴らしく、毎日のように書庫に入り浸って、好きな本を読み、教官と話し合うことができたこと。また、院生同士の自主的研究会での知識の吸収などが可能だったこと（社会科学系，55才）
- ・ 仲間とのコミュニケーション。女性が差別されていた（人文科学系，57才）

【初職当時・30才台】

- ・ ○○研究センターに配属されて以後は、優れた研究者に囲まれ、いつも良いアドバイスを受けており、このうえない環境であると思っている。スラブ研究の優れた研究者にも出会う機会があり、啓発される所が多かった（人文科学系，59才）
- ・ 若手の職場の同僚との研究会で互いに刺激があった。自分の専門外の事を専門とする同僚との出会い恵まれ、視野が広がった（人文科学系，36才）
- ・ 論文を書くにあたり、多くのアドバイスを同僚教師から得る事ができた。グループ研究を通じて、研究テーマについて様々な角度から考えることができています。
- ・ 上司となった教授から超微細形態学的な手法をたたき直され、様々な新しい手法を身につけられて、学部・大学院時代に興味を持ったテーマにこれらの技法を応用して研究成果が上げられるようになった。国内、海外での学会に出席したり、短期間ではあるがハーバード大学、ハワイ大学に滞在する機会を与えられて、同じ分野を専攻する人々と面談をえ、それを機に共同研究をする下地ができた（農学系，48才）
- ・ 同僚となった先輩から、時間があれば机に向かい、本（資料）を読み、広いベースを作ることの大切さを学んだ。自発的な研究姿勢の大切さを教授から学んだ（医歯学系，60才）
- ・ いろいろな研究会への参加。ただし、自分の能力がない間はなかなか他の研究者と話すことができず、無口になった。自分にあった問題を見つけるまではそんな状態が続いたが、問題が見つかることについての様々な話題や質問で交流が初めて意味を持つてくる。同じ研究分野のフランス研究者との手紙による交流及び国際シンポジウムでの出会いと意見交換、国内の同じ研究分野の研究者との研究情報交換（理学系，42才）
- ・ 能力、見識に優れた同僚教師から触発されることが多かった。また、外国の研究者との出会いから新たな意欲と目標をえた（社会科学系，42才）
- ・ 職場の上司により研究者としての姿勢を教えられた（工学系，45才）
- ・ 結婚、出産、育児に疲れている時に、科研費をもらえたこと。その時の大学の研究者との交流により、自己の特徴を認識できたこと（工学系，49才）
- ・ 身軽に全国を歩き回る。ゼミ頭のような地位にあり、若い院生と付き合う。委託論文多し（社会科学系，59才）
- ・ 若くして学んだ物理学を手段に生理学を理解することに興味をおぼえた。日本生理学会で○○先生に出会い、自分の進むべき道が決まった。その後はポストがないまま、研究生活を送った。先生の指導のもとに、日本バイオロジー、国際バイオロジー、脈管学、微小循環と私の視野は広がりました（理学系，51才）
- ・ 同じ所属研究室の同僚教師並びに女子教官との交流。また合同研究により、教育現場の問題点を見いだせた。また、社会的活動が広がり、研究者としての視点が定まった（芸術系，51才）
- ・ 分析化学でキレート滴定の日本での創業者の先生の雑用係となったが、研究のお手伝いをしているうちに発表の仕方や論文の書き方などをおそわり、研究に興味を抱いた（工学系，55才）
- ・ 指導教官は研究はやる気がなかったが、自由にさせてくれたことが、私の研究の楽しさにつながった。自分の所属の大学の若手研究者とグループを作り、厳しいゼミ、競争の世界に身をおくことで、がむしゃらに勉強をした（医歯学系，50才）
- ・ 戦後もぼつぼつ終わり、また旧態の女性の進出を拒む平静さ（？）に戻り、研究者への道は理解されなかった。これに対する反発が一層強まった。そのうち助手としての研究活動が許されるようになる。学内学術雑誌への投稿も緩和され始めた（家政学系，62才）
- ・ 30才代は自由に他大学の同一分野及び関連分野の研究者との研究会で楽しく研究できた。学会内のシンポジウム企画者として立案し、若手とともに新しいテーマを扱うことができた（人文科学系，63才）

- ・国際連合開発計画での業務を通じて途上国の開発問題に関わる機会を得た。また、国際的な職場環境を得たことにより、人的ネットワークが拡大し、現在の研究に役立っている（家政学系，33才）
- ・30才になるまでは研究者として職を持続しようという意識はなかった。子供を生み、仕事と育児生活の両方で非常に辛い時期に、主婦になるか、もっと楽な仕事に転職するか、研究者として続けるか真剣に考え、研究者を続けようと決意した（医歯学系，43才）
- ・同僚、先輩から、大学教員としての心構えと研究に対する姿勢を学んだ。内地留学の経験から、中央で活躍する多くの研究者との交流を通じて、重要なヒントをえた（人文科学系，33才）
- ・県庁の行政栄養士として奉職、チーム医療の必要性を痛感、このことから研究のヒントを得た。養母の中風により、また子供の成長がライフサイクルにおける適切な栄養摂取に関する研究の重要性を認識した。12年あまりのチーム医療の中での実践活動の経験は、研究テーマの重要なヒントとなった（保健学系，62才）
- ・オリジナリティをもつ事の重要性とそれを生かして自分の力でやってみることを進めてくれた上司との会話（保健学系，43才）
- ・育児のため引退。15年間の不遇の時代、先輩との共著、新聞への寄稿、調査母体を組織して大小の調査の実施、社会教育に登壇と、あらゆる努力をした。肩書なしの調査、取材、執筆は腕を鍛えもしたが、時間を無駄にした時期でもある。〇〇教授に、調査プロジェクトに加えていただいた。43才で現大学に講師として就職（人文科学系，58才）
- ・アメリカに留学し、更に研究方法が勉強できた（38才，医歯学系）
- ・私は経済学部経済学科の出身であり、会計学とは余り縁がなかったが、講座の教授が語学に優れ、また論理的な考え方をする人であったため、いくつかの刺激を受けた（例；学者は根にはいるまで仕事をせよ）。プロ精神を持たねば続かないことを体得した。30代になると、海外の学者の仕事が気になった。この年代の終わりに留学できたことは、後の研究方向を決定したと思う（社会科学系，66才）
- ・現場へ出たため、理論と実践との差を知ることができた。その後の研究に役立った。研究所に移り、大学での地位を築き上げていくにつれて、そのなかで研究への方向が見え始めてきた（教員養成系，41才）
- ・アメリカで生化学研究室、細胞物理学研究所に努め、世界的学者にも出会うことができ、大いに刺激を受けた（理学系，65才）
- ・学会での第一線で活躍されている方々との接触は、非常に重要なものであった（医歯学系，44才）
- ・企業での技術関連の上司、同僚に恵まれた。恵まれた環境にあった。大学、研究機関との共同研究で研究、開発面でのライフワークを見いだすことができた（工学系，60才）
- ・孤独であった。今から考えるとこの時期に優秀な共同研究者に出会いたかった（社会科学系，43才）
- ・対照的な二人の上司から指導を受け、基礎的な研究、社会的な研究視野を広げることができた。働く女性としての人との出会い、子育て、夫婦の協力体制、生活環境のすべてが研究と結びついた（医歯学系，43才）
- ・子育てに追われる中で、教授は常にくじけないようにとの配慮を続けて下さった。現在のテーマに取り組みきっかけを与えて下さった（家政学系，53才）
- ・専任職につかず、家庭にあった時代であるので、同じ専門の女性の仲間との研究会や読書会で共に励まし合い、刺激しあって研究を続けた（人文科学系，52才）
- ・二人の子供の幼児期で苦戦しながら、留学（子供を両親に預けた）。博士号取得など教職でやるべき事の基盤が何とか達成された。住み込みの手伝いがいたので産休以外職務を中断しないでこられた（医歯学系，55才）
- ・30代も終わりの38才の時、ケンブリッジ大学に留学。大いに眼を開かれる。イギリスの大学らしい大学に触れられた事にも啓発され、人々との交流が研究の喜びを増した（人文科学系，50才）
- ・学園紛争の時代であり、落ちついた研究ができなかった。子育てで忙しい日々であったが、子育て経験は女性論と新しい視点を見いだせた。母親としての責任について多くを著述する力となった（人文科学系，60才）
- ・ドイツ留学から帰った後、就職が困難で、あちこちの非常勤講師をしたが、どこでも同様な境遇にある多数の人間がいて、それぞれ悩みながらも研究を続けたいという意志を捨てずにいる姿をみて、私も諦めないぞという決心をすることができた（理学系）

事例紹介が長くなってしまったが、大学院生時代の特徴は、指導教官の重要性であろう。「指導教官に教えられた」－当然のことのように思われるが、それが科学的社会化という観点からみて、いかに重要であるか。この点で、研究者養成を役割としている大学に有能な人材を配置していくことが、いかに重要であるかが理解されるであろう。

30才台になると、一般には大学院での科学的社会化を基盤に、より広い社会での活動が始まる。今まででの、大学院での師弟関係を離れ、職場を獲得し、その中で学問研究を遂行することになる。自由記述の分析を通じて、そこで特に重要であったと判断されるのは、上司による指導や励まし、世界的学者との出会い、同僚との学問的ネットワーク、そして、海外留学による新しい世界の見聞や刺激といったものである。ここでも、学問研究上のネットワーキングが重要なものとして、認識されていることがわかる。ネットワーキングとは、単なる人の結びつきを指して使われる言葉ではない。その結びつきの中から自己革新、創造へとつながっていく可能性を秘めた、そうした概念であることが重要であろう。

(6) 研究者として成長する上での重要性

これまでの記述を整理する意味もあって、一人前の研究者として成長するうえでどのような事柄が、どの程度重要であったと考えているのだろうか。そのことを検討するために23の項目を提示し、それぞれについて「大変重要であった」「少し重要であった」「どちらともいえない」「あまり重要でなかった」「全く重要でなかった」かを、選択してもらった。具体的に23の項目とは「自分の才能」「自分のパーソナリティ」「研究に対する情熱」「自分の性別」「自分の育った家族の環境」「自分の配偶者の協力」「自分の宗教・信条」「自分の基本給与」「自分の受けた初等・中等教育」「自分の受けた学部教育」「自分の受けた大学院教育」「自分の指導教授」「留学経験」「世界の学界をリードする研究者の下で研究を行った経験」「研究情報データベースへの接近」「所属大学・学科の風土や知的雰囲気」「所属大学・学科の研究設備・設備」「自分の研究費」「研究者の支えとなる若手研究者の存在」「他の教員とのコミュニケーション網」「独創性を求める科学の規範」「科学の先取権競争」「研究活動以外の仕事を少なくすること」である。男女を問わずにデータを検証してみると、最も重視している項目としては「研究に対する情熱」があり、73.9%までが「大変重要であった」を選択している。これ以外で、「大変重要であった」を選択した者の割合が比較的多かったのは「自分の指導教授」(51.7%)、「留学経験」(51.5%)、「世界的研究者の下で研究を行った経験」(46.5%)、「自分の受けた大学院教育」(41.6%)、「自分のパーソナリティ」(36.3%)、「自分の才能」(34.1%)などの項目である。設備、施設、資金などのハード面にわたる条件は、たしかに重要であるとの認識はあるものの、大変重要であると考えている者は、必ずしも多くはない。

このデータを男女別に検討してみると、家庭的背景や学校教育などの項目において、女性はいずれも重要であると考えていることがわかる。表2-18に示すように、とりわけ「自分の配偶者の協力」の項目では、男性の26.2%が「大変重要であった」と回答しているのに

対して、女性では57.4%に達している。また、「自分の受けた大学院教育」の項目では男性の38.5%が「大変重要であった」と回答しているが、この割合は、女性では53.5%に達しているのである。

表2-18 研究者として成長するうえでの重要度

		大変重要	少し重要	どちらと いえない	重要でない
自分の性別	男性	4.2	15.7	44.2	35.8
	女性	8.2	13.7	38.8	39.3
自分の育った家族の 環境	男性	12.4	35.5	28.1	24.1
	女性	20.7	35.3	19.0	25.0
自分の配偶者の協力	男性	26.2	41.3	19.7	12.8
	女性	57.4	27.1	8.2	7.8
自分の受けた学部教 育	男性	20.4	38.9	22.6	18.1
	女性	27.2	47.1	17.8	7.9
自分の受けた大学院 教育	男性	38.5	35.3	15.7	10.6
	女性	53.5	26.7	14.7	5.2

反対に男性の方が女性に比して、「大変重要であった」と回答する割合が多い項目としては、「自分の研究費」「研究の支えとなる若手研究者の存在」「独創性を求める科学の規範」「科学の先取権競争」などの項目がある。概して、男性が学問生産 (scientific productivity) に直結する項目を重視する傾向があるのに対して、女性の場合は研究を支えるバックグラウンドとなる項目で、男性より「重要である」と回答する傾向があるように思われる。

大学における女性研究者 —まとめにかえて

本稿は、『全国大学職員録』をもとに調査対象者を選定し、質問紙調査を実施した結果を取りまとめたものである。はじめに断ったように、調査対象者を検討してみると、キャリアの形成において相違があるので、研究の達成度など、必ずしも同一の地平上で比較することはできない。むしろ、「正規の」、あるいは支配的な研究者養成ルートから外れていたり、研究補助者的な役割におかれているという現状自体が、大学における女性研究者の問題を顕在化させている事象なのである。

この調査研究から、女性の特徴として研究指向の機関に勤務している割合が低いこと、その結果、研究への指向性が男性に比して弱いこと、実際の学問生産 (scientific productivity) の側面での自己評価が厳しくなっていること、さまざまな支援態勢（とくに指導教官、上司、同僚、配偶者などの人的なネットワーク）が女性の研究活動を促進していくうえで欠かせないし、また、実際に必要としている重要な要素の一つであることなどが、

明らかとなった。

確かに戦前においては、大学自体が女性の入学を、一部例外はあるにせよ認めていなかったもので、大学における教育研究活動は男性によって担われた。ある女性は私たちの実施したアンケート調査の中で次のように語っている。「研究者には二つのタイプがあると思います。一つは学歴社会のルールにしたがって大学院を出て、学位を取り、その教室のテーマの下に研究を進め、研究者として大成していくタイプ。このタイプが日本の社会では一番摩擦が少なく安全な方法で、日本の研究者の多くはこのようにして育っていると考えます。二つは、戦前、戦後の女性科学者に多く見られるタイプ、又は日本を脱出して外国で研究している研究者にみられるタイプと考えますが、何らかの理由で学歴社会の軌道に乗れず、独自で苦労して研究者の道を切り開いてきたタイプ。このタイプの研究者は、日本の社会では往々にして評価されずに終わる例が多い（理学系、51才）」。「彼女の体験から語られたことは事実であろう。大学に受け入れられなかった女性で、海外の大学に学んだ人は少なくない。

しかし、戦後50年が経過しようとしている今日にあっても、大学の教授職は、依然として著しく男性優位である。それは、数の上だけでなく、研究の成果という観点からも妥当している。もちろん極めて優れた研究業績を上げている女性が少なからず存在していることも事実であるが、平均的にみれば必ずしも納得のいく研究者生活となっていないのではないだろうか。大学は社会の進歩に対して重要な貢献をなさなければならないが、しかし、大学という組織自体の体質は保守的であって、男女平等が必ずしも実現されているとは言いがたい現状がある。また、女性の研究活動に対する支援態勢が必ずしも十分ではない。このアンケートに発言を求められた二人の女性の言葉を引用してみよう。

研究は基本的に個人の意欲・努力による。どのような豊富な予算、環境に恵まれても変わらない。したがって、個人の意欲、努力が報われる人間関係作りが必要である。しばしば能力もなく、管理のみ追いつめる教授によって、どれだけ能力のある若い研究者がいじめられてきたことだろうか。……全国どこの大学の研究者（理系）も、助教授以下は講座制に苦しめられている。……女性 研究者に対するひどい差別偏見をなくしてほしい。大学はこの点についても非常に保守的である（医歯学系、50才）

自分の体験として、大学、大学院を通じて「女性は不利」と思ったことが何度かある。多くの場合、研究がある程度の期間（年単位、それとも5年とか10年）を要求するのに対して、女性が大学卒業、大学院修了する頃は、結婚、出産を考え始める頃のため、いろいろな意味で最初の選択幅が狭い。さらに既婚、子持ちの女性は、研究したくてもままたらぬ場合が多い。科学の進歩は日進月歩であり、途中休まねばならない者はしばらく取り残されるが、機会があれば再びチャレンジできるような場があればと思う。女性に限らず、最先端の流行分野以外にも評価、予算がつき、より多くの研究者が、日本の底辺を支え、固められる制度がほしい（理学系、32才）

大学における男女平等は、徐々に実現されつつある。すでに、高等教育機関への進学率では男子を上回り、4年制大学在学学生にしめる女子学生の割合は30.3%、大学院の在学比率においても修士課程で19.6%、博士課程で17.6%までになっている。しかし、大学教員に占める女性の割合を検討してみると助手も含めた全体で9.9%、教授層では5.5%、

助教授層では10.0%となっている（数値はいずれも平成5年度）。この数値を、そのままたどっていけば、将来においては大学教授職に占める女性の割合は大幅に増加することが予想されることになる。しかし、冒頭にも述べた「ガラスの天井」「破れた石油輸送管」という比喩が当てはまるようだと、将来は必ずしも楽観できない。女性の学問研究に対する支援態勢の構築が、今日においても求められている。

<注及び引用・参考文献>

- 1) 詳しくは加野芳正『アカデミック・ウーマン—女性学者の社会学』東信堂、1988年を参照のこと。
- 2) M. ハロウェイ、菅野理恵子訳「女性科学者はなぜ少ないか」『日経サイエンス』1994年1月号（Vol.24, No.1）、日本経済新聞社、147頁。
- 3) 例えばH. Zuckerman, J. Cole & J. Bruer, ed, The Outer Circle -Women in the Scientific Community, Yale University Press, 1991. を参照のこと。
- 4) 大膳 司『「重要な研究者」の形成に関する科学社会学的研究』（平成3年度二一世紀文化学術財団研究報告書）参照のこと。
- 5) 今井賢一『ネットワーク組織論』岩波書店、1988年を参照のこと。

(加野芳正)

第3章 科学的社會化の専門分野間比較

第1章において、大学人の科学的生産性と科学的社會化の特徴について概観した。そこでは次のような点が明らかにされた。

- ①生育家庭環境（学歴レベル、経済状況、研究者の有無）と大学人の科学的生産性の高低には、関連が認められない。
- ②これに対して、本人の学習歴（学位取得、留学経験）は、科学的生産性の高低と強く関連している。
- ③科学的社會化にとって重要だった時期を直接たずねた質問に対する回答によれば、大学院時代を挟む前後の時代が重要である。
- ④科学的社會化にとって重要な事項としては、研究に対する情熱や自分の才能・パーソナリティの他、指導教授など重要な他者との出会いがあげられる。

ところで、このような点について専門分野による違いはみられないだろうか。B.クラークも指摘しているように、大学人のキャリアは専門分野によって異なる（Clark, 1987）。科学的生産性の高低を分ける要因や科学的社會化にとって重要な時期・事項も専門分野によって異なるのではないだろうか。異なるとすれば、どのように異なるのか。このことが明らかになれば、科学的社會化についての理解をより深めることができるし、専門分野ごとの研究者養成制度や専門分野間の資源配分といった政策課題を検討する上での基礎資料ともなる。

以下、本章では、①科学的生産性の高低を分ける要因を専門分野別に検討し、②科学的社會化にとって重要な時期・事項についても分野別に検討する。さらに、③科学的社會化過程において専門分野を移動することの意義を科学的生産性の高低を手がかりとして検討する。

1. 生育環境・学習歴と科学的生産性

まず、大学人を専門分野別に分類し、生育家庭環境の違いが現在の科学的生産性におよぼす影響を検討した。ここで専門分野は当該大学人が最高の学位をとった分野を意味し、科学的生産性は、量的側面と質的側面のそれぞれについて、回答者の自己評価により上・中・下に区分した。区分の基準は第1章と同じである（回答者の自己評価と社会的評価と関連性が高いことも第1章で確認されている）。この生産性の区分と父親の学歴（高等教育レベルか否か）、家庭の経済状況（小学校～高等学校時代についての評価の総合を3段階に区分）、家庭における研究者の有無を専門分野ごとにクロス集計し、クラマーのコンティンジェンシー係数を用いて関連度を計測した。

表3-1は、その結果を示している。ほとんどの分野において、父親の学歴、経済状況、研究者の有無といった生育環境に関する変数と科学的生産性（量的側面）との間には、関連性が認められない。唯一農学において、父親の学歴および研究者の有無と科学的生産性

表3-1 生育家庭と科学的生産性(量的側面)との関連

	父の学歴	経済状況	研究者有無
人文	0.147	0.128	0.062
社会	0.137	0.137	0.152
理学	0.115	0.113	0.234
工学	0.122	0.093	0.287
農学	0.368 *	0.171	0.339 *
医学	0.063	0.170	0.045

表3-2 生育家庭と科学的生産性(質的側面)との関連

	父の学歴	経済状況	研究者有無
人文	0.168	0.069	0.121
社会	0.194	0.142	0.240
理学	0.216	0.071	0.134
工学	0.084	0.076	0.029
農学	0.434 **	0.175	0.270
医学	0.121	0.103	0.070

注) **は1%有意、*は5%有意(以下同様)

との間に関連性が認められる。ただし、クロス集計表を確認すると、この分野では、関連性の方向が逆向きであることが分かる。つまり、父親の学歴が中等教育以下のレベルである場合、科学的生産性が相対的に高く、生育家庭に研究者がいない方が科学的生産性が相対的に高い。農学においては、知的環境にそれほど恵まれていなくても、大学人になるまでに達した人は、相対的に高い生産性を示すという結果である。以上の結果は、科学的生産性の質的側面(表3-2)についても、ほぼあてはまる。

表3-3 留学経験・博士号取得の平均年齢

	留 学	博士取得
人 文	29.3 (45)	42.3 (16)
社 会	34.1 (59)	41.1 (32)
理 学	35.2 (59)	32.4 (84)
工 学	36.2 (45)	35.9 (84)
農 学	33.8 (46)	36.0 (89)
医 学	34.4 (50)	33.4 (87)

注) 括弧内は経験・取得者の比率(%)

大学人の学習歴についてはどうか。まず、表3-3に、初めて留学に行った年齢と博士号を取得した年齢の平均値を分野ごとに示した。人文科学や社会科学といった文科系の学問では、博士号取得が遅く、留学の時期が先に来ている。他方、理学・工学・医学では、留学と博士号取得はほぼ同時期か、留学の方が後である。農学は、理科系の中では特異で、留学が先である。

表3-4 学習歴と科学的生産性(量的側面)との関連

	留 学	博士取得
人文	0.303 **	0.299 **
社会	0.091	0.228 **
理学	0.293 *	0.473 **
工学	0.372 **	0.251 *
農学	0.090	0.122
医学	0.436 **	0.306 **

表3-5 学習歴と科学的生産性(質的側面)との関連

	留 学	博士取得
人文	0.233 *	0.243 *
社会	0.342 **	0.263 *
理学	0.253 *	0.171
工学	0.383 **	0.251 *
農学	0.124	0.095
医学	0.457 **	0.436 **

では、このような留学や学位取得という経験が、現在の科学的生産性とどのように関連しているかをみてみよう。科学的生産性（量的側面は表3-4、質的側面は表3-5）と留学・学位取得との関連度を、表3-1・表3-2と同様、クラマーのコンティンジェンシー係数を用いて示した。この表に示されているように、留学や学位取得と科学的生産性との間には、ほとんどの分野において高い関連性が認められる。留学未経験者よりも経験者の方が、博士号未取得者よりも博士号取得者の方が生産性が高いことはクロス集計表か

図3-1 学位種類と科学的生産性

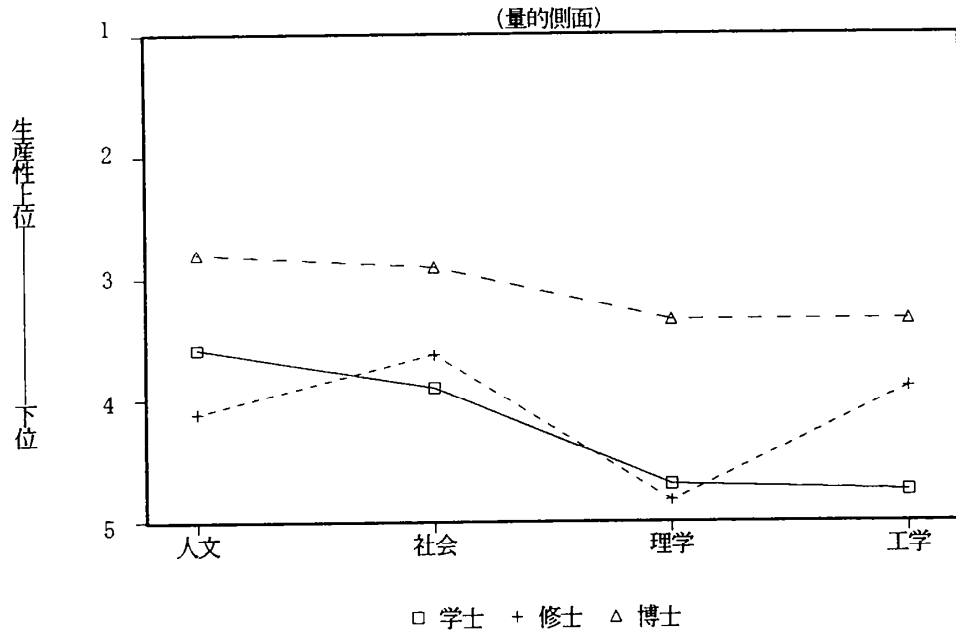
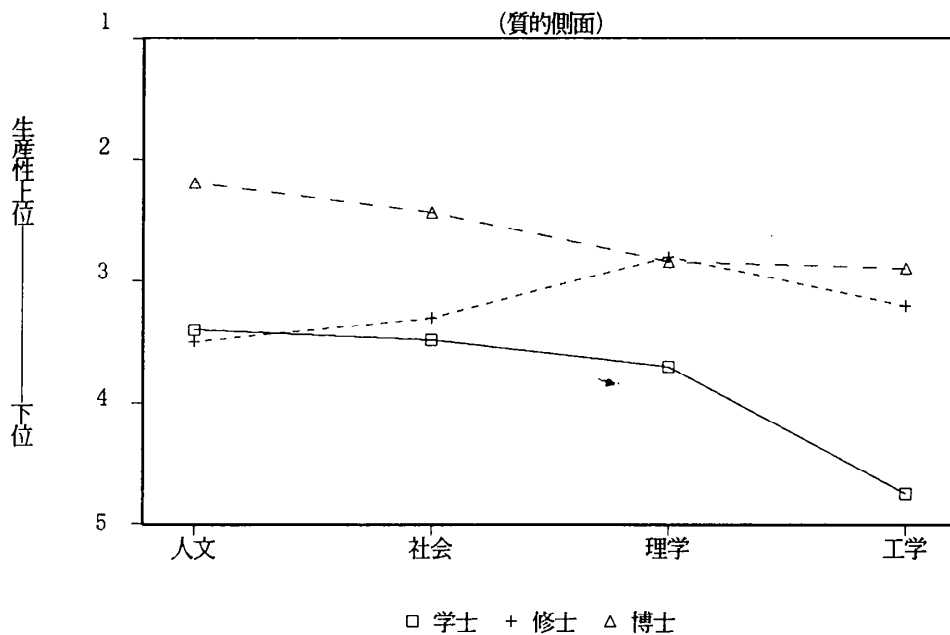


図3-2 学位種類と科学的生産性



ら確認される。特に、医学において、留学・学位取得と生産性（量的・質的の両面）との間に強い関連性がみられる。他方、ここでも農学が特異なパターンを示しており、留学・学位取得共に、科学的生産性との関連性が認められない。この特異なパターンは、農学の学問上の性格に由来するのかもしれないし、サンプル数の少なさによるのかもしれない（今回検討した分野では、農学が最もサンプルが少ない）。今後の検討が必要である。

ここまでは、学位の中でも博士号について検討したが、学位には修士や学士もある。博士は修士より、修士は学士より生産性が高いと考えられるが、問題は修士の位置である。つまり、研究者としての訓練を修士段階で終えた人は、学士と博士のどちらに近いのか。この点は、大学院、特に修士課程の教育の効果を知る上で重要である。このような関心から学位の種類による生産性の違いを図3-1と図3-2に示した（今回のデータでは農学における学士、医学における修士が極端に少ないので、図から除外してある）。いずれにおいても、博士の生産性が高いことは明らかである。しかし、修士の位置をみると、生産性の量的側面においては、工学を除いて学士との間にほとんど差がみられない。人文科学においては学士との逆転現象さえみられる。生産性の質的側面をみると、工学に加え、理学においても修士が博士に近く、文科系とは対照的である。

この問題は、大学院教育の効果にかかわるものであるため、今後とも慎重な検討が必要である。特に今回のデータは回答者の年齢に広がりがあるため、それぞれいつの時代の学部教育、修士課程教育、博士課程教育であったかを詳細に検討する必要がある。ところが今回のデータは、この種の詳細な検討に耐えるだけのサンプル数を有していない。図3-1と図3-2に示された修士課程教育の効果（理工系に比べて文科系が不十分）は、限界のあるデータから得られた暫定的結論である。

2. 科学的社会化にとって重要な時期・事項

以上、科学的生産性を指標としてみると、農学を除くほとんどの分野において、生育環境よりも、留学や学位取得といった学習歴が科学的社会化に重要な役割を果たすことが明らかになった。今回の調査では、科学的社会化にとって重要だった時期・事項を直接たずねている。これらの時期・事項について、大学人の専門分野別にみておきたい。

表3-6 科学的社会化にとって重要だった時期(分野別)

	人文	社会	理学	工学	農学	医学
1位	大学院時代	大学時代	大学時代	30歳代	30歳代	30歳代
2位	大学時代	大学院時代	大学院時代	初職当時	大学時代	初職当時
3位	30歳代	初職当時	30歳代	大学時代	初職当時	大学時代
4位	初職当時	30歳代	初職当時	大学院時代	40歳代	高校時代
5位	高校時代	40歳代	高校時代	40歳代	大学院時代	40歳代

まず、科学的社会化にとって重要な時期について、表3-6に示した。この表は、それぞれの分野の大学人が「小学校入学前」から「60歳代」までの11の時期について重要とし

た程度（5段階評価）を集計し、重要度が高いと評価された時期を上位から順に並べ、5位まで示したものである。第1章で指摘されているように、各分野とも、大学、大学院、初職当時、30歳代と、大学院を挟む前後の時期があげられている。しかし、仔細にみると、

表3-7 科学的社会化にとって重要だった事項(分野別)

人文	社会	理学
1位 研究に対する情熱	研究に対する情熱	研究に対する情熱
2位 指導教授	指導教授	指導教授
3位 自分の才能	自分のパーソナリティ	自分のパーソナリティ
4位 自分のパーソナリティ	自分の才能	自分の才能
5位 大学院教育	大学院教育	独創性を求める規範
6位 大学院教育	大学院教育	所属大学・学科の風土・雰囲気
7位 所属大学・学科の風土・雰囲気	所属大学・学科の風土・雰囲気	研究費
8位 他の研究者とのコミュニケーション網	他の研究者とのコミュニケーション網	所属大学・学科の施設・設備
9位 研究費	研究費	他の研究者とのコミュニケーション網
10位 所属大学・学科の施設・設備	独創性を求める規範	大学院教育

工学	農学	医学
1位 研究に対する情熱	研究に対する情熱	研究に対する情熱
2位 自分のパーソナリティ	自分のパーソナリティ	自分のパーソナリティ
3位 指導教授	自分の才能	自分の才能
4位 自分の才能	研究費	指導教授
5位 独創性を求める規範	独創性を求める規範	所属大学・学科の施設・設備
6位 研究費	指導教授	独創性を求める規範
7位 所属大学・学科の風土・雰囲気	配偶者の協力	他の研究者とのコミュニケーション網
8位 他の研究者とのコミュニケーション網	所属大学・学科の風土・雰囲気	所属大学・学科の風土・雰囲気
9位 配偶者の協力	他の研究者とのコミュニケーション網	研究費
10位 所属大学・学科の施設・設備	大学院教育	配偶者の協力

人文科学・社会科学・理学においては、この時期の前半（つまり大学・大学院時代）が上位にあげられているのに対して、工学・農学・医学ではこの時期の後半（30歳代・初職当時）が上位にあげられていることが特徴である。また、人文科学・理学といった純粋科学の色彩が濃い分野では高校時代が5位以内に入っているが、社会科学・工学・農学・医学では40歳代の方が重要とされている。

科学的社会化にとって重要だった事項は、23項目について評価してもらい、集計結果から得られた上位10項目を表3-7に示した。「研究に対する情熱」がどの分野においても、一貫して1位である。この他、「自分のパーソナリティ」や「自分の才能」も共通して上位を占めている。分野によって大きく異なるのは、大学院教育の位置である。すなわち、「大学院教育」は、人文科学・社会科学においては「大学教育」と並んで重要とされているが、理学・工学・農学・医学では圏外（それぞれ、11位・17位・16位・22位）である。これらの分野では、大学・大学院の教育よりも「独創性を求める規範」の方が重要と考えられている。ただし、「指導教授」は上位に位置しており、大学・大学院時代のコース・ワークよりも、個人的でインフォーマルな教育（あるいはそれを通して伝達される規範）が重視されていることを示している。

3. 専門分野間の移動と科学的社会化

以上、重要とされる時期・事項の面から、各分野の科学的社会化の共通点と特徴をみてきた。ところで、研究者は、その科学的社会化過程において、単一の専門分野だけを経験するわけではない。異なる専門分野を経験する研究者も少なからず存在する。一般に、研究者の社会化過程における専門分野間移動は、所属組織の都合によって発生し、研究者自身のそれまでの蓄積を無駄にするものと考えられている。しかし一方では、専門分野間移動を経験した研究者が創造的業績を生み出す例も多くみられる。国内だけをみても、動物学から文化人類学へと進んだ梅棹忠夫、経済学からメーカー勤務を経て教育社会学へ進んだ天野郁夫、管理工学から教育心理学へ進んだ佐伯胖など、枚挙に暇がない。アメリカにおいては、かなりの程度でこのような専門分野間の移動がみられることが報告されている(Hargens, 1986)。

ここでは、科学的社会化過程において専門分野間移動を経験した大学人の科学的生産性を、移動を経験していない大学人の生産性と比較分析することによって、専門分野間移動の効果を検討する。今回の調査では、回答者の学歴をたずねた項目で、卒業(修了)学部(研究科)名の回答を求めている。回答された学部(研究科)名をもとに、学部段階、修士段階、博士段階での所属学部(研究科)を人文科学・法学・経済学・理学・理工学・工学・農学・保健・家政・教育・芸術・複合領域の12に分類し、クロス集計を行った。

次頁の表3-8と表3-9は、クロス集計によって得られた専門分野間移動表である。表3-8は学部から修士課程進学にともなう分野間移動、表3-9は学部段階での所属学部と博士課程での所属研究科との比較によって明らかになった分野間移動を示している。表の右端には、学部段階での所属学部別に移動数とその比率を示している。それぞれの段階での所属学部(研究科、前記12分類)が変化している者を移動数としてカウントしたが、理工学から理学ないし工学への移動(およびその逆)と複合領域からその他の研究科への移動は移動数の中に含めていない。これらの移動は、学部(研究科)分類は変化していても、当人の研究領域は移動の前後で大きく変化していないと考えられるからである。

表3-8 修士課程進学にともなう分野間移動(大学人)

	修士課程での所属研究科											計	移動数	比率
	人文	法学	経済	理学	理工	工学	農学	保健	家政	教育	芸術			
学部段階での所属学部	73	1							5		4	83	10	12.0
人文														
法学	1	12	1									14	2	14.3
経済	1		26									27	1	3.7
理学				65	1	2	1					69	3	4.3
理工学				3	9	2						14	0	0.0
工学				3	3	47	1					54	4	7.4
農学				4	1	1	35					41	6	14.6
保健	1						1	30	1			33	3	9.1
家政									9			9	0	0.0
教育	4		1	2				1		15	1	24	10	41.7
芸術											9	9	0	0.0
複合	17	2		5						1	6	31	-	-
計	97	15	28	82	14	53	37	31	10	21	10	408	39	9.6

こうして得られた移動数は、学部段階→修士課程が39、学部段階→博士課程が29であった。全体に占める比率はそれぞれ4.8%と3.8%であるが、表3-8と表3-9の右下には、クロス集計の対象となった者（つまり、学部段階、修士課程、博士課程での所属学部を回答した者）に対する比率を記入しているの、それぞれ高めの値になっている。いずれにせよ、これらの人々が科学的社会化の初期の段階で専門分野間移動を経験した大学人であると推定することができる。

表3-9 博士課程進学にとまなう分野間移動(大学人)

	博士課程での所属研究科										計	移動数	比率		
	人文	法学	経済	理学	理工学	工学	農学	保健	家政	教育				芸術	複合
学部段階での所属学部	54	1								3	3	61	7	11.5	
法学	1	7	1									9	2	22.2	
経済	1		20									21	1	4.8	
理学			1	52	2	2	1				1	59	5	8.5	
理工学				1	6	2	1					10	1	10.0	
工学				2	2	28	1					33	3	9.1	
農学				3		1	24	1				29	5	17.2	
保健						1		51				52	1	1.9	
家政								1	3			4	1	25.0	
教育	3		1	1						7		12	5	41.7	
芸術											2	2	0	0.0	
複合	11	1	1	3							5	21	-	-	
計	70	9	24	62	10	32	27	55	3	10	2	9	313	31	9.9

次に、これら分野間移動を経験した大学人が、そうでない大学人と比較して、どのような特徴があるかが問題となる。ここでは、前述の科学的生産性についての自己評価を指標として用いた。研究の量的側面、質的側面それぞれについて、上位から下位に至る7段階で求めた自己評価である（上位を1、下位を7とする評価を求めているので、数値が小さいほど高い自己評価をしていることになる）。これを利用して、分野間移動を経験した人とそうでない人の科学的生産性がどのように異なるかを比較した。

表3-10はその結果である。いずれの場合においても、分野間移動を経験した人がそうでない人よりも高い自己評価をしていることがわかる。しかも、5%ないし10%水準で有

表3-10 分野間移動の有無による科学的生産性の違い

	学部段階→修士課程		学部段階→博士課程	
	移動あり	移動なし	移動あり	移動なし
量的側面	3.2	《 3.8	3.2	< 3.7
質的側面	2.7	《 3.3	2.6	《 3.3

注) 値が小さいほど生産性高い

《: 5%水準で有意差あり、<: 10%水準で有意差あり

意差が認められた。すなわち、いずれの段階においても、分野間移動を経験した大学人はそうでない大学人と比較して科学的生産性が高いという仮説を支持している。分野間移動を経験した人が科学的生産性が高い理由として、分野間移動をすることで柔軟な思考や広

い視野が得られる、物理学から経済学へ移動する時のように方法論上の「落差」を利用することができるということが考えられる。あるいは、もともと生産性の高い人が、自らの研究を発展させていった結果、自然に分野間移動をしたのかもしれない。いずれにせよ、科学者の社会化過程において異なる専門分野を経験することは有益と考えられる。

小林他（1986）は、大学・研究所・会社等の研究者に対する質問紙調査にもとづいて専門分野間移動表を作成し、移動の効果について検討している。その結果によれば、雑誌論文数や学会発表回数については、一部を除き、分野間移動の有無による有意差は認められない。この理由の一つに、小林他の専門分野分類は本研究のものよりも細かいという点をあげることができ、小林他の専門分野間移動表には、本研究ではとらえられていない小さな移動（たとえば機械工学から電気工学への移動）も把握されている。これに対して本研究では、このような移動はとらえておらず、理学から工学へといった大きな移動の場合、科学的生産性に及ぼす移動の効果がみられることを示している。ただし、小林他も、有意差はなくとも専門分野間移動経験者の科学的生産性は高めであることを示しているし、数量化Ⅰ類によって他の要因の影響を排除した分析では、特に大学等の自然科学系研究者については、専門分野間移動が科学的生産性の重要な要因の一つであることを確認している。

ところで、異なる専門分野を経験することは、自ら移動するだけでなく、異なる分野の研究者と接触することによっても可能である。今回の調査では、自らの科学的社会化にわたる「重要な研究者」をあげてもらい、あげられた「重要な研究者」に対しても調査を実施している。このため、両者の専門分野を比較することによって、大学人が異なる分野の研究者と「重要」と認識されるような接触をしたかどうかを把握することが可能である。

表3-11 大学人の専門分野と重要な研究者の専門分野

		重要な研究者の専門分野								注)		
		人文	社会	理学	工学	農学	保健	家政	教育	計	実数	比率
大学人の専門分野	人文	40	3	1	1				2	47	7	14.9
	社会	5	40	3						48	8	16.7
	理学		2	43	1	1	3			50	7	14.0
	工学			10	45	1	2			58	13	22.4
	農学		3			23	1			27	4	14.8
	保健			6	3	3	100			112	12	10.7
	家政				2	3	4	1		10	9	90.0
	教育	3	4					1		4	12	8
計		48	52	63	52	31	111	1	6	364	68	18.7

注) 重要な研究者の専門分野と自己の専門分野が異なる者の実数と比率

表3-11は、一般の大学人と「重要な研究者」の専門分野をクロス集計によって把握したものである。他分野の研究者を「重要な研究者」としてあげた大学人は全体で18.7%。分野別にみると、教育、家政においてこの比率が高い。次に、このように他分野の研究者を「重要な研究者」としてあげた大学人とそうでない大学人の科学的生産性を、表3-10と同様の方法で比較した（表3-12）。量的側面と質的側面のいずれについても、他分野の研究者を「重要な研究者」としてあげた大学人の方が生産性が僅かに高いが、統計的に

有意な差ではない。他分野の研究者と「重要」と認識されるような接触をすることは、自ら専門分野を移動することに比して、科学的生産性に対して強い影響を持ち得ないといえよう。

表3-12 異なる分野の影響の有無による科学的生産性の違い

大学人が	重要な研究者と	
	異なる分野	同じ分野
量的側面	3.7	3.8
質的側面	3.3	3.4

注) 値が小さいほど生産性高い

なお、「重要な研究者」自身も専門分野間移動を経験していることが考えられる。「重要な研究者」についても、彼らの学歴についての回答をクロス集計して、専門分野間移動表を作成した。次頁の表3-13と表3-14がそれである。表3-8・表3-9と同様、理

表3-13 修士課程進学ともなう分野間移動(重要な研究者)

	修士課程での所属研究科											計	移動数	比率	
	人文	法学	経済学	理学	理工学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術				複合
学部	37		1										38	1	2.6
段階		4										1	5	1	20.0
での			6										6	0	0.0
の				26	2								28	2	7.1
所				3	4	1							8	0	0.0
属				4	2	19	1						26	5	19.2
学				3	1	18							22	4	18.2
部				2	2		18						22	4	18.2
								1					1	0	0.0
	2			1				1	11				15	4	26.7
										2			2	0	0.0
	3			3							1		7	-	-
計	42	4	7	42	6	25	18	19	2	12	2	1	180	21	11.7

表3-14 博士課程進学ともなう分野間移動(重要な研究者)

	博士課程での所属研究科											計	移動数	比率	
	人文	法学	経済学	理学	理工学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術				複合
学部	24		1									1	27	3	11.1
段階		2											2	0	0.0
での			6										7	1	14.3
の				22				1					23	1	4.3
所				2	3	1							6	0	0.0
属				4	2	12							18	4	22.2
学				3			14	1					18	4	22.2
部				4				34					38	4	10.5
													0	0	0.0
	1			1						12			14	2	14.3
													0	0	0.0
	3			1	3								7	-	-
計	29	2	8	39	5	13	14	36	0	13	0	1	160	19	11.9

工学から理学ないし工学への移動（およびその逆）と複合領域からその他の研究科への移動は移動数の中に含めていない。つまり、一般の大学人と同じ方法で分野間移動を把握したが、その結果は異なっている。すなわち、比率で見ると「重要な研究者」の方が分野間移動量がやや大きい（全体に占める比率は、学部→修士課程が5.6%、学部→博士課程が5.1%）。「重要な研究者」の抽出手続きから明らかなように、「重要な研究者」は、他の大学人に影響を与えた優れた研究者である。彼らの分野間移動量が一般の大学人よりも大きいことは、分野間移動を経験した研究者はそうでない人よりも科学的生産性が高いという仮説を支持しているといえよう。

4. 要約と今後の課題

本章で明らかにされた専門分野別の科学的社会的特徴は、次の通りである。

- ①科学的生産性を指標としてみると、ほとんどの分野において、生育環境よりも、留学や学位取得といった学習歴が科学的社会的に重要な役割を果たす。ただし、農学では特異なパターンがみられる。
- ②科学的社会的化にとって、大学院を挟む前後の時期が重要とされている点は各分野に共通しているが、人文科学・社会科学・理学ではこの時期の前半が、工学・農学・医学ではこの時期の後半が重要と考えられている。
- ③自らの情熱・パーソナリティ・能力が重要と考えられている点は、各分野に共通している。文科系と理科系において差がみられるのは、大学院教育（特に修士課程）の位置づけと効果である。
- ④理科系の大学人の科学的社会的化には、文科系に比べて、独創性を求める規範が強く作用している。
- ⑤科学的社会的化の過程において専門分野間を移動することは、科学的生産性を高める効果を持つ。

農学にみられる特異なパターンの解明や大学院教育の効果の問題など、詳細な分析を必要とする点も残された。これらの点は、十分なサンプルを確保した新たな調査研究を待つて検討すべき今後の課題である。

<注及び引用・参考文献>

Clark, B., 1987, The Academic Life, The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching.

Hargens, L., 1986, "Migration patterns of U.S. Ph.D.s among disciplines and specialties," Scientometrics, 9(3・4), 145-164.

小林信一・塚原修一・山田圭一, 1986, 『研究者の流動性と研究能力の向上に関する研究』（『大学研究ノート』第65号）

（浦田広朗）

第4章 「重要な研究者」の特徴と形成過程

科学社会学の諸研究において、研究施設や研究費などの研究環境が研究活動を促進するために重要な要因であるということは定説化している。さらに、第1章でも明らかになったように、大学人は大学学部、大学院課程を通して初期的社会化がすすむ。その過程で出会った指導教官が大学人形成のモデルとして選択される。

このように、「科学者の形成過程や成長過程において影響を与える科学者」のことを、本研究では「重要な研究者」と呼ぶことにした。研究者は、科学的社会化過程において、「重要な研究者」の体現する役割・態度と同一化するなかで制度的規範を学習する。

基礎研究を推進するうえで優秀な大学人を育てることが重要であるということを考えるならば、まず最初に、その優秀な大学人を養成した「重要な研究者」が如何にして形成されたのかを明らかにすることは重要な研究課題であると思われる。

この研究課題を達成するために、本章では、まず最初に、「重要な研究者」の属性的特徴を、その研究者から受けた研究者の属性との関連も含めて明らかにし、続いて、「重要な研究者」の形成上の特徴を「一般の研究者」と比較することによって明らかにした。

1. 「重要な研究者」の特徴

(1) 「影響を受けた研究者」との関連

「師」である「重要な研究者」の属性と「弟子」である「影響を受けた研究者」の属性との関連について調べたところ、以下の5点が明らかとなった。

①**出会った時期** 「重要な研究者」と出会った時期について尋ねたところ、「大学学部時代(30.3%)」が最も多く、続いて、「大学院時代(20.2%)」「30歳代(15.1%)」「就職直後(12.1%)」となっていた。逆に、出会いの機会が少なかった時期は、「小学校時代(4.6%)」「中学校時代(3.3%)」の義務教育の時期であった。

②**年齢差** 「師」と「弟子」との年齢差の分布をみると、94.2%以上の大学人は、年齢が自分より上の大学人を「師」としており、年齢差の平均は13.2歳であった。

③**性** 「師」の性と「弟子」の性の関連性をみたところ、男性の「弟子」で、男性を「師」とする者は99.3%、女性を「師」とする者は0.7%であり、女性の「弟子」で、男性を「師」とする者は88.1%、女性を「師」とする者は11.9%であった。男性研究者に比べて、女性研究者は、女性研究者を「師」とする比率が高くなっている。模倣すべき大学人のモデルが大学人の性によって異なっており、自分と同じ性の大学人をモデルとする傾向があるようである。

④**専門分野** 「師」の専門分野と「弟子」の専門分野の関連性をみたところ、「師」と「弟子」で専門分野が同じである大学人は85.4%であった。大学人は自分と同じ専門分野の大学人を「師」とする傾向にある。専門分野の中でも医学系の大学人が自身と同じ専門

分野（医学系）の大学人を「師」とする傾向が強く（89.3%）、工学系の大学人が自身と同じ専門分野（工学系）の大学人を「師」とする傾向が弱い（77.6%）。

⑤研究活動の自己評価 「師」と「弟子」の各々に量的な面と質的な面から研究活動の自己評価をしてもらい、それぞれの観点から評価の「師」と「弟子」との関連性を調べた（表4-1）。その結果、「量的な面」においても、「質的な面」においても、研究活動の自己評価が高い「弟子」は、研究活動の自己評価がより高い大学人を「師」として選んでいるようである。逆に言えば、研究活動の自己評価が高い「師」は、研究活動の自己評価が高い大学人を育成しているようである。

表4-1 研究活動の自己評価

		量的評価			質的评价			
		重要な研究者*			重要な研究者*			
一般の研究者	高量	高量	中・低量	計	高質	高質	中・低質	計
		39	26	65		64	40	104
		23.9%	13.6%	18.4%		31.5%	26.8%	29.5%
	中量	60.0%	40.0%	61.5%	61.5%	38.5%	180	
		84	104	188	109	71	180	
51.5%		54.5%	53.1%	53.7%	47.7%	51.1%		
低量	44.7%	55.3%	60.6%	60.6%	39.4%	68		
	40	61	101	30	38	68		
	24.5%	31.9%	28.5%	14.8%	25.5%	19.3%		
計		162	191	354	203	149	352	
		46.0%	54.0%		57.7%	42.3%		

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下一行目の百分率は度数の列百分率、二行目は行度数の百分率を示す。

注2) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

以上の①から⑤までの結果をまとめると、大学人が研究者として社会化される時、自分と同じ専門分野で同じ性で年齢的に13歳ほど離れた大学人をモデルとしており、本研究成果だけからはっきり言うことはできないが、選択されたモデルの研究活動のレベルに比例した研究レベルの大学人が形成されるのではないかと思われる。

(2) 「重要な研究者」の属性的特徴

以下では、「一般の大学人」の属性と比較することによって、「重要な大学人」の属性的特徴を明らかにする。

その際、「重要な大学人」については、質問紙調査票において、「研究者養成という面からみて、あなたご自身のこれまでの教育活動は、日本にいる同じ専門分野で同年輩の研究者と比較して、どの位置にあると思われますか」と尋ね7段階で評価してもらった（上位を1、中位を4、下位を7）。なお以下では、1と回答した場合を上位、2か3と回答した場合を中位、4か5か6か7と回答した場合を下位として、いかなる事柄がこの教育的評価と有意な関連性を持っているのかも調べた⁽¹⁾。

その結果、以下の6点が明らかとなった。なお、ここでは、1993年現在、50～60歳である大学人を分析対象とした⁽²⁾。また、「重要な大学人」の属性と「教育活動の自己評価」との間に有意な関連性が確認された場合のみクロス分析の結果を表中に提示した。

①性別構成 「性別構成」について比較すると（表4-2）、「重要な研究者」は「一

般の研究者」に比べて、女性の占める比率が低くなっている（各々 3.1%と20.8%）。

また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルによって、性別構成比に有意な差があるとはいえないようである（データ省略）。

表4-2 性別構成

	重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)
1. 男性	282 96.9%	304 79.2%
2. 女性	9 3.1%	80 20.8%
計	291	384

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。

注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

②研究活動への志向性 研究活動の志向性について比較するため、「国内外の学会や学術会議への出席回数」を調べたところ（表4-3）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて国内外の学会や学術会議へ多く出席しているようである。

さらに、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、海外の学会や学術会議へ出席する大学人の比率が高くなる傾向にあるようである（危険率1%）。

表4-3 国内外の学会や学術会議への出席回数別の構成比

	(日本国内の学会や学術会議)		(海外の学会や学術会議)					
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)	重要な研究者			計 (a)	計 (b)	計 (c)
			教育活動の自己評価 上位	中位	低位			
1回以下	24 10.8%	91 23.7%	5 16.7%	11 14.7%	17 45.9%	33 23.2%	38 24.8%	259 67.4%
2回	42 18.8%	71 18.5%	14 46.7%	27 36.0%	13 35.1%	54 38.0%	59 38.6%	72 18.8%
3回	49 22.0%	74 19.3%	11 36.7%	37 49.3%	7 18.9%	55 38.7%	56 36.6%	53 13.8%
4回	25 11.2%	46 12.0%	30 142	75 153	37 142	142	153	384
5回	24 10.8%	39 10.2%						
6回以上	59 26.5%	63 16.4%						
計	223	384						

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。

注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、
「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

注4) 「重要な研究者」については平成4年度のデータ、
「一般の研究者」については平成3年度のデータ

③研究成果の自己評価 これまでの自分の研究活動に対する自己評価を比較したところ（次頁の表4-4）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、量的にみても、質的にみても、自分の研究活動を高く評価する大学人の比率が高くなっている。

また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、量的にみても、質的にみても、自分の研究活動に対する自己評価を高く評価する大学人の比率が高くなる傾向にある（危険率0.1%）。

さらに、学術賞の受賞の有無や受賞回数を比較すると、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、学術賞を受賞した者の比率が高くなっており（各々42.9%と24.0%、次頁の表4-5参照）、複数回受賞している者の比率も高くなっている（次頁の表4-6）。

また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれ

て、学術賞を受賞したことのある大学人の比率やその受賞回数が高くなる傾向にある（危険率5%）。

表4-4 研究活動の自己評価

1) 量的にみて							2) 質的にみて						
	重要な研究者				計 (b)	計 (c)	重要な研究者				計 (b)	計 (c)	
	教育活動の自己評価 ***			計(a)			教育活動の自己評価 ***			計(a)			
	上位	中位	低位				上位	中位	低位				
1. 上位	32	26	4	63	65	48	41	36	6	83	85	67	
	61.1%	20.6%	5.3%	24.6%	23.8%	12.9%	77.4%	29.0%	7.9%	32.8%	31.5%	18.3%	
2	10	44	7	61	62	85	8	47	13	68	73	85	
	18.5%	34.9%	9.2%	23.8%	22.7%	16.7%	15.1%	37.9%	17.1%	26.9%	27.0%	23.2%	
3.	5	26	13	44	45	68	4	28	14	46	46	81	
	9.3%	20.6%	17.1%	17.2%	16.5%	18.3%	7.5%	22.6%	18.4%	18.2%	17.0%	22.1%	
4. 中位	5	24	30	59	68	128	0	12	34	46	54	99	
	9.3%	19.0%	39.5%	23.0%	24.9%	34.5%	0.0%	9.7%	44.7%	18.2%	20.0%	27.0%	
5	1	3	13	17	19	40	0	1	4	5	6	20	
	1.9%	2.4%	17.1%	6.6%	7.0%	10.8%	0.0%	0.8%	5.3%	2.0%	2.2%	5.4%	
6	0	3	4	7	7	16	0	0	3	3	3	9	
	0.0%	2.4%	5.3%	2.7%	2.6%	4.3%	0.0%	0.0%	3.9%	1.2%	1.1%	2.5%	
7. 下位	0	0	5	5	7	9	0	0	2	2	3	6	
	0.0%	0.0%	6.6%	2.0%	2.6%	2.4%	0.0%	0.0%	2.6%	0.8%	1.1%	1.6%	
計	54	126	76	256	273	371	53	124	76	253	270	367	

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下の百分率は度数の列百分率を示す。
 注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
 注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表4-5 学術賞受賞の有無

	重要な研究者				計 (b)	計 (c)
	教育活動の自己評価 *			計(a)		
	上位	中位	低位			
はい	32	59	27	118	124	92
	54.2%	46.8%	32.9%	44.2%	42.6%	24.0%
いいえ	27	67	55	149	167	292
	45.8%	53.2%	67.1%	55.8%	57.4%	76.0%
計	59	126	82	267	291	384

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下の百分率は度数の列百分率を示す。
 注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
 注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表4-6 学術賞数別構成比

	重要な研究者				計 (b)	計 (c)
	教育活動の自己評価 *			計(a)		
	上位	中位	低位			
0回	27	67	55	149	167	292
	46.6%	53.2%	67.1%	56.0%	57.6%	76.0%
1回	11	21	16	48	52	62
	19.0%	16.7%	19.5%	18.0%	17.9%	16.1%
2回	5	19	8	32	32	19
	8.6%	15.1%	9.8%	12.0%	11.0%	4.9%
3回	9	9	2	20	21	4
	15.5%	7.1%	2.4%	7.5%	7.2%	1.0%
4回以上	6	10	1	17	18	7
	10.3%	7.9%	1.2%	6.4%	6.2%	1.8%
計	59	126	82	266	290	384

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下の百分率は度数の列百分率を示す。
 注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
 注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

④学内外での役職経験 高等教育機関内での役職経験を比較すると（次頁の表4-7）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、高等教育機関での「学長」「学部長」「研究所長」「評議員」などの役職を経験している大学人の比率が高くなっている。
 また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが、研究所長の場合を除いて、高等教育機関内での役職経験の有無と関連しているとは言えないようである。

表4-7 高等教育機関における役職経験の有無

1. 学長			6. 研究所長		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	13 4.5%	5 1.3%	16 4.2%		
いいえ	278 95.5%	379 98.7%	368 95.8%		
計	291	384	384		

2. 理事長 (略)			7. 評議員		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	21 7.2%	25 6.5%	80 20.8%		
いいえ	270 92.8%	359 93.5%	304 79.2%		
計	291	384	384		

3. 学生部長			8. 理事 (略)		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	24 8.2%	22 5.7%	231 60.2%		
いいえ	267 91.8%	362 94.3%	153 39.8%		
計	291	384	384		

4. 図書館長			9. 役職の経験なし		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	48 16.5%	41 10.7%	132 34.4%		
いいえ	243 83.5%	343 89.3%	231 60.2%		
計	291	384	384		

5. 学部長			注1) 表中の下線の付いた実数は人数、 その下の百分率は度数の列百分率を示す。		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	48 16.5%	41 10.7%	132 34.4%		
いいえ	243 83.5%	343 89.3%	231 60.2%		
計	291	384	384		

注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、 「計(c)」は「一般の研究者」についての計。			注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001		
---	--	--	------------------------------------	--	--

表4-8 学会での役職経験の有無

1. 紀要編集委員			4. 会長		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	24 40.7%	101 34.7%	102 26.6%		
いいえ	35 59.3%	190 65.3%	282 73.4%		
計	59	291	384		

2. 紀要編集委員長			5. どの役職の経験もない		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	2 11.9%	30 11.7%	30 7.8%		
いいえ	52 88.1%	257 88.3%	256 66.7%		
計	59	291	384		

3. 理事			注1) 表中の下線の付いた実数は人数、 その下の百分率は度数の列百分率を示す。		
	重要な研究者		一般の研究者		
	計 (b)	計 (c)	計 (b)	計 (c)	
はい	37 62.7%	151 51.9%	128 33.3%		
いいえ	22 37.3%	140 48.1%	256 66.7%		
計	59	291	384		

注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、 「計(c)」は「一般の研究者」についての計。			注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001		
---	--	--	------------------------------------	--	--

さらに、学会内での役職経験の有無について比較すると(表4-8)、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、学会での「紀要編集委員」「理事」「会長」などの役職を

経験している大学人の比率が高くなっている。

また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、学会内での役職経験がないとする大学人の比率が低くなる傾向にある（危険率0.1%）。

以上の分析結果から、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、【研究志向性】【研究成果】【研究評価】ともに高くなっており、学界の中心に位置づいていることが読み取れる。さらに、表4-4に示された通り、自身のこれまでの教育活動を高く評価している大学人ほど、研究活動の自己評価が高くなる傾向にあるようである。おそらく、「重要な研究」は、研究志向の強い大学組織に属しており、状況的に、教育活動を研究養成という観点から評価することに矛盾がなかったのであろう。

2. 「重要な研究者」の形成

では、上記のような特徴を持った「重要な研究者」は、どのような環境において形成されてきたのであろうか。「一般の研究者」の成育環境と比較することによって明らかにしてみよう。なお、ここでも、1993年現在、50～60歳である大学人を分析対象とした。

(1) 生育家庭の環境

まず、「重要な研究者」の生育歴の特徴を明らかにするため、両親の学歴構成を比較したところ（表4-9）、「重要な研究者」と「一般の研究者」で顕著な違いはみられない。

また、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルごとくにみて有意な差があるとは言えないようである（データ省略）。

表4-9 両親の学歴構成

(父親の学歴構成)			(母親の学歴構成)		
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)		重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)
義務教育レベル	70 24.1%	112 29.5%	義務教育レベル	83 28.7%	120 31.6%
高校教育レベル	24 11.7%	62 16.6%	高校教育レベル	147 50.9%	188 49.5%
短期大学レベル	67 23.1%	75 19.7%	短期大学レベル	44 15.2%	54 14.2%
大学・大学院レベル	119 41.0%	130 34.2%	大学・大学院レベル	15 5.2%	18 4.7%
計	290	380	計	289	380

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、

その下の百分率は度数の列百分率を示す。

注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

続いて、小学校、中学校、高等学校時代の家庭の経済状況を比較したところ（次頁の表4-10）、「重要な研究者」と「一般の研究者」で顕著な違いは見られない。

また、「重要な研究者」の中で、「教育活動の自己評価」のレベルごとくにみても有意な差があるとは言えないようである。

表4-10 家庭の経済状態

(小学校時代)			(中学校時代)		
	重要な研究者	一般の研究者		重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)		計 (b)	計 (c)
1. 平均以上に裕福	98 34.0%	111 29.1%	1. 平均以上に裕福	68 23.6%	56 14.7%
2. 平均的	151 52.4%	210 55.1%	2. 平均的	164 56.9%	247 64.8%
3. 貧しかった	39 13.5%	60 15.7%	3. 貧しかった	56 19.4%	78 20.5%
計	288	381	計	288	381

(高等学校時代)		
	重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)
1. 平均以上に裕福	46 16.0%	55 14.7%
2. 平均的	184 64.1%	220 58.8%
3. 貧しかった	57 19.9%	99 26.5%
計	287	374

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下の百分率は度数の列百分率を示す。
 注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

さらに、生育家庭内での研究者の有無を比較したところ(表4-11)、「一般の研究者」に比べて「重要な研究者」で、生育家庭内に研究者が存在した比率が特に高いとはいえないようである。

しかし、「重要な研究者」の中で「教育活動の自己評価」のレベルごとにみたとき、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、「3. 私の父親は研究者である」とする大学人の比率が高くなる傾向がある(危険率1%)。

表4-11 成育家族内での研究者の有無

1. 私の祖父は研究者である							5. 私のきょうだいに研究者がいる							
	重要な研究者						計 (c)	重要な研究者						計 (c)
	教育活動の自己評価							教育活動の自己評価						
	上位	中位	低位	計(a)	計			上位	中位	低位	計(a)	計		
はい	1	8	1	10	12	12	はい	15	29	14	58	63	73	
	1.7%	6.3%	1.2%	3.7%	4.1%	3.1%		25.4%	23.0%	17.1%	21.7%	21.6%	19.0%	
いいえ	58	118	81	257	279	372	いいえ	44	97	68	209	228	311	
	98.3%	93.7%	98.8%	96.3%	95.9%	96.9%		74.6%	77.0%	82.9%	78.3%	78.4%	81.0%	
計	59	126	82	267	291	384	計	59	126	82	267	291	384	

2. 私の祖母は研究者である							6. まったくない							
	重要な研究者						計 (c)	重要な研究者						計 (c)
	教育活動の自己評価							教育活動の自己評価						
	上位	中位	低位	計(a)	計			上位	中位	低位	計(a)	計		
はい	0	0	0	0	0	2	はい	31	60	50	141	137	175	
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%		52.5%	47.6%	61.0%	52.8%	47.1%	45.6%	
いいえ	59	126	82	267	291	382	いいえ	28	66	32	126	154	209	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	99.5%		47.5%	52.4%	39.0%	47.2%	52.9%	54.4%	
計	59	126	82	267	291	384	計	59	126	82	267	291	384	

3. 私の父親は研究者である							7. その他に研究者がいる							
	重要な研究者						計 (c)	重要な研究者						計 (c)
	教育活動の自己評価**							教育活動の自己評価						
	上位	中位	低位	計(a)	計			上位	中位	低位	計(a)	計		
はい	14	23	5	42	45	54	はい	12	30	17	59	67	66	
	23.7%	18.3%	6.1%	15.7%	15.5%	14.1%		20.3%	23.8%	20.7%	22.1%	23.0%	17.2%	
いいえ	45	103	77	225	246	330	いいえ	47	96	65	208	224	318	
	76.3%	81.7%	93.9%	84.3%	84.5%	85.9%		79.7%	76.2%	79.3%	77.9%	77.0%	82.8%	
計	59	126	82	267	291	384	計	59	126	82	267	291	384	

4. 私の母親は研究者である							
	重要な研究者						計 (c)
	教育活動の自己評価						
	上位	中位	低位	計(a)	計		
はい	0	0	0	0	0	2	
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	
いいえ	59	126	82	267	291	382	
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	99.5%	
計	59	126	82	267	291	384	

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、その下の百分率は度数の列百分率を示す。
 注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、「計(b)」は「重要な研究者」についての計、「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
 注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表4-15 所属組織からみた研究志向性の変遷

学部時代			助教時代		
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)		重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)
1. 博士・研究中心	109 58.0%	96 30.3%	1. 博士・研究中心	69 49.6%	31 13.7%
2. 博士・教育中心	61 32.4%	130 41.0%	2. 博士・教育中心	37 26.6%	94 41.4%
3. 修士・研究中心	6 3.2%	54 17.0%	3. 修士・研究中心	11 7.9%	46 20.3%
4. その他	12 6.4%	37 11.7%	4. その他	22 15.8%	56 24.7%
計	188	317	計	139	227

修士課程時代			教授時代		
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)		計 (b)	一般の研究者 計 (c)
1. 博士・研究中心	42 72.4%	51 34.5%	1. 博士・研究中心	74 46.0%	26 11.6%
2. 博士・教育中心	14 24.1%	76 51.4%	2. 博士・教育中心	56 34.8%	101 45.1%
3. 修士・研究中心	2 3.4%	14 9.5%	3. 修士・研究中心	9 5.6%	43 19.2%
4. その他	0 0.0%	7 4.7%	4. その他	22 13.7%	54 24.1%
計	58	148	計	161	224

助手時代		
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)
1. 博士・研究中心	76 61.8%	64 38.6%
2. 博士・教育中心	36 29.3%	44 26.5%
3. 修士・研究中心	3 2.4%	31 18.7%
4. その他	8 6.5%	27 16.3%
計	123	166

講師時代		
	重要な研究者 計 (b)	一般の研究者 計 (c)
1. 博士・研究中心	36 43.9%	22 12.5%
2. 博士・教育中心	23 28.0%	66 37.5%
3. 修士・研究中心	4 4.9%	34 19.3%
4. その他	19 23.2%	54 30.7%
計	82	176

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
注3) 「博士・研究中心」とは、所属組織に研究を中心とする
博士課程がある、ということを示している。
別の表記も同様に解釈する。

学習歴において違いが見られた。すなわち、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、より高い学位を取得しており、外国留学の経験率も高く、学部時代から教授時代まで一貫して研究志向の強い大学組織に所属している比率が高くなっていった。また、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、「小・中学校の頃」などの早い時期から研究者になることを意識し始めた大学人の比率が高くなっていった。

本章では、研究者の成長過程に強い影響を与える大学人の特徴を明らかにしてきたのであるが、分析結果から察することができることは、現在の日本の大学制度の中でモデルとされる大学人は、大学院制度の中で出会った指導教官であったり、最初に就職した組織内で出会った先輩研究者出会ったりするケースが多い。その出会った大学人の研究志向性や研究レベルによって弟子のその後の研究活動のあり様が規定されてくる。

その限りにおいては、研究者の養成の役割に責任を担った博士課程を持った大学院の教

(2) 学習歴

さらに、「重要な研究者」の学習歴の特徴を明らかにするため、研究者になることを意識し始めた時期を比較したところ（表4-12）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、研究者になることを意識し始めた時期に顕著な違いがあるとはいえない。

しかし、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルが高くなるにつれて、「小・中学校の頃」などの早い時期から研究者になることを意識し始めた大学人の比率が高くなる傾向にある（危険率 0.1%）。

表4-12 研究者となることを意識し始めた時期

	重要な研究者				一般の研究者	
	教育活動の自己評価 ***			計 (a)	計 (b)	計 (c)
	上位	中位	低位			
小学校・中学校の頃	16 27.6%	15 13.0%	1 1.3%	32 12.7%	36 13.2%	42 11.3%
高校の頃	6 10.3%	18 15.7%	9 11.5%	33 13.1%	35 12.9%	45 12.1%
大学学部時代	21 36.2%	47 40.9%	38 48.7%	106 42.2%	112 41.2%	167 45.0%
大学学部卒業後	15 25.9%	35 30.4%	30 38.5%	80 31.9%	89 32.7%	117 31.5%
計	58	115	78	251	272	371

- 注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、
「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

続いて、取得した学位のレベルを比較したところ（表4-13）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて博士号を取得している比率が高くなっている（各々84.2%と64.6%）。

しかし、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルと取得学歴のレベルに有意な関連性があるとは言えないようである（データ省略）。

表4-13 取得した最高学位

	重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)
学士	14 4.9%	69 18.8%
修士	31 10.9%	61 16.6%
博士	239 84.2%	237 64.6%
計	284	367

- 注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

留学経験の有無について比較したところ（次頁の表4-14-1）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、留学を経験している比率が高いようである。特に、「研究者として留学」している比率が高いようである（次頁の表4-14-2）。

しかし、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルと留学経験の有無には有意な関連性があるとは言えないようである（データ省略）。

員は、研究活動の評価によって選抜されることが重要であると思われる。

しかし、最後の明らかになったように、「重要な研究者」は、小さい時から研究者である父親の後ろ姿を見て育ち、大学時代からは、より研究志向性の強い研究者のもとで社会化されるという、ある意味では「指導者としての帝王学」を受けて育った大学人であるとも言える。そのことを考えると、研究者の養成の役割に責任を担った博士課程を持った大学院の大学教員は、研究活動の評価によってのみ選抜されることは問題があるのかもしれない。

〈注及び参考・引用文献〉

1) 表4-Aに示されている通り、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、これまで指導した大学院生の中で研究者になっている学生が「いる」と回答する者の比率が高い(各々94.7%と82.0%)。また、その「重要な研究者」の中で、教育活動の評価が高い大学人ほど、これまで指導した大学院生の中で、研究者になっている学生が「いる」と回答する者の比率が高くなっている(危険率0.1%)。

さらに、教育活動の評価が高い大学人ほど、研究者になった男性学生数がより多くなっている(次頁の表4-B)。

すなわち、「教育活動の自己評価」が高い大学人は、「重要な研究者」の中でも研究者養成という仕事をより精力的に果たした大学人といえるのである。言葉の本当の意味で「重要な研究者」と言えるのかも知れない。

2) 「一般の研究者」と「重要な研究者」の年齢別構成比は左の表の通りである。「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、高齢の方に偏っており、両者が共通に多くの大学人を占めているのが50歳代と60歳代である。それ故に、ここでの分析では、50～60歳である大学人を分析対象とした。

3) 「博士・研究中心」とは、所属組織に博士課程が存在し、かつ研究志向の強い組織であることを表している。同様に、「博士・教育中心」とは、所属組織に博士課程が存在し、かつ教育志向の強い組織であることを表している。

表4-A 指導学生の中で研究者になった者の有無

	重要な研究者				一般の研究者	
	教育活動の自己評価 ***			計 (a)	計 (b)	計 (c)
	上位	中位	低位			
1. あります	54 100.0%	107 98.2%	48 84.2%	209 95.0%	214 94.7%	233 82.0%
2. ありません	0 0.0%	2 1.8%	9 15.8%	11 5.0%	12 5.3%	51 18.0%
計	54	109	57	220	226	284

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、
「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。
注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

表4-B 指導学生の中で研究者になった者の人数

	重要な研究者			
	教育活動の自己評価 ***			
	上位	中位	低位	計(a)
4人以下	<u>7</u>	<u>26</u>	<u>24</u>	<u>57</u>
	13.2%	25.5%	54.5%	28.6%
5～9人	<u>14</u>	<u>29</u>	<u>7</u>	<u>50</u>
	26.4%	28.4%	15.9%	25.1%
10～19人	<u>12</u>	<u>25</u>	<u>8</u>	<u>45</u>
	22.6%	24.5%	18.2%	22.6%
20人以上	<u>20</u>	<u>22</u>	<u>5</u>	<u>47</u>
	37.7%	21.6%	11.4%	23.6%
計	53	102	44	199

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(a)」は「教育活動の自己評価」についての計、
注3) * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

(大膳 司)

表4-14-1 留学経験の有無

	重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)
ある	203 71.0%	204 55.3%
ない	83 29.0%	165 44.7%
計	286	369

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

表4-14-2 留学身分別の留学経験の有無

1. 学部学生として留学			3. 研究者として留学		
	重要な研究者	一般の研究者		重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)		計 (b)	計 (c)
ある	1 0.3%	9 2.3%	ある	183 62.9%	163 42.4%
ない	290 99.7%	375 97.7%	ない	108 37.1%	221 57.6%
計	291	384	計	291	384

2. 大学院生として留学		
	重要な研究者	一般の研究者
	計 (b)	計 (c)
ある	22 7.6%	28 6.8%
ない	269 92.4%	358 93.2%
計	291	384

注1) 表中の下線の付いた実数は人数、
その下の百分率は度数の列百分率を示す。
注2) 「計(b)」は「重要な研究者」についての計、
「計(c)」は「一般の研究者」についての計。

最後に、学部時代から教授時代までの所属した学部レベルの組織の研究志向性について比較したところ（次頁の表4-15）、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、「学部」「修士課程」「助手」「講師」「助教授」「教授」のどの時代においても、研究志向性の強い「博士・研究中心」の組織に所属している大学人の比率が高くなっている⁽³⁾。

しかし、「重要な研究者」の中では、「教育活動の自己評価」のレベルと所属組織の研究志向性との間に関連性があるとは言えないようである（データ省略）。

本章のまとめ

これまで、「一般の研究者」と比較することによって、「重要な研究者」の特徴を、明らかにしてきた。その結果、以下の3点が明らかになった。

第1に、「師」である「重要な研究者」と「弟子」である「影響を受けた研究者」との関連を調べた結果、大学人が研究者として社会化される場合、自分と13歳程度離れた専門分野を同じくする大学人をモデルとし、選択されたモデルの研究活動レベルに対応して自身の研究活動レベルが規定されてくるのではないと思われる。

第2に、「重要な研究者」の属性的特徴を調べたところ、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、【研究志向性】【研究成果】【研究評価】ともに高くなっており、学界の中心に位置していることが明らかになった。また、自身のこれまでの研究活動の評価が高い「重要な研究者」ほど、自身のこれまでの教育活動を高く評価しているようである。

最後に、前節の分析結果から、「重要な研究者」の形成について明らかになったことは、まず生育家庭の環境は、「一般の研究者」の場合とそれほど顕著な違いは見られないが、

第5章 研究者養成上の問題点 一自由記述の要約一

本章では、現代の日本の大学における研究者養成についての問題点をまとめる。そのためのデータとして、「重要な研究者」に対する質問紙調査票の中で、「あなたご自身の体験やあなたが学生を指導した経験などから、現在の日本の大学における研究者養成についてご意見をお聞かせ下さい」とたずねた結果を使用した。

表5-1は、現代日本の大学における研究者養成上の問題点をまとめたものである。各カテゴリーは、さらに、サブカテゴリーに分類されて示されている。カテゴリー一別に見ると、最も多くの研究者が問題点として指摘したのは、「C 教育・研究環境に関する問題（136名）」であった。続いて、「F 大学の組織運営に関する問題（83名）」「D 学生への支援体制に関する問題（54名）」「B 学生の能力や学習姿勢に関する問題（42名）」などであった。

表5-1 現代日本の大学における研究者養成上の問題点（289名の意見）

A	大学入学以前の学校教育の問題	23名	
A1	初等・中等教育に関わる問題	12名	*
A2	大学入試制度に関わる問題	6名	*
B	学生の能力や学習姿勢に関する問題	42名	*
C	教育・研究環境に関する問題	136名	
C1	大学教員に関する問題	21名	*
C2	研究施設・設備に関する問題	16名	*
C3	研究費に関する問題	18名	*
C4	院生の指導方法や姿勢に関する問題	73名	*
D	学生への支援体制に関する問題	54名	
D1	生活費としての奨学金など生活支援	24名	*
D2	研究費や旅費など研究支援	13名	*
D3	就職先（ポスト）の不足／人事問題	34名	*
E	大学での教員・研究員が魅力ある職業でない	13名	*
F	大学の組織運営に関する問題	83名	
F1	大学間交流の促進／複数の指導教官制度	34名	*
F2	院生の指導体制について	21名	*
F3	大学の雰囲気作り／組織・制度改革	16名	*
F4	競争原理の導入	3名	
G	社会制度の改革	24名	
G1	大学や研究を支援する社会風土の形成	5名	*
G2	教員の正当な評価システムの確立	9名	*
G3	国の科学政策	9名	*
G4	日本的風土の改善	1名	

注) *印は、本文中で具体的に扱った事項

表5-1中で人数の後に*印をつけた（サブ）カテゴリーについて、具体的な内容を以下に示しておこう。

1. 大学入学以前の学校教育

「A 大学入試以前の学校教育の問題」としては、「A1 初等・中等教育に関わる問題」と「A2 大学入試制度に関わる問題」の2つの問題が指摘されている。

例えば、「A1 初等・中等教育に関わる問題」として、以下の通り指摘されている。

(なお、指摘中の最後の列に示した()内は、その意見を指摘した大学人の属性を示したものである。【性】は性別、【年】は年齢、【職】は職階、【専門】は専門分野、【量】は自己の研究活動の量的評価、【質】は自己の研究活動の質的評価、を示している。)

【A1 初・中等教育の影響】

「初・中等教育の影響ではないかと思うのだが、日本人の学生には、自分の意見をまとめる力が欠けているように感じられる。知識注入型の教育の結果なのかも知れない。

(【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】人文科学系【量】4【質】3)」

【A1 低学年教育のあり方/教師教育の改善】

「社会(特に母親)は画一的判断基準を元に、子供に勉強を強いて大学に入れ、子供も教えられる事に慣らされ、自分で考える事を拒否する。悪平等を進め、真のエリートを育てようとしな。真のエリートは率先して危険を犯し、国民のために働く者であろう。国外との競争を真の意味でしないとエリートは育たないであろう。そぼくに「何故」が言える低学年教育、それを教え、育てられる教師を育てる事が、時間はかかるが研究者養成には役立つのではないか。

(【性】男【年】53【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】6【質】3)」

【A1 初等・中等教育の改善】

「工学に関して、小、中、高等学校(普通高校)であまりにも無縁となっている。これらの年代の間に、工学の面白さに接しないために、大学で工学研究の情熱がわいてこないように思う。ScienceはTechnologyと結合してはじめて本当に面白いものとなるように思う。Scienceだけ教えている現在のやり方では純粋物理のような方向への情熱しか生まれてこないのではないだろうか。

(【性】男【年】50【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】3【質】2)」

【A1 高校教育の改善】

「私の研究分野に関していえば、最も多感な高校生の頃に読書し、自分で物を考える姿勢を身につけていく事が望ましい。その意味で現在、高校が大学入試の為の予備校的存在になり、最も大切な時に受験勉強だけに没頭している状況は嘆かわしいと思う。もっと根本的な大学入試制度の改善を図り、高校生時に自由な読書ができる様にすべきだと思う。私は研究者になるためには、才能というよりは、研究に対する情熱が何よりも重要であり、そうした情熱をなるべく若い時代で身につける事ができるような、高校教育の改善を期待している。

(【性】男【年】62【設置者】国立【職】教授【専門】人文科学系【量】3【質】3)」

【A1/A2 高校教育の改善】

「高等学校までに、学問(研究)に対する興味を持てるような教育が必要。受験が研究者への芽、研究への興味を持ってなくしているように思える。研究に必要な語学力、特に英語で外国の研究者との意見交換が出来る会話力を高等学校までにつける必要がある。

(【性】男【年】48【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】4【質】4)」

これらの指摘は、以下の「A2 大学入試制度に関わる問題」としての指摘された事項と無関係ではない。

【A2 偏差値教育の弊害】

「低学年からの偏差値教育で、自分でものを考え真理への肉薄に憧れる風潮が、生徒の世代に壊されている。近年の理科系離れ（特に物理離れ）もこれにつながっている。

（【性】男【年】62【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】1【質】1）」

【A2 センター試験の改善】

「共通一次試験以来、入試のために学んだ学科しか勉強しようとしないうし、「問題には必ず正解は一つしかない」といった勉強の仕方になっている。従って自分で色々考えようとする習慣がなくなっており、このままでは将来が大変危ぶまれる。この改善法として、中学、高校から教育方法を改めるべきだと思う。例えば1クラスの生徒数を減らし、複数教官で教えるも担任教官が責任を持って生徒の状態を把握できるようにする事、少なくとも大学進学する生徒には理科、社会の選択制を止め必修にする事。そして、基本的な事を学び、新しい事は必ずしも必要ではない。それから出来るだけ実物を見せ、自分でやる実験を取り入れる事。共通一次、或いは新テストは大学受験資格試験、ないしは高校卒業試験とし、全科目にわたって行う。大学入試は論文形式等他の方法に変える（内申、推薦等）などが必要と思う。

（【性】男【年】63【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】【質】）」

すなわち、高校入試や大学入試の現状が、望ましい初等・中等教育のあり方を歪めており、その事が、研究者として必要とされる思考力や姿勢を阻害していることが指摘されているのである。

2. 学生の能力や学習姿勢

第2に、「B 学生の能力や学習姿勢に関する問題」がある、とする指摘が以下の通りになされている。

【B 学生の基礎能力と好奇心の有無】

「学生が立派な研究者になるかどうかは、①しっかりした基礎、②旺盛な好奇心、の二点につきると思う。基礎がなければ好奇心があっても伸びないし、好奇心がなければ研究は出来ない。この二つを持った学生がいたら、大事に育てるべきである。

（【性】男【年】56【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】1【質】1）」

【B 学生の研究活動に対する姿勢】

「現代の若者は目先の問題にとらわれて、広く知識を己の内に積む事に励む事が少なく、功を焦りすぎてるきらいがある。

（【性】男【年】65【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】1【質】1）」

【B 院生の気概の無さ】

「このところ若い大学院生の気概がメッキリなくなってきたように思われる（特に日本人の学生の場合）。私の場合、昭和40年代・50年代のコースドクターは全て日本人であったが、60年代に入って日本人ドクターは一人も出していない（国費外国人留学生のみ）。これからの日本を考えると寂しい気がする。

(【性】男【年】54【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】1【質】1) 」

3. 教育・研究環境に関する問題

第3に、研究者を養成する上で重要となる「C 教育・研究環境に関する問題」が指摘されている。その中身は、「C1 大学教員に関する問題」「C2 研究施設・設備に関する問題」「C3 研究費に関する問題」「C4 院生の指導体制や方法に関する問題」の4つに分類される。

最初に、「C1 大学教員に関する問題」が指摘されている。その中でも、量的な問題が次のように指摘されている。

【C1 教員の削減問題】

「最近、人べらし(総定員法による人員制限)が進む中で、進められている大学院重点化は、学生(大学院生)指導の負担が増えるという点において大学のレベル低下、荒廃化をもたらす危険が大きい。」

(【性】男【年】55【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】3【質】2) 」

続いて、大学教員についての質的な問題として次のように指摘されている。

【C1 指導者自身の研究を高める】

「結局は自分と自分のまわりの研究を高めることが、より研究者養成につながる。自分の研究をおろそかにして研究者の養成など出来るわけがない。もちろんある程度のテクニックと知識はさずけられるが、何よりも大切なのは最初の研究方向の選択で、指導者が進んだ研究を行っていて始めて的確な指示を与え得る。」

(【指名】1【性】男【年】58【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】1【質】1) 」

【C1 指導者自身が自己規制する】

「研究者養成の立場にある者は、常に自ら諫めて第一線研究者であり続けなければならない。学会で発表したから、外国の国際研究会に出席したから、或いは著書を出したから研究者だとは必ずしもいえない。研究者としての自らに対する厳しい規制が必要である。こういう事が学生指導の前提である。」

(【指名】1【性】男【年】70【設置者】私立【職】教授【専門】社会科学系【量】【質】) 」

【C1 指導者自身が研究に情熱をもやしている事】

「設備の老朽化、研究費の貧困等など、大学について様々言われますが、自らの研究に情熱を燃やす研究指導者のもとからは必ず優れた研究者が育って行くものです。世間からは象牙の塔と呼ばれ特別視された、かつての大学の研究室でも、世界に通用する多くの研究業績が生まれ出た事も事実であります。そして其処には、創意、工夫の中から、自らの研究目的にアプローチして行く情熱がみなぎっていました。今でも、その様な研究室は沢山あることを信じていますし、……未知への飽くなき挑戦に情熱を燃やす研究者に、若き研究者の養成を任せるべきです。日本の大学に求められることは、予算の分取りに巧みな教授を良しとするのではなく、業績を挙げている研究室に予算が配分される仕組みを作ることです。そのためには、大学の管理と運営の機構を根底から見直す必要があります。」

(【性】男【年】68【設置者】私立【職】教授【専門】農学系【量】4【質】4) 」

【C1 優れた指導者に教育や指導の時間がない】

「研究者養成は制度や組織を整える事も大切ですが、いちばん重要なのは優れた指導者との出会いだと思います。しかし優秀なお手本となる研究者ほど教育や指導に時間をとられたくないというのが本音で、これを上手く解決できる方法が欲しいところです。

(【性】男【年】62【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】1【質】1)

学生を指導する上で、指導者自身が研究活動に対してどのように取り組んでいるかが重要であるという指摘がなされている。

とは言っても、以下のように、優れた研究者は研究に忙しく学生の指導時間が取れない、とのジレンマに落ちていることも指摘されている。

【C1 指導時間が取れない】

「現在の状況では、いい研究者意識は私のところではできていないと思う。理由は、自分自身が研究者であり、先端研究の発表が常に求められている場合、学生に考えるひまなく、次々を指示をさし、学生は単に仕事をするのみの状態になっているからである。研究者として養成するには、自分の研究を少しペースダウンし、学生に考えさせ、苦勞させ、方向がとんでもない方向に向いていれば少し訂正し、じっと見守る姿勢が大切と考える。その時自分自身も研究をし、その後姿を見せる事も重要である。一般に教授は学生と一体となっている所が少なく、これも問題である。

(【性】男【年】52【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】2【質】2)

「C2 研究施設・設備に関する問題」としては、次のように指摘されている。

【C2 研究施設の整備】

「とにかく、研究施設を備えないと学生の危険度が増すばかりになっている。阪大での爆発事故の様な事が有機化学の実験室では何時起きてても不思議でない状態である。

(【性】男【年】48【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】2【質】2)

【C2 研究環境の整備】

「日本の大学における研究者養成は困難になっている。その原因の一つは研究設備その他の研究環境が非常に悪くなってきている。3K職に近く、従って学生の研究に対するモラルが非常に強くなっていると思われる。

(【性】男【年】52【設置者】公立【職】助教授【専門】工学系【量】2【質】3)

【C2 図書館の充実】

「大学及び大学院の図書館を専門司書の充実により充実する(現在では、例えば東大の如きいわゆるトップ大学でさえ一定の教授在任期間と趣味によって、購入雑誌が決定され、国際的に必要な雑誌が欠けているか、あっても歯が抜けたように1960年欠本とか、70年以降は欠本という始末)

(【性】男【年】65【設置者】私立【職】教授【専門】人文科学系【量】2【質】1)

「C3 研究費に関する問題」としては、研究費の増額、教育予算の増額などについて次のように指摘されている。

【C3 研究費の増額】

「学会の研究発表を目玉にする事により研究者に対する刺激を与える事が重要である。海

外発表も出来るだけ奨励する事が望ましい。そのためには科研費、学会費、学会出張費などを潤沢に提供するべきであろう。

(【指名】1【性】男【年】63【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】4【質】4)

【C3 教育予算の増額】

「①文教予算全体の大幅増：今の政府、政治家達に言っても無理だろうが、これが大前提。小学校の理科の設備、備品、消耗品費の実態は恐るべきもの。②その中で高等教育予算の飛躍的增加と民主化：国立なら科研費をとらねば殆ど何も出来ぬ。私立ならそれもとれぬでは何が生み出せるか。私のような貧乏をバネでがんばるのでは、どうしても立派な研究は出来ない。特に今は（今後もますます）絶対無理だ。

(【性】男【年】63【設置者】私立【職】研究所長【専門】理学系【量】4【質】2)

「C4 院生の指導方法や姿勢に関する問題」としては、大学院試験の問題、学生を温かく見守る姿勢、指導教授の熱意、指導方法の工夫などについて、次のように指摘されている。

【C4 大学院試験の問題】

「現在、在職している大学では、博士課程は独立大学院であるため、修士課程からの進学がネックになっている。修士論文の作成も博士課程にはいるための準備が必要になり、全く本質からはずれてしまっている。同じ事が学部から大学院修士課程に進む場合にも起こっている。大学院にはいるための受験勉強という馬鹿げた事が起こっており、受験の害毒がここまで及んで来ているかと思ひ、将来の研究者養成に悲観的になる。

(【性】男【年】53【設置者】国立【職】教授【専門】人文科学系【量】3【質】2)

【C4 学生を温かく見守る姿勢】

「基本的に大事な事は、国籍を問わずオリジナルな研究はその将来がどうなるかわからなくとも、温かく見守り支える姿勢を研究者特に「優れた研究者」といわれる人が持つ事と思う。そのことより、「人まね研究」の芽はなくなると思う。……さらに、研究者はその研究テーマの源泉に戻る姿勢を持って欲しい。その姿を学生が見る事は何にもましての研究者の大事な点と考える。

(【性】男【年】50【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】1【質】1)

【C4 指導教授の熱意】

「一般的に、我々の世界、医科系大学での研究者養成は恵まれていると思う。しかしその中にいても、他大学卒業の教授、他教官は研究者養成という事に関しては熱心ではない。外国の研究者に接する時、下の者に教えようとする気持ちが強い事に驚嘆させられる。外国の本の書き方を見ても、日本の本とは比較にならないほどわかりやすい。研究者養成という目的のためには、その指導教授の熱意が非常に大切だと考える。また、研究者になろうと考えるのであれば、むしろ研究のテーマより、指導者を選ぶ事が大切であろう。

(【性】男【年】40【設置者】私立【職】助教授【専門】医歯学系【量】4【質】2)

【C4 指導方法の工夫】

「私のこれ迄の経験を述べると、学生に対する講義の中で教師が授業の内容ばかりでなく、現在自分の研究分野ではどの様な事が注目され、また世界的な興味はどの様な事かを自分の経験談を加味して講義内容に僅かでも盛り込む。その事から学生が研究に対して興味を抱ききっかけとなると思われる。そのためには講義の資料作りにかかなりの時間を要する。これらの事をふまえた上で、大学院学生と同様、学生に指導する事が研究者を含む養成に最も重要であろう。従ってこれらの事を行うためには自分の研究活動の時間はかなり

削減されるが、後進の研究者養成には我々教師が時間をかけてじっくり育てる事が最重要課題であると思われる。

(【性】男【年】48【設置者】私立【職】講師【専門】医歯学系【量】4【質】4) 」

4. 学生への支援体制に関する問題

本節では、「D 学生への支援体制に関する問題」を取り扱う。この問題は、「D1 生活費としての奨学金など生活支援」「D2 研究費や旅費など研究支援」「D3 就職先(ポスト)の不足/閉鎖性」の3つのカテゴリーに分類される。

まず最初に、「D1 生活費としての奨学金など生活支援」については、経済的支援として次の様な指摘がなされていた。

【D1 院生の経済的支援】

「大学院生の授業料を取らず、そのうちの50%程度は奨学金を与えて、研究者を積極的に育成しなければ、日本の大学は今後非常に危険な状態になると思われる。

(【性】男【年】53【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】2【質】1) 」

【D1 経済的な支援】

「大学院生とくに博士後期課程の学生にアルバイトをしなくて済むように経済的なサポートが必要である。それも同世代の人間の得る給与程度の額を支給してもらいたいと思う。近年、特別研究員制度が施行されたが、恩恵を受けれる学生数は僅かだ。流行にとらわれず、いずれの学問分野も常に用意しておかねばならない。数多いどの分野も後継者が必要である。それには特別研究員制度の枠では少なすぎる。生活の保障を与える事が研究者養成の第一歩であると考える。

(【性】男【年】49【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】4【質】1) 」

第2に、「D2 研究費や旅費など研究支援」については次の様な指摘がなされていた。

【D2 博士課程の学生に対する研究支援】

「研究者として成長するかどうかは大学院時代に決定する。大学院時代に研究に専念できる体制を根本的に強化する事。具体的には、大学院生、特に博士課程の学生に対する研究費、旅費を根本的に改善する事が必要。現在の制度では、大学院生が積極的に研究し、学会、研究会、国際会議等に出席するほど、研究室の赤字が増える制度になっている。

(【性】男【年】62【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】3【質】1) 」

【D2 若い研究者への支援】

「若い研究者の研究費が殆どない。従っていつまでも教授についている必要がある。これでは良い研究は出来る余地がない。

(【性】男【年】63【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】3【質】2) 」

【D2 海外留学の支援】

「小生の体験からみて30代、40代の時期に自分の研究で相談すべき学者が海外にいるとき、海外に師を求め、国際会議等に出て、多大の刺激を得た。フンボルト財団、フルブライト財団にあたる機関が拡充し、大学や学派のレベルを超えて広く中堅学者に海外経験を積ませることが望ましい。

(【性】男【年】63【設置者】私立【職】教授【専門】人文科学系【量】2【質】2)」

【D 2 大学間交流の促進】

「国内、国外の優秀な関連する研究者と交流できる機会をつくれるよう、できる限り協力する。」

(【性】男【年】75【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】4【質】4)」

最後に、「D 3 就職先(ポスト)の不足/人事問題」については、就職先の保証や学閥人事の改革などについて次の様な指摘がなされていた。

【D 3 研究者として独立して仕事ができる職場の確保】

「研究医者に關しては、研究者として独立して仕事ができる職場がないので、若い研究者は途中で研究生活を放棄せざるを得なくなる。」

(【性】男【年】63【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】3【質】2)」

【D 3 博士課程終了者に対する就職先の保障】

「第一の難関は、将来のポスト、生活が出発点において保障されていないということである。研究者としての資質ある学生であったとしても、大学院に残るよう積極的に勧誘することにためらいを感ずる。本人の意欲と一種の「かけ」のようなもので、その養成へのふんぎりを作っている。これでは計画的な研究者養成は困難といわざるを得ない。」

(【性】男【年】66【設置者】私立【職】教授【専門】社会科学系【量】3【質】2)」

【D 3 就職先(ポスト)の保証】

「人文系の学閥においては、博士課程学生の卒業後の職を確保するため、送り出し側、受け入れ側とも制度的検討を早急に行うことが今後の安定した研究者養成において不可欠と考える。」

(【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】人文科学系【量】2【質】2)」

これらの問題に対応するために、次のような指摘もなされている。

【D 3 学位取得者(博士)に対するポストドク制度】

「学位取得者(博士)に対するポストドク制を充実する。現在の文部省学振制度を発展解消、厚生省、農水省、科学技術庁、通産省、文部省等による国側が一体となったポストドク制度を作り、ポストドクの定員数、奨学金の額、手数を大幅に改善する。」

(【性】男【年】47【設置者】国立【職】助手【専門】理学系【量】4【質】6)」

【D 3 学閥人事】

「全ての大学が完全公募制を実施する事が出来れば、安心して研究者養成に専念できる。学閥をなくして実力のある者が職を得られる保障が不可欠である。」

(【性】男【年】63【設置者】私立【職】教授【専門】社会科学系【量】2【質】3)」

【D 3 教官の任期制】

「国公立の教官、私立の教員、国公立の研究機関の研究員(研究官)に任期制を導入し、人事交流を活発にして、若い研究者のポスト確保チャンスを広げる。」

(【性】男【年】47【設置者】国立【職】助手【専門】理学系【量】4【質】6)」

5. 職業としての大学人の魅力の問題

ここでは、「E 大学での教員・研究員が魅力ある職業でない」という事の問題について以下の通り指摘がなされている。

【E 職業としての研究職を魅力的なものとする】

「優れた研究者を養成する事は、経済大国のわが国が世界に対して果たすべき当然の責務である。そのためには、研究者に然るべき研究費と給与を支給し、その職業を魅力的なものとする事が急務である。特に、経済効率に結びつく事なく、またジャーナリズムにのる事のありえない人文科学の基礎分野に優秀な学生がくるような施策を講じる必要がある。この領域に金を出し惜しむと、わが国は将来を誤る事になる。

（【性】男【年】55【設置者】国立【職】研究所長【専門】人文科学系【量】6【質】2）」

【E 研究者の給与の改善】

「研究者の給与の改善が必要。論文投稿代や特に書籍代、学会費、旅費などは科学研究費がとれるまでは殆ど自分で払った経験がある。現在も若い人達が国際学会に参加する機会是非常に少ないのが現状である。

（【性】男【年】51【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】1【質】1）」

【E 給料を上げる】

「給料をもっとあげて、社会的ステイタスを高めないと若い院生が集まらない。

（【性】男【年】48【設置者】国立【職】助教授【専門】社会科学系【量】1【質】2）」

【E 医学部教授（とくに臨床医）には魅力がない】

「特に医学部の場合、医療職でなく、教育職であり、その給与の低さ、格差から優秀な人材が研究者になりたがらない。医学博士は単なるタイトルにすぎない。以後の研究の持続をすすめる程、医学部教授（とくに臨床医）には魅力がない。

（【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】2【質】3）」

6. 大学の組織運営に関する問題

本節は、「F 大学の組織運営に関する問題」について指摘された6つの事項の中から、特に指摘の多かった、「F1 大学間交流／複数の指導教官制度」「F2 院生の指導体制について」「F3 大学の雰囲気作り／組織・制度改革」の3つを取り上げた。

最初に、「F1 大学間交流／複数の指導教官制度」については、以下の通り指摘されている。

【F1 所属施設・指導者を自由にかえる】

「タテ割社会は研究者養成には向いていない。若いときに所属施設、指導者を自由にかえる事が出来、自身で自分の進路を選択できる事が望ましい。研究者が高レベルになる程、その真価を知る事の出来る人の数は限られてくるので、自由な研究者の交流が必要である。

（【性】男【年】58【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】5【質】2）」

【F1 複数の研究室で研究経験を持つ】

「多くの学生は卒研、大学院（修士、博士）で3～6年、同じ研究室で過ごす。このこと

が果たして妥当であろうか。若い時代、複数の研究室で研究経験を持つ事が将来プラスになると思う。例えば、卒研究生→修士、修士→博士の各進学段階では、同じ研究室からの進学を若干制限し、他の研究室からの受け入れをもっと行うシステムがあつてよいのではなかろうか。

（【性】男【年】63【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】4【質】4）」

【F 1 他大学の大学院の授業にも参加できる制度の確立】

「一定の条件を求めて、大学院学生は他大学の大学院の授業にも参加できる制度が確立されると良いように思われる（ECのエラスムス計画などが参考になるかも知れない）。

（【性】男【年】72【設置者】私立【職】教授【専門】人文科学系【量】3【質】3）」

【F 1 相互単位認定制度の確立】

「大学院コースの場合国公立、私立大学を問わず、相互単位認定制度を確立し、院生の研究する場、環境、指導教育、テーマに関する選択の自由度を太中に広げる。

（【性】男【年】47【設置者】国立【職】助手【専門】理学系【量】4【質】6）」

第2に、「F 2 院生の指導体制」については、以下の通り指摘されている。

まず、学位（Ph. D）を取得できるような指導体制に改めていくことが指摘されている。

【F 2 学位をもっと早く、多く出す】

「文科系の学位（博士）をもっと早く、多くださないと研究が停滞してしまう。

（【性】男【年】69【設置者】私立【職】学長【専門】社会科学系【量】1【質】1）」

【F 2 学位をもっと多量に出す】

「優秀な学生、可能性のある学生の研究意欲を刺激し、良い論文であれば課程博士の学位をもっと多量に出してよいのではないか。出し惜しみをする必要はない。

（【性】女【年】71【設置者】私立【職】学長【専門】【量】2【質】3）」

【F 2 Ph. Dを取得できる指導体制】

「最大の問題点は、わが国の大学院経済学研究所が、制度としてはある程度整備されているが、実態においては、十分に機能していない事である。つまり院生の研究指導がコース修了時のPh. D取得をもたらすような仕方で行われていないのである。その原因の一つに教育する側の旧制博士号を念頭においた、Ph. Dに対するmisleadingな思い入れがある。Ph. Dは、いわゆる学問の蘊奥を究めた事の印なのではなく、独立研究者である事の運転免許証に過ぎないにもかかわらずである。それでは、コース修了時に米国のPh. D取得者と同程度の研究成果を挙げる程度に、研究指導が行われているかといえば、そういう事もない。実はこれこそがわが国の大学院教育の貧困の現れなのである。……そしてその貧困さは、研究指導者自身の熱意の不足と研究能力の貧困に由来するところが大きいと思われる。

（【性】男【年】70【設置者】私立【職】教授【専門】理学系【量】1【質】1）」

続いて、研究者養成に適した大学組織に改組していくことの重要性などが指摘されている。

【F 2 教員の役割分担】

「現在の日本における研究者養成は大変非効率的だと思う。大学院大学化が進められつつあるものの、全国的にみれば学部、大学院同居、教授も兼任という悪条件は共通したもの

である。理想的には全国的に分散した特色ある大学院大学を新設すべきであろう。過渡的には同居、兼任を解消する事が重要と考える。全ての教員が平等に大学院、学部専門、教養に関わるというのは聞こえはよいが、研究者養成にはマイナスである。修士課程までの大学院はほぼ全国をカバーしている現状であるが、その全てが博士課程を持つという動きには、にわかに賛成できない。

（【性】男【年】64【設置者】私立【職】教授【専門】理学系【量】3【質】2）」

【F 2 研究者養成のための特別コースの設定】

「現在の日本の大学は、いわゆる進学率の上昇による大衆化の波に洗われていて、私の勤める大学でも上位30%程度の学生と、下位30%の学生では甚だしいギャップがある為、一概に研究者養成にポイントをおいた教育は進め難くなっている。これは大学院修士課程にまで及んで来ていて、しかも私自身の通ったようなハードトレーニングのコースはとても無理になっているように思われる。この点からカリキュラム、シラバスにより周到な配慮をして、研究者養成のための特設コースを考えていく必要があると思う。

（【性】男【年】63【設置者】国立【職】学部長【専門】社会科学系【量】2【質】2）」

【F 2 大学院コース内の区別】

「医学臨床系の研究者であるのでこの点から意見を記載する。特に臨床系では、診療技術の修得と研究とが明確に分離していないために混乱が著しく、弊害が多いきらいがある。従って診療技術の修得や研鑽のためのdegreeは別に設けて分離する必要がある。これによって中途半端な研究やdegreeを取るだけの研究との区別がしやすくなり、研究に質も向上する様に思う。

（【性】男【年】54【設置者】私立【職】教授【専門】医歯学系【量】3【質】3）」

【F 2 大学の役割分業】

「現在（1990年以降）大学は大学院充実に重点を移している。これは大変重要な事は是非達成しなければならない。しかし中身の学生、研究者はどうか。もっと厳しく見なければいけない。それは規則を厳しくする事ではなく、分業によって活性化させる事である。すなわち、①大学院重点化大学、②学部重点化大学、③教養主義大学それぞれの特色を持った国公私立大学を作り、学部重点化大学にいた学生が大学院重点化大学に進学するなどを容易にする事である。

（【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】理学系【量】【質】）」

最後に、研究者になるために社会体験が重要であるとの指摘が次のようになされている。

【F 2 社会体験を積んでから研究職に戻る】

「研究者が自分の位置を確認するためには、大学や大学院、研究室などの中だけで育つのではなく、いったんは外へ出て社会体験を積む事が絶対に必要だと、自分の成長過程から考えても思う。その為には、社会体験（少なくとも数年から十年ぐらい）のあと、研究職に戻れるようなシステムを作る事。

（【性】男【年】59【設置者】私立【職】教授【専門】人文科学系【量】4【質】4）」

第3に、「F 3 大学の雰囲気作り／組織・制度改革」については、以下の通り指摘されている。

【F 3 学内にゆったりとした雰囲気を取り戻す】

「研究成果をあげることに追われていていねいな研究者養成ができないような状況にも至っている。この様な状況を改めるには、金を増やせば良いという物ではなく、太学内にもつ

とゆったりとした雰囲気を取り戻す事が大事で、競争によってではなく、自らの学問的情熱、教育の情熱によって研究活動に取り組む事が大切だと思う。

（【性】男【年】55【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】3【質】2）」

【F3 大学という機関の性格を基本的に考え直す】

「日本の大学は今一般高等教育機関と捉える方がいいと思う。全て大学教員が研究者である必要はなく、求める事もない。研究は世界が相手なのだから、そのような研究は大学院を整備して、そこの教員に設備と研究費を与えて、それが出来る様にするべきだ。現在の大学院ではそれもできない。大学という機関の性格を基本的に考え直すべきだ。このままでは日本の大学の研究能力は駄目になってしまう。今の大学では研究者よりも、むしろ良き教師が必要だと思う。

（【性】男【年】67【設置者】私立【職】教授【専門】社会科学系【量】4【質】3）」

【F3 講座制の見直し】

「私の専門分野（有機合成化学）における日本の基礎研究業績の質は、国際比較で二流といわざるを得ない。その根源の本質は、言い訳的な研究費不足ではなく、閉鎖的な講座制の下で、能力ある若手が育ちにくい事である。教授の意識改革（大変困難）とともに、講座制の見直しが強く求められる。

（【性】男【年】62【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】4【質】2）」

【F3 教官の雑用の軽減】

「大学院における講義内容の充実が急務と思われる。しかし、教育研究活動以外の仕事が多く、まず教育・研究活動に専念できる環境作りが重要である。

（【性】男【年】54【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】1【質】1）」

【F3 国際的に通用する慣行・基準の徹底】

「大学の教育、研究、行政全ての分野で、国際的に通用する慣行、基準を徹底させる必要あり。例えば本アンケートのごとき調査でも「国際学会雑誌の編集委員をしているか」

「国際学会雑誌に幾つ論文を出したか」などの問を加える必要あり。試験の基準を100～50点をAとするような慣行から100～90をAとするように改める（大学の中には50までをCとしているものさえある）。筆記試験でも、しかし特に論文試験で、採点の試験管の間に共通する、国際的に通用する客観的判断基準を明確にする。この様な調査に、日本の大学で数年教えた経験のある外国人教師の意見を積極的に吸収する。tenure付きの外国人教師の雇用を人文、社会学分野で推進する。

（【性】男【年】65【設置者】私立【職】教授【専門】人文科学系【量】2【質】1）」

7. 社会制度に関する問題

本節は、「G 社会制度に関する問題」について指摘された4つの事項の中から、「G1 大学や研究を支援する社会風土作り」「G2 教員の正当な評価システムの確立」「G3 国の科学政策」の3つを取り上げた。最初に、「G1 大学や研究を支援する社会風土の形成」については、以下の通り指摘されている。

【G1 スポーツ文化の形成】

「スポーツ、体育の世界に於いて、運動を対象とした研究分野はヨーロッパ諸国と比べて大変遅れていると思う。わが国に於けるスポーツ文化の水準が極めて低いため、世間がなかなかこの分野の研究を認めない。戦後48年も経過した今日、わが国に於いてはスポー

ツ文化が世の中に定着していない。農耕民族で国が豊かでなかったわが国に於いてスポーツといえば、チャンピオンスポーツ一色で考えられ、一般市民の楽しむスポーツが未だに根をおろしていない。ヨーロッパ諸国（先進国）の水準に到達するまでには、まだ数十年の歳月を必要とするであろう。

（【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】体育学系【量】2【質】2）」

【G 1 学問を大切に社会的な風潮】

「研究者をつまみ学問を大切に社会的な風潮と、それによって支えられた研究者を支援する社会的システムが日本ではあまりにも遅れているように思う。

（【性】男【年】45【設置者】国立【職】助教授【専門】医歯学系【量】1【質】1）」

【G 1 社会が基礎研究の重要性を評価することが大切】

「大学における研究について、社会の理解が乏しい。企業に比して大学は大幅に地盤沈下した。社会が基礎研究の重要性を評価することが大切である。大学における研究者は、このことを社会に訴える必要がある。また大学の研究者も新しい研究を目指して相互に競走を活発にする必要がある。

（【性】男【年】65【設置者】私立【職】教授【専門】理学系【量】【質】）」

第2に、「G2 教員の正当な評価システムの確立」については、以下の通り指摘されている。

【G 2 研究者の公正な評価】

「一番大切な事は、研究指導者が公平、適切な研究の評価をする事。特に独創性、将来性を見抜き、それに応じた研究の場、研究費を与える事。日本の現状は能力あるものも、ないものも共同で研究し、著者名は10人以上も並んで誰のオリジナリティかはっきりしない。著者名は3人まで、多くて5人が本当の姿ではないか。

（【性】男【年】63【設置者】国立【職】教授【専門】医歯学系【量】1【質】1）」

【G 2 学位審査の改革】

「私の研究室の学生には、研究成果を国内の学会で発表することを積極的に禁止しています。理由は二つあります。まず、国内の学術社会が評価機能を持たず、どの綿から見ても非生産的で、しかも学術社会構成員のほとんどが、それからくる有難味を享受する立場をとっており、改善の可能性がみられないからです。……次にコンピュータ技術に関しては、基本的な重要概念のほとんどが英語の世界で生み出されたものであり、これが日本語の世界に持ち込まれると全く異なった概念に置き換えられてしまう事も少なくないからです。……世界共通の概念構造の下で研究を展開し、世界共通の土俵で成果を主張できるようになる事が必要です。ところでここで問題になる事があります。私の研究室の学生にとって、所定の期間内で学位を取得する事が大変困難になる事です。なぜなら日本の大学では、業績評価の便法として学術誌に掲載された論文の数をカウントする習慣を固持しているからです。質の高い国際誌へ投稿していたのでは、そう簡単には数が稼げません。そこで一般的には、いきおい掲載され易いレベルの低い学術誌を選ぶ傾向に走ります。学内紀要に類するものは、学位取得条件を揃えるために利用される事が多く、日本の大学のレベル、さらには日本の学術レベルを下げるのに貢献しているといえます。学位審査にあたって、論文数をカウントする悪習を捨て、研究の本質を評価する努力をしない限り、日本の大学、日本の学術社会はいよいよ社会の進歩から取り残される事になると思います。

（【性】男【年】57【設置者】国立【職】教授【専門】工学系【量】3【質】1）」

【G 2 正当な評価】

「特に教授選などでは、教育評価や学内での活動の評価などに論文の質でなく、数だけに

評価されるのは不利であり、不公平なところである。やる気を失わせる。学部にあった内容で正当に評価すべきである。大学の乱立で教授、助教授の数のみで質的にひどい差があり、レベルダウンが目に見えてくるこの頃のように思われる。何とか正当な評価、納得できる質査定の方法を考えていただきたいものである。

(【性】女【年】56【設置者】国立【職】助教授【専門】 【量】3【質】2) 」

第3に、「G3 国の科学政策」については、以下の通り指摘されている。

【G3 国の政策】

「科学の進歩は国の将来に大きく影響を与えるという立場で、研究者を養成する大学を常に支援するという姿勢が、国の政策の中にあってもらいたいと思う。自然科学は総合的な分野であり、一つの分野が一見不必要に見えても、それが将来はかりし得ない恩恵を人類に与えるかも知れない。

(【性】男【年】56【設置者】公立【職】教授【専門】農学系【量】1【質】1) 」

【G3 国の科学政策の改善】

「今日の日本政府は教育研究のために使う国費を減らして、民間(企業等)にその肩代わりをさせようとする方針をとっているように見受けられるが、まことに嘆かわしい事である。企業等が提供する研究費では、利潤追求に役立つ分野の研究が進むかもしれないが、私どものような分野の研究はますます貧しくなるばかりである。

(【性】男【年】58【設置者】国立【職】教授【専門】人文科学系【量】3【質】) 」

このように、研究者養成を支援するように政策を展開するよう求められている一方、次のように性急な政策の展開を牽制する指摘もある。

【G3 国の科学技術政策】

「現在、大学院の新設が急ピッチで行われている。又、文部省も大学院の定員充足を要求し、更に定員倍増などという声も聞かれる。大学院を重視することはよいことだと思うが無理な拡張をすれば研究者養成という本来の目的が失われる可能性がある。特に文学においては深刻な問題である。

(【性】男【年】61【設置者】国立【職】学部長【専門】人文科学系【量】5【質】3) 」

本章のまとめ

以上、研究者の養成に携わっている大学人が現在抱えている問題点についてまとめてきた。その問題の中心は大学院教育の教育・研究環境にあるわけであるが、それに加えて、大学入学以前の初等・中等教育の問題、学生自身の能力や学習姿勢に関する問題、学生への支援体制に関する問題、大学の組織運営に関する問題、社会制度に関する問題、など大学院を取り巻く様々な問題の指摘もあった。

これらの諸問題は、一朝一夕で解決されるようなものではないが、国の存亡にも関わる基礎研究・技術の開発を担う大学人の形成を考えると、一刻も早く対処すべきであると思われる。

(大膳 司)

おわりに

本研究の目的は、日本において「基礎研究」を充実させるための方策として、創造的な大学人の養成が重要ではないかとの前提にたつて、大学人の形成過程と今後の大学人の養成のための課題を明らかにすることにあつた。

本報告書の5つの章で明らかになったことは以下の通りである。

1. 結果の概要

第1章では、研究活動の質的自己評価と量的自己評価に基づいて大学人を5つに分類した。この自己評価は、学術賞受賞に代表される【社会的評価】とも有意な関連性があり、もともとは主観的な評価ではあるものの、客観的な研究活動評価としての使用可能ではないかと思われる。特に、「高質高量」の大学人は、これまでの研究成果に対する【社会的評価】も高く、現在の【研究活動志向性】も高くなつていた。

「大学人分類」の違いは、出身家庭の学歴レベルや経済状態の違いではなく、本人がより高い学位を取得しているとか、留学の経験が有るとか、研究活動面からみてより質の高い学部を移動していたなどが関連していた。

大学人の中でも科学的社会化が最も進んでいると思われる「高質高量」の形成に際して、「大学院時代」の指導教官や「留学」を通しての世界の学界をリードする研究者との出会いが重要な影響を及ぼしているようであった。

第2章では、まず最初に、女性大学人のおかれている高等教育機関内での地位を検討した結果、男性大学人に比べて女性大学人は、研究指向の機関に勤務している割合が低いこと、その結果、研究への指向性が弱いこと、実際の学問生産 (scientific productivity) の側面での自己評価が厳しくなつていくことが明らかにされた。

続いて、女性大学人の科学的社会化のプロセスの特徴を探つた。

まず、女性大学人の育つた家庭的な背景をみると、両親の学歴という点では男女間に有意な差がみられた (女性の方が、両親の学歴が高い) のに対して、家庭の経済状況や、研究者としての再生産化の程度では、男女間に有意な差はみられなかった。

女性大学人の養成にとって重要な大学院時代の特徴は、指導教官の重要性である。また、また、今まででの、大学院での師弟関係を離れ、職場を獲得し、その中で学問研究を遂行することになる30才台で特に重要であったと判断されることは、上司による指導や励まし、世界的学者との出会い、同僚との学問的ネットワーク、そして、海外留学による新しい世界の見聞や刺激といったものである。ここでも、学問研究上のネットワーキングが重要なものとして、認識されていることがわかる。

さらに、研究者として成長するうえで重要であった事項をたずねたところ、概して、男性大学人が学問生産 (scientific productivity) に直結する項目 (例. 「自分の研究費」「研究の支えとなる若手研究者の存在」「独創性を求める科学の規範」「科学の先取権競

争」など)を重視する傾向があるのに対して、女性大学人の場合は研究を支えるバックグラウンドとなる項目(例、「自分の配偶者の協力」などのような家庭的背景や「自分の受けた大学院教育」などのような学校教育など)を重視する傾向があるように思われた。

大学人の世界は今日においてもなお、男性中心の社会であり、その中で女性が研究者を目指そうと思えば、さまざまな支援態勢(とくに指導教官、上司、同僚、配偶者などの人的なネットワーク)が欠かせないようである。

第3章では、学問分野別に大学人の科学的社会化の特徴について検討した。その結果、科学的生産性を指標としてみると、ほとんどの分野において、生育環境よりも、留学や学位取得といった学習歴が科学的社会化に重要な役割を果たすことが明らかになった(ただし、農学では特異なパターンがみられる)。

また、科学的社会化にとって、大学院をはさむ前後の時期が重要とされている点は各分野に共通しているが、人文科学・社会科学・理学ではこの時期の前半が、工学・農学・医学ではこの時期の後半が重要と考えられている。

さらに、科学的社会化にとって重要だったこととして、自らの情熱・パーソナリティ・能力が重要と考えられている点は、各分野に共通している。文科系と理科系において差がみられるのは、大学院教育(特に修士課程)の位置づけと効果である。すなわち、「大学院教育」は、人文・社会科学においては「大学教育」と並んで重要とされているが、理学・工学・農学・医学の分野では、大学・大学院教育よりも「独創性をもとめる規範」の方が重要と考えられている。

最後に、科学的社会化の過程において専門分野間を移動することは、科学的生産性を高める効果を持つことが明らかになった。

第4章では、大学人の科学的社会化にとって重要な影響を与える研究者(重要な研究者)の特性と形成について検討した。その結果、「重要な研究者」は「一般の研究者」に比べて、博士号を取得している比率が高く、量的にも質的にも研究活動の自己評価が高くなっていることが明らかになった。

また、「重要な研究者」は、外国留学を経験している者の比率が高く、特に、「研究者として留学」している比率が高い。また、学部時代から教授時代まで一貫して研究志向の組織に所属している比率が高くなっていた。

その「重要な研究者」の中でも、「教育活動の自己評価」のレベルが高い者は、父親が研究者である比率が高く、さらに、「小・中学校の頃」などの若い時から研究者になることを意識し始めているようである。

すなわち、「重要な研究者」は、若い時から研究者の生活を見て育ち、大学以降はより研究志向の強い研究者のもとで社会化されるという、ある意味では将来の学界を担うべく「研究者としての帝王学」を受けて育った大学人であると言えるのかもしれない。

2. まとめと今後の課題

本研究では、これまでの日本の科学技術(特に、基礎研究)を支えてきた大学人を対象

に分析してきたわけであるが、その結果、一般的に、大学人の科学的社会化にとって大学院教育や若い時期での留学の経験が重要であることが明らかになった（出身家庭の影響はあまり受けていない）。特に、研究活動の活発な大学人は、研究志向の強い優秀な研究者のいる大学で形成されている。すなわち、優秀な研究者から研究者としての行動様式を学び取ることによって大学人は社会化されるというわけである。特に、自然科学分野においてそうである（そのような研究者としてのモデル（「重要な研究者」）は日本にばかりいるわけではなく、研究者になったばかりの若い時期に外国留学をした先で出会う優秀な研究者もまた研究者としてのモデルとなるのである）。

また、女性大学人にとっては、研究者として社会化されるうえで、大学院時代や初職当時の教師や上司の理解の重要性は当然として、さらに、出身家庭や生殖家庭における両親やパートナーの理解が重要である。

大学人の形成に影響を与えてきた「重要な研究者」へのアンケートによって、研究者を養成するうえで現在どのような問題点を感じているかをたずねたところ、以下のようなことが指摘されていた（詳細は、第5章を参照のこと）。

第1に、学生が大学に入学してくる以前の問題点として、高校入試や大学入試の現状が、望ましい初等・中等教育のあり方を歪めており、その事が、研究者として必要とされる思考力や姿勢を阻害している。

第2に、大学生自身に基礎能力や好奇心がないとか、研究に対する気概が感じられ無い。

第3に、最近、人べらしが進む中で、進められている大学院重点化は、学生（大学院生）指導の負担が増えるという点において大学のレベル低下をもたらす危険が大きいこと、また、学生を指導する上で、指導者自身が研究活動に対してどのように取り組んでいるかが重要であるにもかかわらず、優れた研究者は研究に忙しく学生の指導時間が取れないとのジレンマに落ちている。

第4に、「学生への支援体制に関する問題」として、「生活費としての奨学金など生活支援」「研究費や旅費など研究支援」「就職先（ポスト）の不足／閉鎖性」の3種類の問題が指摘されている。

特に、「就職先（ポスト）の不足／閉鎖性」の問題を解決するために、学位（博士号）取得者に対するポストドク制度の充実、全ての大学が完全公募制を実施する事、国・公・私立の教員や国公立の研究機関の研究員（研究官）に任期制を導入し、人事交流を活発にして、若い研究者のポスト確保チャンスを広げる、などが提案されている。

第5に、「社会制度に関する問題」として、「大学や研究を支援する社会風土作り」「教員の正当な評価システムの確立」「国の科学政策」の3種類の問題が指摘されている。

まず、「大学や研究を支援する社会風土の形成」については、学問を大切に社会的な風潮と、それによって支えられた研究者を支援する社会的システムが日本ではあまりにも遅れているとか、大学における研究について社会の理解が乏しい、などが指摘されている。

さらに、「国の科学政策」については、科学の進歩は国の将来に大きく影響を与えるという立場で、研究者を養成する大学を常に支援するという姿勢が、国の政策の中にあってもらいたいとか、今日の日本政府は教育研究のために使う国費を減らして、民間（企業等）

にその肩代わりをさせようとする方針をとっているように見受けられるなどと指摘されている。

これら5つの指摘の他に、「職業としての大学人の魅力の問題」や「大学の組織運営に関する問題」などが指摘されていた。

国の存亡にも関わる基礎研究・技術の開発を中心的に担っているのは大学である、ということを考える時、上で指摘したような様々な問題に一刻も早く対処すべきであると思われる。

なお、今後の研究課題として、これまでに明らかにされた分析結果は大学人一般の傾向なのか、それとも、国別、時代別、性別、専門分野別、で何がしかの特徴があるのか、確認していく必要がある⁽¹⁾。

さらに、研究者から「学問の中心地」として認知されている米国における研究者養成の実体と比較することによって、日本の研究者養成の問題点を明らかにする必要がある⁽²⁾。

〈注及び参考・引用文献〉

- 1) Lawrence, Janet H. & Robert T. Blackburn, "Faculty Careers: Maturation, Demographic, and Historical Effects," Research in Higher Education, Vol.22, No.2, 1985, pp.135-154.
- 2) 有本章編『「学問中心地」の研究 -世界と日本にみる学問的生産性とその条件』東信堂、1994年、290頁。

(大膳 司)

【付表1】

大学人の科学的社会化に関する基礎調査

琉球大学 法文学部
「重要な研究者」の形成に関する研究会
研究代表者 助教授 大膳 司

—ご協力のおねがい—

本調査は、21世紀学術文化財団より研究奨励金を受けた『「重要な研究者」の形成に関する科学社会学的研究』の一環として行われる質問紙調査です。

本質問紙調査は、わが国の国・公・私立大学に勤める大学人の形成過程及び学術研究活動の現状を明らかにすることによって、大学における教育・研究環境の改善のための課題や方策を検討することをねらいとしております。

ご多忙中のところまことに恐縮に存じますが、なにとぞ宜しくご協力くださいますようお願い申し上げます。

結果の公表によって、皆様にご迷惑をおかけすることのないよう、細心の配慮をする所存でございます。どうか率直なご意見をお寄せ下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご協力いただきました皆様には、後日、調査結果の概要を送らせていただきます。

ご記入上の注意

1. 各設問にある選択肢の中から、該当する事項を選んで、その番号を○印で囲んでください。
2. ご意見を記入されるときは、() や [] 内にあてはまる値や事柄をご記入ください。
3. その他、ご意見がある場合には、余白の部分にご自由にお書きください。
4. 答えにくい質問もあるとは思いますが、その部分のご回答は保留していただいて結構ですので、最後までご回答ください。
5. 複数の学校に勤務されている場合は、この質問紙を受け取られた大学についてお答えください。
6. 結果はすべて統計的にまとめますので、お答えいただいた先生方に個人的にご迷惑をかけることは一切ございません。
7. ご回答いただいた調査票は、同封の返信用封筒に入れ、8月31日(月)までにご投函ください。
8. 調査についてのお問い合わせは下記にお願いします。

〒903-01 沖縄県中頭郡西原町千原1番地
琉球大学 法文学部内
「重要な研究者」の形成に関する研究会
電話 (098) 895-2221 (内線 2351) 大膳 司

質問をよくお読みいただき、ご回答ください。ご回答は選択肢の番号を○印で囲んでください。また、()内は数値で、[]内や[]内は文字でご回答ください。なお、下記の各設問に関連した資料をお持ちでしたら、その写しを同封いただければ幸いです。

【問1】～【問6】では、あなたご自身のことについてお尋ねします。

【問1】あなたの性別 1. 男 2. 女

【6頁の表1-3を参照】

【問2】あなたの誕生日 明・大・昭 ()年 ()月

	20・30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	計
高質高量	22 13.17	47 28.14	51 30.54	47 28.14	167 100.00
高質中量	10 11.36	28 31.82	35 39.77	15 17.05	88 100.00
中質中量	51 18.35	87 31.29	81 29.14	59 21.22	278 100.00
中質低量	21 29.17	25 34.72	14 19.44	12 16.67	72 100.00
低質低量	53 45.69	30 25.86	17 14.66	16 13.79	116 100.00
計	157 21.78	217 30.10	198 27.46	149 20.67	721 100.00

対自乗値 = 68.120 P<0.001

注) 年齢は、調査時点(1992年)から誕生日を引いて計算した。

【問3】あなたの出身地 ()都・道・府・県

北海道・東北地方	106 (13.0%)	関東地方	225 (27.6%)
中部地方	128 (15.7%)	近畿地方	166 (20.4%)
中国・四国地方	69 (10.9%)	九州・沖縄地方	97 (11.9%)
外国	3 (0.4%)		

【問4】あなたの所属大学(学校)についてお尋ねします。

所属大学・学部の名称 []大学 []学部 []学科

所属大学の設置者 1. 国立 2. 公立 3. 私立

【6頁の表1-3を参照】

【問5】あなたが所属されている学科(学科相当も含む)は、つぎのいずれの分野に該当しますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 人文科学系(文学・史学・哲学など)
2. 社会科学系(法学・政治学・経済学・心理学など)
3. 理学系(数学・物理学・化学・生物学・地学など)
4. 工学系(機械工学・電気工学・応用化学など)
5. 農学系(農学・農業工学・水産学・畜産学など)
6. 医歯学系(医学・歯学・薬学など)

7. 保健学系 (看護学・保健学など)
8. 家政学系 (家政学・食物学・被服学・住居学など)
9. 教員養成系 (小学校課程・中学校課程など)
10. 芸術学系 (美術・デザイン・音楽など)
11. 体育学系 (体育など)
12. 一般教養学系 (教養学・総合科学など)
13. その他 ()

【問6】あなたの現在の職階は何ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 教授 2. 助教授 3. 講師 4. 助手 5. その他 ()

【6頁の表1-3を参照】

【問7】～【問11】では、あなたの生育家庭環境についてお尋ねします。

【問7】あなたのご両親の最終学歴をお尋ねします。あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| (1) あなたの父親 | (2) あなたの母親 |
| 1. 小学校卒業程度 | 1. 小学校卒業程度 |
| 2. 中学校卒業程度 (旧制高等小学校卒) | 2. 中学校卒業程度 (旧制高等小学校卒) |
| 3. 高等学校卒業程度 (旧制中・女学校卒) | 3. 高等学校卒業程度 (旧制中・女学校卒) |
| 4. 短期大学卒業程度 (旧制高等専門学校卒) | 4. 短期大学卒業程度 (旧制高等専門学校卒) |
| 5. 大学・大学院卒業程度 | 5. 大学・大学院卒業程度 |

【6頁の表1-3を参照】

【問8】あなたが大学に入学するまでの家庭の経済状況は、学友の平均的家計状況と比較してどうでしたか。学校段階別に、あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | | | |
|------------|----------------|------------|----------|
| (1) 小学校時代 | 1. 平均以上に裕福であった | 2. 平均的であった | 3. 貧しかった |
| (2) 中学校時代 | 1. 平均以上に裕福であった | 2. 平均的であった | 3. 貧しかった |
| (3) 高等学校時代 | 1. 平均以上に裕福であった | 2. 平均的であった | 3. 貧しかった |

【6頁の表1-3を参照】

【問9】あなたご自身のご家族に研究者 (大学の教員や企業の研究所の研究員等) がおられますか。あてはまる番号すべてを選んでください。

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 1. 私の祖父は研究者である | 4. 私の母親は研究者である |
| 2. 私の祖母は研究者である | 5. 私のきょうだいに研究者がいる |
| 3. 私の父親は研究者である | 6. まったくない |
| 7. その他: 私の () が研究者である | |

【6頁の表1-3を参照】

【問10】あなたには、兄弟姉妹はそれぞれ何人おられましたか。該当する数字を () 内にご回答下さい。

兄 () 人、弟 () 人、姉 () 人、妹 () 人

【問11】上記のきょうだい中、何人が大学に進学し、そのうち何人が研究者（大学の教員や企業の研究所の研究員等）になりましたか。あなたご自身を含めて、該当する数字を（ ）内にご回答下さい。

男きょうだいの内、（ ）人が大学に進学し、そのうち（ ）人が研究者になった。
 女きょうだいの内、（ ）人が大学に進学し、そのうち（ ）人が研究者になった。

【問12】～【問14】では、あなたのご家庭についてお尋ねします。

【問12】あなたは、結婚なさっておられますか。

1. はい => 今年は結婚して（ ）年目である 2. いいえ => 【問15】にとんでください

	はい	いいえ	計
高質高量	155 93.37	11 6.63	166
高質中量	75 85.23	13 14.77	88
中質中量	244 88.09	33 11.91	277
中質低量	55 76.39	17 23.61	72
低質低量	86 74.14	30 25.86	116
計	615 85.54	104 14.46	719 100.00

χ^2 自乗値 = 26.755 $P < 0.001$

【問13】あなたの配偶者も研究者ですか。

1. はい 2. いいえ

	はい	いいえ	計
高質高量	18 11.69	136 88.31	154
高質中量	16 21.62	58 78.38	74
中質中量	41 16.87	202 83.13	243
中質低量	12 21.82	43 78.18	55
低質低量	19 22.09	67 77.91	86
計	106 17.32	506 82.68	612 100.00

χ^2 自乗値 = 6.546 $P < 0.162$

【問14】あなたの配偶者の家族に研究者はおられますか。あてはまる番号すべてを選んでください。

1. 配偶者の祖父が研究者である 4. 配偶者の母親が研究者である
 2. 配偶者の祖母が研究者である 5. 配偶者の兄弟（姉妹）に研究者がいる
 3. 配偶者の父親が研究者である 6. まったくない
 7. その他：配偶者の（ ）が研究者である

	はい (いない)	いいえ (いる)	計
高質高量	107 69.03	48 30.97	155 25.20
高質中量	45 60.00	30 40.00	75 12.20
中質中量	162 66.39	82 33.61	244 39.67
中質低量	34 61.82	21 38.18	55 8.94
低質低量	67 77.91	19 22.09	86 13.98
計	415 67.48	200 32.52	615 100.00

材自乗値 = 7.278 P<0.122

【問15】～【問31】では、あなたの学歴・職歴についてお尋ねします。

【問15】小学校、中学校、高校、大学学部、大学院の各学校段階において、あなたが特に熱中したこと（例、数学、物理学、昆虫採集、野球、山登り、など）で、あなたの研究者としてのこれまでの活動に影響したことがありましたら（ ）内にご回答下さい。また、それはあなたの研究者としての活動にどのように影響しましたか、[]内にご回答下さい。

1. 小学校時代 () ==> [.
2. 中学校時代 () ==> [.
3. 高校時代 () ==> [.
4. 大学学部時代 () ==> [.
5. 大学院時代 () ==> [.

【問16】大学進学の際、誰の助言を参考にして学部を決定しましたか。あてはまる事項すべてを○で囲んで下さい。また、その中でも最も参考にしたのは誰の助言でしたか。あてはまる事項を1つ選んで●で囲んで下さい。

1. 父親の助言
2. 母親の助言
3. 高校教師の助言
4. 友人の助言
5. 親類の人の助言 (誰ですか:)
6. 自分で決定 ==> 【問18】へとんでください
7. その他 ()

	参考にし た	最も参考 にした	参考にし なかった	計
高質高量	117 70.06	14 8.38	36 21.56	167
高質中量	63 71.59	6 6.82	19 21.59	88
中質中量	202 72.66	16 5.76	60 21.58	278
中質低量	50 69.44	5 6.94	17 23.61	72
低質低量	78 67.24	8 6.90	30 25.86	116
計	510 70.74	49 6.80	162 22.47	721 100.00

材自乗値 = 2.274 P<0.971

【問17】【問16】で○をつけた助言者は、どのような助言をして下さいましたか。

【問18】現在の専門分野において研究者となることを意識し始めたのはいつ頃ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。また、それは何年生の頃でしたか、()内にご回答下さい。

1. 小学校 () 年生の頃 2. 中学校 () 年生の頃 3. 高校 () 年生の頃
4. 大学 () 年生の頃 5. その他 ()

	小学校・ 中学校	高校	大学	大学卒業 後	計
高質高量	22 13.92	21 13.29	89 56.33	26 16.46	158
高質中量	12 14.63	13 15.85	31 37.80	26 31.71	82
中質中量	30 11.67	26 10.12	133 51.75	68 26.46	257
中質低量	6 9.09	5 7.58	32 48.48	23 34.85	66
低質低量	3 3.00	13 13.00	44 44.00	40 40.00	100
計	73 11.01	78 11.76	329 49.62	183 27.60	663 100.00

材自乗値 = 30.720 P<0.002

【問19】あなたが、現在の専門分野において研究者になることを意識し始める契機となるようなことがありましたら、教えて下さい。

【省略】

【問20】大学院の進路決定に際して、葛藤を起こしたり、何らかの問題が生じたりした経験があれば教えて下さい。また、それらの問題をいかにして克服なさいましたか。

【省略】

【問21】あなたの学歴を教えてください。

- 明・大・昭・平 () 年 [] 大学 [] 学部 卒業
明・大・昭・平 () 年 [] 大学大学院 [] 研究科修士課程 修了
明・大・昭・平 () 年 [] 大学大学院 [] 研究科博士課程 修了

【問22】あなたが取得された最高学位についてお尋ねします。あてはまる番号を1つ選んでください。

- 1) あなたが取得された最高学位は何ですか。 1. 学士 2. 修士 3. 博士
4. その他 ()
- 2) 何年に取得されましたか。 明・大・昭・平 () 年 取得

【6頁の表1-3を参照】

- 3) どの国で取得されましたか。 1. 日本 2. アメリカ合衆国 3. ドイツ
4. イギリス 5. フランス
6. その他 ()

【問23】あなたが最高学位をとられた専門分野は何ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 人文科学系 (文学・史学・哲学など)
2. 社会科学系 (法学・政治学・経済学・心理学など)
3. 理学系 (数学・物理学・化学・生物学・地学など)
4. 工学系 (機械工学・電気工学・応用化学など)
5. 農学系 (農学・農業工学・水産学・畜産学など)
6. 医歯学系 (医学・歯学・薬学など)
7. 保健学系 (看護学・保健学など)
8. 家政学系 (家政学・食物学・被服学・住居学など)
9. 教員養成系 (小学校課程・中学校課程など)
10. 芸術学系 (美術・デザイン・音楽など)
11. 体育学系 (体育など)
12. 一般教養学系 (教養学・総合科学など)
13. その他 ()

	人文科学系	社会科学系	理学系	工学・農学系	医歯学系	計
高質高量	27 17.09	25 15.82	23 14.56	49 31.01	34 21.52	158
高質中量	19 22.89	11 13.25	18 21.69	15 18.07	20 24.10	83
中質中量	43 17.55	39 15.92	35 14.29	64 26.12	64 26.12	245
中質低量	9 13.64	7 10.61	10 15.15	17 25.76	23 34.85	66
低質低量	21 21.43	8 8.16	7 7.14	19 19.39	43 43.88	98
計	119 18.31	90 13.85	93 14.31	164 25.23	184 28.31	650 100.00

χ²自乗値 = 31.278 P<0.012

【問24】あなたの職歴（最初にその職に就いた年）をご回答ください。

- 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部 助手
 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部 講師
 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部 助教授

【問25】あなたは、これまでに、高等教育機関において、以下の役職を経験なさったことがありますか。あてはまる番号をすべて選んでください。

1. 学長 2. 理事長 3. 学生部長 4. 図書館長 5. 学部長
 6. 研究所長 7. 評議員 8. どの役職の経験もない

	経験無し	経験有り	計
高質高量	115 68.86	52 31.14	167 100.00
高質中量	65 73.86	23 26.14	88 100.00
中質中量	208 74.82	70 25.18	278 100.00
低質中量	66 91.67	6 8.33	72 100.00
低質低量	96 82.76	20 17.24	116 100.00
計	550 76.28	171 23.72	721 100.00

χ²自乗値 = 17.803 P<0.001

【問26】あなたはこれまでに外国の大学や研究所などに留学された経験がありますか。

1. ある => 最初に留学したのは () 歳の時である 2. ない

↓

◇留学経験のある方は、留学時の身分・資格としてあてはまる番号をすべて選んでください。そして、留学先の国名・機関名とあなたが師事した研究者名を [] 内に、その身分で滞在した総期間数を () 内にご回答ください。

1. 学部学生として留学 国名 [] 機関名 []
 あなたが師事した研究者名 [] 総期間数 () 月
2. 大学院生として留学 国名 [] 機関名 []
 あなたが師事した研究者名 [] 総期間数 () 月
3. 研究者として留学 国名 [] 機関名 []
 あなたが師事した研究者名 [] 総期間数 () 月
4. その他 [] として留学
 国名 [] 機関名 []
 あなたが師事した研究者名 [] 総期間数 () 月

表 留学経験の有無

	経験有り	経験無し	計
高質高量	110 68.32	51 31.68	161
高質中量	51 60.71	33 39.29	84
中質中量	134 49.81	135 50.19	269
低質中量	21 30.00	49 70.00	70
低質低量	21 18.10	95 81.90	116
計	337 48.14	363 51.86	700

χ^2 自乗値 = 83.038 $P < 0.001$

表 最初に留学した年齢

	25歳以下	26~29歳	30~34歳	35~39歳	40歳以上	計
高質高量	16 15.69	19 18.63	22 21.57	24 23.53	21 20.59	102
高質中量	6 12.24	10 20.41	15 30.61	9 18.37	9 18.37	49
中質中量	18 14.88	16 13.22	37 30.58	25 20.66	25 20.66	121
低質中量	0 0.00	3 15.00	6 30.00	6 30.00	5 25.00	20
低質低量	7 35.00	2 10.00	4 20.00	6 30.00	1 5.00	20
計	47 15.06	50 16.03	84 26.92	70 22.44	61 19.55	312

χ^2 自乗値 = 17.258 $P < 0.369$

表 学部学生として留学経験

	経験無し	経験有り	計
高質高量	160 95.81	7 4.19	167
高質中量	87 98.86	1 1.14	88
中質中量	271 97.48	7 2.52	278
低質中量	72 100.00	0 0.00	72
低質低量	113 97.41	3 2.59	116
計	703 97.50	18 2.50	721 100.00

対自乗値 = 4.488 P<0.344

表 大学院生として留学経験

	経験無し	経験有り	計
高質高量	147 88.02	20 11.98	167
高質中量	78 88.64	10 11.36	88
中質中量	261 93.88	17 6.12	278
低質中量	71 98.61	1 1.39	72
低質低量	111 95.69	5 4.31	116
計	668 92.65	53 7.35	721 100.00

対自乗値 = 13.282 P<0.010

表 研究者としての留学経験

	経験無し	経験有り	計
高質高量	75 44.91	92 55.09	167
高質中量	44 50.00	44 50.00	88
中質中量	171 61.51	107 38.49	278
低質中量	55 76.39	17 23.61	72
低質低量	102 87.93	14 12.07	116
計	447 62.00	274 38.00	721 100.00

対自乗値 = 65.542 P<0.001

【問27】これまで在職された高等教育機関についてお尋ねします（非常勤は除いてください）。

- 1) 就職後、これまでに何回、高等教育機関を移動なさいましたか。 ==> () 回
- 2) これまでに高等教育機関に在職された年数の合計は、今年を含めて、何年になりますか。 ==> () 年
- 3) あなたが現在所属されている大学には、今年も含めて、これまでに何年勤務されていますか。 ==> () 年
- 4) もし、あなたが高等教育機関以外の場で、常勤職の専門職につかれた経験がある場合、その年数の合計は何年になりますか。 ==> () 年

表 高等教育機関の移動回数

	0回	1回	2回	3回以上	計
高質高量	86 51.50	50 29.94	15 8.98	16 9.58	167
高質中量	41 46.59	27 30.68	12 13.64	8 9.09	88
中質中量	160 57.55	62 22.30	33 11.87	23 8.27	278
低質中量	45 62.50	17 23.61	5 6.94	5 6.94	72
低質低量	86 74.14	15 12.93	10 8.62	5 4.31	116
計	418 57.98	171 23.72	75 10.40	57 7.91	721 100.00

対自乗値 = 24.861 P<0.015

【問28】現在、あなたは大学教員として次の諸活動をそれぞれどの程度重視されていますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | | | | | |
|--|--------------|------------|----|-------------|---------------|
| | 大変重視
している | 重視し
ている | 普通 | 重視して
いない | 全く重視し
ていない |
| 1. 教育（授業）活動
（授業の準備、授業、学生指導、採点、評価など） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 研究活動
（読書、執筆、実験、フィールドワークなど） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 学内の管理・運営活動
（教員会議、学内委員、事務など） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 社会サービス活動
（コンサルタント、講演、学外審議会など） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. その他の学術活動
（学会役員や出席など上記項目以外の専門的活動） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. その他（ ） | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

表 教育（授業）活動の重視度

	大変重視 している	重視して いる	普通	重視して いない	全く重視 していない	計
高質高量	40.66 66.00	42.70 42.42	14.24 55.55	2.44 2.42	0.61 0.61	165
高質中量	38.34 64.64	46.41 59.59	12.11 50.50	1.14 1.14	1.14 1.14	88
中質中量	37.105 77.77	43.122 88.88	16.46 55.55	1.80 1.80	0.00 0.00	278
低質中量	31.23 94.94	44.32 44.44	15.11 28.28	5.44 5.56	2.78 2.78	72
低質低量	23.27 89.89	44.50 44.25	27.31 43.43	3.54 3.54	0.88 0.88	113
計	255 35.61	315 43.99	123 17.18	18 2.51	5 0.70	716 100.00

対自乗値 = 26.340 P<0.049

表 研究活動の重視度

Col Pct	大変重視 している	重視して いる	普通	重視して いない	計
高質高量	132 80.00	29 17.58	2 1.21	2 1.21	165
高質中量	64 72.73	22 25.00	1 1.14	1 1.14	88
中質中量	157 57.51	91 33.33	24 8.79	1 0.37	273
低質中量	47.34 89.89	43.31 66.66	8.6 45.45	0 0.00	71
低質低量	25.29 89.89	52.59 68.68	18.21 75.75	3 2.68	112
計	416 58.67	232 32.72	54 7.62	7 0.99	709 100.00

対自乗値 = 104.808 P<0.001

表 学内の管理・運営活動の重視度

	大変重視 している	重視して いる	普通	重視して いない	全く重視 していな い	計
高質高量	17 10.24	43 25.90	75 45.18	24 14.46	7 4.22	166
高質中量	7 8.05	30 34.48	33 37.93	14 16.09	3 3.45	87
中質中量	17 6.32	71 26.39	137 50.93	38 14.13	6 2.23	269
低質中量	0 0.00	18 25.00	43 59.72	8 11.11	3 4.17	72
低質低量	5 4.46	14 12.50	64 57.14	19 16.96	10 8.93	112
計	46 6.52	176 24.93	352 49.86	103 14.59	29 4.11	706 100.00

χ^2 自乗値 = 35.518 $P < 0.003$

表 社会サービス活動の重視度

	大変重視 している	重視して いる	普通	重視して いない	全く重視 していな い	計
高質高量	16 9.70	40 24.24	72 43.64	29 17.58	8 4.85	165
高質中量	5 5.81	17 19.77	28 32.56	28 32.56	8 9.30	86
中質中量	8 2.96	65 24.07	120 44.44	54 20.00	23 8.52	270
低質中量	4 5.71	13 18.57	31 44.29	18 25.71	4 5.71	70
低質低量	1 0.93	15 13.89	44 40.74	31 28.70	17 15.74	108
計	34 4.86	150 21.46	295 42.20	160 22.89	60 8.58	699 100.00

χ^2 自乗値 = 39.010 $P < 0.001$

【問29】あなたご自身のこれまでの研究活動の成果を日本にいる同じ専門分野で同年輩の研究者と比較して、どの位置にあると思われますか。量的、質的それぞれにおいて、あてはまる番号を1つ選んでください。

- 上位 中位 下位
1. 量的にみて 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5 ——— 6 ——— 7
2. 質的にみて 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5 ——— 6 ——— 7

【問30】あなたはこれまでに学術賞を受賞されたことがありますか。

1. はい、あります 2. いいえ、ありません → 【問32】へとんでください

【5頁の表1-2を参照】

【問31】上記の質問で、「1. はい、あります」を選択された方へお尋ねします。学術賞すべてについて、その授賞年とその名称についてご回答ください。

- | 授賞年 | 受賞学術賞名 |
|------------------------------|---------|
| 1. 明・大・昭・平 []年 () | () |
| 2. 明・大・昭・平 []年 () | () |
| 3. 明・大・昭・平 []年 () | () |
| 4. 明・大・昭・平 []年 () | () |
| | |
| 10. 明・大・昭・平 []年 () | () |

表 受賞学術賞数

	0回	1回	2回	3回以上	計
高質高量	106 63.47	41 24.55	13 7.78	7 4.19	167
高質中量	69 78.41	11 12.50	7 7.95	1 1.14	88
中質中量	242 87.05	29 10.43	4 1.44	3 1.08	278
低質中量	66 91.67	6 8.33	0 0.00	0 0.00	72
低質低量	109 93.97	5 4.31	1 0.86	1 0.86	116
計	592 82.11	92 12.76	25 3.47	12 1.66	721 100.00

χ²自乗値 = 12 68.729 P<0.001

【問32】～【問34】では、あなたが所属されている学会等の専門的組織・団体への加入・参加についてお尋ねします。

【問32】あなたはいくつの学会に所属されていますか。学会のレベルごとに所属学会数を（ ）内にご回答ください。また、あなたが最も強く関与している学会はどのレベルの学会ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 地方学会（ ）つ 2. 全国学会（ ）つ 3. 国際学会（ ）つ

表 地方学会入会数

	0種類	1種類	2種類	3種類以上	計
高質高量	104 62.28	35 20.96	12 7.19	16 9.58	167
高質中量	53 60.23	24 27.27	8 9.09	3 3.41	88
中質中量	157 56.47	60 21.58	37 13.31	24 8.63	278
低質中量	35 48.61	20 27.78	11 15.28	6 8.33	72
低質低量	66 56.90	28 24.14	15 12.93	7 6.03	116
計	415 57.56	167 23.16	83 11.51	56 7.77	721 100.00

χ²自乗値 = 12.462 P<0.409

表 全国学会入会数

	2種類以下	3種類	4種類	5種類	6～7種類	8種類以上	計
高質高量	38 22.75	46 27.54	19 11.38	21 12.57	22 13.17	21 12.57	167
高質中量	26 29.55	13 14.77	23 26.14	13 14.77	6 6.82	7 7.95	88
中質中量	93 33.45	52 18.71	41 14.75	30 10.79	33 11.87	29 10.43	278
低質中量	27 37.50	15 20.83	12 16.67	9 12.50	6 8.33	3 4.17	72
低質低量	50 43.10	31 26.72	13 11.21	14 12.07	3 2.59	5 4.31	116
計	234 32.45	157 21.78	108 14.98	87 12.07	70 9.71	65 9.02	721 100.00

χ²自乗値 = 45.974 P<0.001

表 国際学会入会数

	0種類	1種類	2種類以上	計
高質高量	66 39.52	58 34.73	43 25.75	167
高質中量	42 47.73	26 29.55	20 22.73	88
中質中量	178 64.03	66 23.74	34 12.23	278
低質中量	50 69.44	14 19.44	8 11.11	72
低質低量	98 84.48	14 12.07	4 3.45	116
計	434 60.19	178 24.69	109 15.12	721 100.00

χ²自乗値 = 71.850 P<0.001

表 強く関与している学会

	地方学会	全国学会	国際学会	計
高質高量	0 0.00	41 89.13	5 10.87	46
高質中量	0 0.00	25 96.15	1 3.85	26
中質中量	6 7.06	77 90.59	2 2.35	85
低質中量	1 4.17	23 95.83	0 0.00	24
低質低量	2 5.71	32 91.43	1 2.86	35
計	9 4.17	198 91.67	9 4.17	216 100.00

χ²自乗値 = 11.835 P<0.159

【問33】あなたが入会している学会の中で、最も強く関与している学会での役職経験についてお尋ねします。あてはまる番号すべてを選択し○をつけてください。最初にその役職に就かれた年も（ ）内にご回答下さい。

1. 紀要編集委員 → 19 () 年 2. 紀要編集委員長 → 19 () 年
 3. 理事 → 19 () 年 4. 会長 → 19 () 年
 5. どの役職の経験もない ==>

表 どの役職の経験もない

	経験あり	経験なし	計
高質高量	96 57.49	71 42.51	167
高質中量	39 44.32	49 55.68	88
中質中量	79 28.42	199 71.58	278
低質中量	8 11.11	64 88.89	72
低質低量	11 9.48	105 90.52	116
計	233 32.32	488 67.68	721 100.00

χ²自乗値 = 98.545 P<0.001

【問34】昨年度（平成3年度）、あなたは日本国内あるいは海外で開催された学会や学術会議に何回参加されましたか。

- 日本国内の学会や学術会議 () 回
 海外の学会や学術会議 () 回

表 日本国内の学会や学術会議への参加回数

	1回以下	2回	3回	4回	5回	6回以上	計
高質高量	30 17.96	31 18.56	29 17.37	17 10.18	19 11.38	41 24.55	167
高質中量	11 12.50	18 20.45	14 15.91	22 25.00	6 6.82	17 19.32	88
中質中量	55 19.78	60 21.58	55 19.78	31 11.15	29 10.43	48 17.27	278
低質中量	14 19.44	18 25.00	16 22.22	11 15.28	5 6.94	8 11.11	72
低質低量	27 23.28	27 23.28	27 23.28	12 10.34	10 8.62	13 11.21	116
計	137 19.00	154 21.36	141 19.56	93 12.90	69 9.57	127 17.61	721 100.00

χ²自乗値 = 30.438 P<0.063

表 海外の学会や学術会議への参加回数

	0回	1回	2回	計
高質高量	83 49.70	43 25.75	41 24.55	167
高質中量	55 62.50	24 27.27	9 10.23	88
中質中量	204 73.38	50 17.99	24 8.63	278
低質中量	62 86.11	7 9.72	3 4.17	72
低質低量	103 88.79	10 8.62	3 2.59	116
計	507 70.32	134 18.59	80 11.10	721 100.00

χ^2 自乗値 = 76.407 P<0.001

【問35】～【問40】では、あなたが所属されている大学の最小研究単位についてお尋ねします。ここでの最小研究単位とは、人事権と予算の配分権をもち、かつ専門分野を同一とする大学自治を構成する単位のことです。以下では、便宜上、「研究室」と呼称します。

【問35】あなたの所属「研究室」には大学院課程あるいは大学院課程に相当する教育課程がありますか。次の中から1つを選んで番号に○印をつけてください。

1. 博士課程までの大学院がある
2. 修士課程までの大学院がある
3. 大学院課程はない

	博士課程 まで	修士課程 まで	大学院課 程はない	計
高質高量	117 71.34	20 12.20	27 16.46	164
高質中量	59 68.60	13 15.12	14 16.28	86
中質中量	152 56.51	47 17.47	70 26.02	269
低質中量	33 48.53	10 14.71	25 36.76	68
低質低量	69 61.61	9 8.04	34 30.36	112
計	430 61.52	99 14.16	170 24.32	699 100.00

χ^2 自乗値 = 24.583 P<0.002

【問36】あなたの所属「研究室」の教員数（専任教員のみ）は何人ですか。 ==> ()人

【問37】あなたの所属「研究室」は、教育と研究の関係からみると次のどのタイプになりますか。

1. とりわけ研究を重視する研究室
2. どちらかといえば研究を重視する研究室
3. 研究と教育をほぼ等しく重視する研究室
4. どちらかといえば教育を重視する研究室
5. とりわけ教育を重視する研究室

	とりわけ 研究を 重視する	研究を 重視する	研究を 重視する	教育を 重視する	とりわけ 教育を 重視する	計
高質高量	26.43 38	24.40 54	34.57 97	11.18 04	3.07 5	163
高質中量	16.14 87	26.22 51	49.41 40	6.05 02	1.20 1	83
中質中量	11.29 07	20.54 61	53.13 05	12.33 60	2.07 7	262
低質中量	13.09 24	26.18 47	35.24 29	20.14 59	4.03 41	68
低質低量	5.06 66	21.23 70	51.55 89	16.17 04	4.05 72	106
計	101 14.81	157 23.02	316 46.33	87 12.76	21 3.08	682 100.00

相乗値 = 16 44.905 P<0.001

【問38】あなたの「研究室」の研究活動は、日本の大学のなかで専門分野の同じ「研究室」と比べてどのような位置にありますか。量的、質的それぞれにおいて、あてはまる番号を1つ選んでください。

- 上位 中位 下位
1. 量的にみて 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7
2. 質的にみて 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7

表 「研究室」の研究活動（量的位置）

	上位	中位	下位	計
高質高量	51.84 53	38.62 04	10.17 43	163
高質中量	22.19 35	61.52 18	16.14 47	85
中質中量	12.32 03	69.185 55	18.49 42	266
低質中量	13.09 04	44.31 93	42.29 03	69
低質低量	8.09 74	48.50 54	42.44 72	103
計	153 22.30	380 55.39	153 22.30	686 100.00

相乗値 = 152.102 P<0.001

表 「研究室」の研究活動（質的位置）

	上位	中位	下位	計
高質高量	59.97 51	31.52 90	8.14 59	163
高質中量	54.46 12	38.33 82	7.06 6	85
中質中量	15.42 91	70.185 08	14.37 02	264
低質中量	11.08 76	61.42 76	26.18 47	68
低質低量	8.09 74	47.49 57	43.45 69	103
計	202 29.58	361 52.86	120 17.57	683 100.00

相乗値 = 196.652 P<0.001

【問39】あなたの所属「研究室」の研究活動を活発にするには次の事項はどの程度重要であると思われるか。あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | 大変重要である | 少し重要である | どちらともいえない | あまり重要でない | 全く重要でない | 該当しない |
|-------------------------|-------------------|---------|-----------|----------|---------|-------|
| 1. 教官の研究活動に対する情熱 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 2. 優秀な大学院生の存在 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 3. 研究の支えとなる若手研究者の存在 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 4. 世界の学界をリードする研究者との接触機会 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 5. 専任教員の豊富な研究資金 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 6. 先端の研究設備・施設の整備 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 7. 新規の研究プロジェクトの企画 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |
| 8. 大学の自治と学問の自由の保証 | 1 — 2 — 3 — 4 — 5 | 6 | | | | |

9. 所属大学・学科の研究志向の風土 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
10. 企業との共同研究体制 …… 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
11. 研究活動以外の仕事（教育、管理 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
運営・社会サービス等）が少ないこと
12. 研究者の給与等の生活待遇 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
13. その他（ ） …… 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6

【=>以下では、有意な関連性のある事項の結果のみ掲載】

表 研究活動に対する情熱

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	重要でない	計
高質高量	144 89.44	13 8.07	3 1.86	1 0.62	161
高質中量	78 92.88	4 4.76	1 1.19	1 1.19	84
中質中量	215 83.66	36 14.01	6 2.33	0 0.00	257
低質中量	55 79.71	11 15.94	2 2.90	1 1.45	69
低質低量	74 72.55	18 17.65	7 6.86	3 2.94	102
計	566 84.10	82 12.18	19 2.82	6 0.89	673 100.00

対自乗値 = 28.111 P<0.005

表 優秀な大学院生の存在

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	重要でない	計
高質高量	92 64.34	34 23.78	13 9.09	4 2.80	143
高質中量	46 59.74	21 27.27	8 10.39	2 2.60	77
中質中量	104 49.76	73 34.93	26 12.44	6 2.87	209
低質中量	20 37.74	23 43.40	7 13.21	3 5.66	53
低質低量	30 36.59	30 36.59	14 17.07	8 9.76	82
計	292 51.77	181 32.09	68 12.06	23 4.08	564 100.00

対自乗値 = 29.486 P<0.003

【問40】あなたが所属する「研究室」では、以下に示した「研究室」の研究活動にとって重要だと思われる事項は 現在どのような状態ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | 大変良
好であ
る | 少し良
好であ
る | どちら
ともい
えない | あまり
良好で
ない | 全く良
好でな
い | 該当し
ない |
|--------------------------------|-----------------|-----------------|-------------------|------------------|-----------------|-----------|
| 1. 教官の研究活動に対する情熱 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 2. 優秀な大学院生の存在 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 3. 研究の支えとなる若手研究者
の存在 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 4. 世界の学界をリードする研究
者との接触機会 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 5. 専任教員の豊富な研究資金 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 6. 先端の研究設備・施設の整備 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7. 新規の研究プロジェクトの企画 …… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |

8. 大学の自治と学問の自由の保証 …… 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
9. 所属大学・学科の研究志向の風土 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
10. 企業との共同研究体制 …… 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
11. 研究活動以外の仕事（教育、管理 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
運営・社会サービス等）が少ないこと
12. 研究者の給与等の生活待遇 … 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6
13. その他（ ） …… 1 — 2 — 3 — 4 — 5 6

【問41】～【問48】では、教育活動についてお尋ねします。あなたが担当されている授業科目や指導されている学生などについてお答えください。

【問41】今後、あなたの専門分野において、研究者を養成する場合、どのようなルートで養成するのが望ましいと思われますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 日本の大学の修士課程と博士課程 2. 日本の大学での修士課程と外国の大学での博士課程
3. 外国の大学の修士課程と博士課程 4. 学部卒業後、官庁や企業等の研究所で養成する
5. 大学の修士課程と官庁や企業等の研究所で養成する
6. 官庁や企業等に就職後、何年か後に大学院課程に戻って養成する
7. その他（ ）

【問42】あなたは、現在、所属大学において、どの段階の教育を担当されておられますか。あてはまる番号すべてを選択してください。

1. 学部教育 2. 大学院修士課程の教育
3. 大学院博士課程の教育 4. 授業科目を持っていない => 【問44】へとんでください

【問43】あなたご自身、主として、どのレベル（学部学生、修士課程学生、博士課程学生）のゼミ生（学位論文指導学生）の教育に関心がありますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. どのレベルの学生の指導も同様に関心がある
2. 学部課程の学生の指導に最も関心がある
3. 修士課程の学生の指導に最も関心がある
4. 博士課程の学生の指導に最も関心がある
5. どのレベルの学生の指導にも関心がない

【問44】これまでに大学院生を指導なさった経験がありますか。

1. あります 2. ありません => 【問48】にとんでください

	あります	ありませ ん	計
高質高量	143 86.14	23 13.86	166
高質中量	70 82.35	15 17.65	85
中質中量	185 67.52	89 32.48	274
中質低量	37 52.86	33 47.14	70
低質低量	34 30.36	78 69.64	112
計	469 66.34	238 33.66	707 100.00

材自乗値 = 109.723 P<0.001

【問45】 これまでに指導された大学院生の中で、現在、研究者になっている学生がいますか。

1. います 2. いません => 【問48】にとんでください

	います	いません	計
高質高量	113 81.29	26 18.71	139
高質中量	49 74.24	17 25.76	66
中質中量	124 70.06	53 29.94	177
中質低量	28 75.68	9 24.32	37
低質低量	18 52.94	16 47.06	34
計	332 73.29	121 26.71	453 100.00

χ^2 自乗値 = 12.825 $P < 0.012$

【問46】 あなたが指導された女子院生の中で、研究者になった学生はいますか。

1. います 2. いません

	います	いません	計
高質高量	43 41.35	61 58.65	104
高質中量	15 34.09	29 65.91	44
中質中量	47 42.73	63 57.27	110
中質低量	9 39.13	14 60.87	23
低質低量	4 25.00	12 75.00	16
計	118 39.73	179 60.27	297 100.00

χ^2 自乗値 = 2.564 $P < 0.633$

【問47】 これまでにあなたが大学院生を指導された経験から、研究者として大成するためには、次の事項はどの程度重要であると思われますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	あまり重要でない	全く重要でない	該当しない
1. 学生の才能 1 2 3 4 5	6
2. 学生のパーソナリティ 1 2 3 4 5	6
3. 学生の研究に対する情熱（気概）	... 1 2 3 4 5	6
4. 学生の性別 1 2 3 4 5	6
5. 学生の育った家庭環境 1 2 3 4 5	6
6. 学生の宗教・信条 1 2 3 4 5	6
7. 学生への奨学金 1 2 3 4 5	6
8. 学生の受けた初等・中等教育 1 2 3 4 5	6
9. 学生の受けた学部教育 1 2 3 4 5	6
10. 学生の受ける大学院教育 1 2 3 4 5	6
11. 学生の指導教授（あなた自身） 1 2 3 4 5	6

12. 留学経験 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
13. 世界の学界をリードする研究者の下で研究を行なった経験	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
14. 研究情報データベースへの接近	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
15. 所属大学・学科の風土 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
16. 所属大学・学科の研究施設・設備	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
17. 学生への研究費	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
18. 他の教員とのコミュニケーション網	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
19. 独創性を求める科学の規範 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
20. 科学の先取権競争 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
21. 研究活動以外の活動（アルバイト、子供の世話等）を少なくすること	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
22. その他（ ）	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6

【⇒以下では、有意な関連性のある事項の結果のみ掲載】

表 学生の才能

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	重要でない	計
高質高量	72 64.86	35 31.53	4 3.60	0 0.00	111
高質中量	31 64.58	16 33.33	1 2.08	0 0.00	48
中質中量	69 56.56	50 40.98	2 1.64	1 0.82	122
中質低量	13 46.43	9 32.14	5 17.86	1 3.57	28
低質低量	6 35.29	9 52.94	2 11.76	0 0.00	17
計	191 58.59	119 36.50	14 4.29	2 0.61	326 100.00

M自乗値 = 28.399 P<0.005

【問48】 これまでにあなたが一人前の研究者として成長する上で、次の各事項はどの程度重要であったと思われるか。あてはまる番号を1つ選んでください。

	大変重要であった	少し重要であった	どちらともいえない	あまり重要でなかった	全く重要でなかった	該当しない
1. 自分の才能 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
2. 自分のパーソナリティ 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
3. 研究に対する情熱（気概）	... 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
4. 自分の性別 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
5. 自分の育った家族の環境 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
6. 自分の配偶者の協力 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
7. 自分の宗教・信条 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
8. 自分の基本給与 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
9. 自分の受けた初等・中等教育 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
10. 自分の受けた学部教育 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
11. 自分の受けた大学院教育 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
12. 自分の指導教授 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6
13. 留学経験 1	—— 2	—— 3	—— 4	—— 5	6

14. 世界の学界をリードする研究者 の下で研究を行った経験	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
15. 研究情報データベースへの接近	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
16. 所属大学・学科の風土や知的雰囲気	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
17. 所属大学・学科の研究施設・設備	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
18. 自分の研究費	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
19. 研究の支えとなる若手研究者の存在	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
20. 他の教員とのコミュニケーション網	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
21. 独創性を求める科学の規範	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
22. 科学の先取権競争	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
23. 研究活動以外の仕事（教育、管理運 社会サービス等）を少なくすること	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6
24. その他（	… 1	— 2	— 3	— 4	— 5	6

【⇒以下では、有意な関連性のある事項の結果のみ掲載】

表 自分の才能

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな	重要でな かった	計
高質高量	76 47.20	68 42.24	17 10.56	0 0.00	161
高質中量	45 51.72	36 41.38	4 4.60	2 2.30	87
中質中量	79 29.70	125 46.99	51 19.17	11 4.14	266
中質低量	16 23.19	32 46.38	16 23.19	5 7.25	69
低質低量	19 17.92	41 38.68	37 34.91	9 8.49	106
計	235 34.11	302 43.83	125 18.14	27 3.92	689 100.00

対自乗値 = 75.614 P<0.001

表 自分のパーソナリティ

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな	重要でな かった	計
高質高量	72 45.57	63 39.87	20 12.66	3 1.90	158
高質中量	41 47.13	33 37.93	12 13.79	1 1.15	87
中質中量	86 32.09	136 50.75	41 15.30	5 1.87	268
中質低量	24 33.80	28 39.44	16 22.54	3 4.23	71
低質低量	26 24.53	57 53.77	21 19.81	2 1.89	106
計	249 36.09	317 45.94	110 15.94	14 2.03	690 100.00

対自乗値 = 24.387 P<0.018

表 研究に対する情熱 (気概)

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	136 83.95	26 16.05	0 0.00	0 0.00	162
高質中量	72 82.76	13 14.94	1 1.15	1 1.15	87
中質中量	198 73.06	59 21.77	13 4.80	1 0.37	271
中質低量	50 71.43	17 24.29	3 4.29	0 0.00	70
低質低量	61 57.55	36 33.96	9 8.49	0 0.00	106
計	517 74.28	151 21.70	26 3.74	2 0.29	696 100.00

対自乗値 = 36.969 P<0.001

表 自分の指導教授 (あなた自身)

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	85 53.80	44 27.85	18 11.39	11 6.96	158
高質中量	48 56.47	22 25.88	2 2.35	13 15.29	85
中質中量	140 52.63	75 28.20	32 12.03	19 7.14	266
中質低量	41 59.42	16 23.19	5 7.25	7 10.14	69
低質低量	41 39.05	46 43.81	13 12.38	5 4.76	105
計	355 51.98	203 29.72	70 10.25	55 8.05	683 100.00

対自乗値 = 28.482 P<0.005

表 世界的研究者の下で研究を行なった経験

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	62 48.44	40 31.25	16 12.50	10 7.81	128
高質中量	37 62.71	13 22.03	7 11.86	2 3.39	59
中質中量	70 44.87	49 31.41	32 20.51	5 3.21	156
中質低量	11 40.74	12 44.44	3 11.11	1 3.70	27
低質低量	5 19.23	11 42.31	9 34.62	1 3.85	26
計	185 46.72	125 31.57	67 16.92	19 4.80	396 100.00

対自乗値 = 24.429 P<0.018

表 自分への研究費

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	51 32.08	61 38.36	28 17.61	19 11.95	159
高質中量	28 32.56	34 39.53	12 13.95	12 13.95	86
中質中量	53 20.15	116 44.11	63 23.95	31 11.79	263
中質低量	12 17.39	30 43.48	18 26.09	9 13.04	69
低質低量	13 14.29	37 40.66	26 28.57	15 16.48	91
計	157 23.50	278 41.62	147 22.01	86 12.87	668 100.00

χ²自乗値 = 22.613 P<0.031

表 研究の支えとなる若手研究者の存在

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	37 25.34	57 39.04	26 17.81	26 17.81	146
高質中量	9 12.68	31 43.66	12 16.90	19 26.76	71
中質中量	49 22.48	87 39.91	63 28.90	19 8.72	218
中質低量	12 26.67	15 33.33	12 26.67	6 13.33	45
低質低量	8 10.96	26 35.62	26 35.62	13 17.81	73
計	115 20.80	216 39.06	139 25.14	83 15.01	553 100.00

χ²自乗値 = 32.173 P<0.001

表 独創性を求める科学の規範

	大変重要 であった	少し重要 であった	どちらと もいえな い	重要でな かった	計
高質高量	67 43.51	46 29.87	32 20.78	9 5.84	154
高質中量	30 40.00	25 33.33	14 18.67	6 8.00	75
中質中量	57 23.36	89 36.48	87 35.66	11 4.51	244
中質低量	15 24.19	23 37.10	20 32.26	4 6.45	62
低質低量	12 13.48	36 40.45	39 43.82	2 2.25	89
計	181 29.01	219 35.10	192 30.77	32 5.13	624 100.00

χ²自乗値 = 45.678 P<0.001

表 科学の先取権競争

	大変重要であった	少し重要であった	どちらともいえない	重要でなかった	計
高質高量	24 17.02	40 28.37	48 34.04	29 20.57	141
高質中量	11 14.67	23 30.67	23 30.67	18 24.00	75
中質中量	17 7.73	56 25.45	104 47.27	43 19.55	220
中質低量	2 3.64	8 14.55	35 63.64	10 18.18	55
低質低量	4 5.26	10 13.16	45 59.21	17 22.37	76
計	58 10.23	137 24.16	255 44.97	117 20.63	567 100.00

相乗値 = 37.643 P<0.001

【問49】あなたが研究者として成長する上で、これまでに障害となったことがありましたら教えてください。また、その障害をどのようにして克服なさいましたか。

以下の【問50】～【問54】では、あなたが科学的社会化される上での「重要な他者」*についてお尋ねします。

(*科学的社会化される上での「重要な他者」とは、研究者としての(基礎的な)能力や心構えなど研究活動に必要な資質の形成や就職・移動の世話など研究活動を促進する上であなたに特に影響を与えた人物のことです。本研究では、あなたが「直接指導を受けた人物」だけではなく、伝記や著書や諸メディアを通じて「間接的に出会った人物」も含めて考えて下さい。)

【問50】あなたは、下記の学歴・職歴上の各時期において、それぞれ何人の「重要な他者」に出会われましたか(時期を越えて影響を受けている場合には、初めて出会われた時期のみに計上してください)。以下の各時期ごとに()内には直接指導を受けた人数を、[]内には間接的に出会った人数をご回答ください。

	直接	間接		直接	間接
1. 小学校時代	()人	[]人	6. 就職直後	()人	[]人
2. 中学校時代	()人	[]人	7. 30歳代	()人	[]人
3. 高等学校時代	()人	[]人	8. 40歳代	()人	[]人
4. 大学学部時代	()人	[]人	9. 50歳代	()人	[]人
5. 大学院時代	()人	[]人	10. 60歳代	()人	[]人

【問51】上記の「重要な他者」のうち、あなたにとって特に重要な人物5名(以内)の名前を()内にご回答ください。また、その方が現役で活躍なさっておられる場合は、[]内に現在の在籍機関をご回答ください。その人物と出会った時期を、前頁の【問50】の番号(例. 1. 小学校時代~10. 60歳代)に従って()内にご回答ください。さらに、その人物とあなたとの関係(例. 大学院時代の指導教官、留学時代のルームメイトなど)と、どのような意味であなたにとって特に重要であったのかを[]内にご回答ください。

	「重要な研究者」	在籍機関	出会った時期
1.	()	[]	[] ()
	[]		
2.	()	[]	[] ()
	[]		

3. () [] ()
 []
4. () [] ()
 []
5. () [] ()
 []

【問52】あなたの研究生生活をふり返って、あなたが研究者として社会化される上で、以下に示す各時期での家庭、学校、社会における出会いや体験は、どの程度重要だったと思われますか。あてはまる番号を1つ選んでください。（* 社会化とは、研究者としての（基礎的な）能力や行動様式・心構えなど研究活動に影響を与える資質を身につけること）

	大変重要 だった	重要だ った	どちらとも 言えない	重要でな かった	全く重要で なかった	該当し ない
1. 小学校入学まで 1 2 3 4 5	6
2. 小学校時代 1 2 3 4 5	6
3. 中学校時代 1 2 3 4 5	6
4. 高等学校時代 1 2 3 4 5	6
5. 大学学部時代 1 2 3 4 5	6
6. 大学院時代 1 2 3 4 5	6
7. 初職当時 1 2 3 4 5	6
8. 30歳代 1 2 3 4 5	6
9. 40歳代 1 2 3 4 5	6
10. 50歳代 1 2 3 4 5	6
11. 60歳代 1 2 3 4 5	6

【=>以下では、有意な関連性のある事項の結果のみ掲載】

表 小学校入学まで

	大変重要 だった	重要だ った	どちらと も言えな い	重要でな かった	計
高質高量	15 10.79	12 8.63	65 46.76	47 33.81	139
高質中量	3 4.35	13 18.84	29 42.03	24 34.78	69
中質中量	15 6.70	28 12.50	122 54.46	59 26.34	224
中質低量	4 6.25	7 10.94	34 53.13	19 29.69	64
低質低量	3 3.37	7 7.87	37 41.57	42 47.19	89
計	40 6.84	67 11.45	287 49.06	191 32.65	585 100.00

対自乗値 = 23.122

P<0.027

表 初職当時

	大変重要 だった	重要だっ た	どちらと も言えな い	重要でな かった	計
高質高量	75 56.82	41 31.06	12 9.09	4 3.03	132
高質中量	32 43.24	25 33.78	11 14.86	6 8.11	74
中質中量	105 44.12	77 32.35	47 19.75	9 3.78	238
中質低量	18 28.12	24 37.50	19 29.69	3 4.69	64
低質低量	43 46.24	32 34.41	15 16.13	3 3.23	93
計	273 45.42	199 33.11	104 17.30	25 4.16	601 100.00

χ²自乗値 = 24.273 P<0.019

表 30歳代

	大変重要 だった	重要だっ た	どちらと も言えな い	重要でな かった	計
高質高量	85 64.89	29 22.14	15 11.45	2 1.53	131
高質中量	44 58.67	21 28.00	7 9.33	3 4.00	75
中質中量	116 50.66	84 36.68	25 10.92	4 1.75	229
中質低量	20 35.71	21 37.50	12 21.43	3 5.36	56
低質低量	27 39.13	27 39.13	12 17.39	3 4.35	69
計	292 52.14	182 32.50	71 12.68	15 2.68	560 100.00

χ²自乗値 = 27.386 P<0.007

表 40歳代

	大変重要 だった	重要だっ た	どちらと も言えな い	重要でな かった	計
高質高量	50 47.62	38 36.19	14 13.33	3 2.86	105
高質中量	33 60.00	10 18.18	9 16.36	3 5.45	55
中質中量	59 35.98	75 45.73	29 17.68	1 0.61	164
中質低量	12 33.33	10 27.78	14 38.89	0 0.00	36
低質低量	13 33.33	10 25.64	15 38.46	1 2.56	39
計	167 41.85	143 35.84	81 20.30	8 2.01	399 100.00

χ²自乗値 = 40.834 P<0.001

表 50歳代

	大変重要 だった	重要だっ た	どちらと も言えな い	重要でな かった	計
高質高量	24 36.92	22 33.85	13 20.00	6 9.23	65
高質中量	12 37.50	8 25.00	10 31.25	2 6.25	32
中質中量	20 22.47	38 42.70	29 32.58	2 2.25	89
中質低量	4 19.05	6 28.57	9 42.86	2 9.52	21
低質低量	4 30.77	1 7.69	8 61.54	0 0.00	13
計	64 29.09	75 34.09	69 31.36	12 5.45	220 100.00

対自乗値 = 21.924 P<0.038

【問53】【問52】で「たいへん重要だった」か「重要だった」を選択した時期の家庭、学校、社会での出会いや体験について教えて下さい。

- ① 小学校入学まで (例. 家のまわりの自然環境との接触が、自分を生物好きにした)
- ② 小学校時代 (例. 算数の先生との出会いが、現在の数学者としての資質形成に影響した)
- ③ 中学校時代
- ④ 高等学校時代 (例. 父親が、進路選択に際して適切な指導をしてくれた)
- ⑤ 大学学部時代 (例. 卒論の指導教官のおかげで、大学院進学を決意できた)
- ⑥ 大学院時代 (例. 論文指導教官の後ろ姿から、研究者としての基本的な態度を身につけた)
- ⑦ 初職当時 (例. 最初の職場の同僚教師との研究会から重要なヒントを得ることができた)
- ⑧ 30歳代
- ⑨ 40歳代
- ⑩ 50歳代
- ⑪ 60歳代

【問54】あなたご自身の体験やあなたが学生を指導した経験などから、現在の日本の大学における研究者養成についてご意見をお聞かせいただければ幸いです。

御多忙のところ長時間にわたり御回答まことにありがとうございます。

同封の返信用封筒によって平成4年8月31日(月)までにご投函いただければまことに幸甚に存じます。

御回答は無記名でお願いしておりますが、本調査結果の概要を入手御希望の場合は御氏名を明記してくだされば、調査がまとまった時点(平成5年3月頃)でお送り申し上げます。

結果はすべて統計的にまとめますので、ご回答いただきました先生方に個人的にご迷惑をおかけすることのないよう細心の注意を払わせていただきます。

御氏名 ()

重ねて御協力にあつく御礼申し上げます。

【付表2】

「重要な研究者」の形成に関する基礎調査

琉球大学 法文学部
「重要な研究者」の形成に関する研究会
研究代表者 助教授 大膳 司

—ご協力のおねがい—

本調査は、21世紀学術文化財団より研究奨励金を受けた『「重要な研究者」の形成に関する科学社会学的研究』の一環として行われる質問紙調査です。

本質問紙調査は、わが国の大学人が研究活動を促進する上で重要な影響を受けた人物（本研究では「重要な研究者」と呼ぶ）の形成過程を明らかにすることによって、大学における研究者養成の改善のための課題や方策を明らかにすることをねらいとしております。

昨年8月、わが国の国・公・私立大学に勤める大学人に対して実施した「大学人の科学的社会化に関する基礎調査」において、「重要な研究者」を5名ずつ回答してもらったところ、貴殿が指名されました。

ご多忙中のところまことに恐縮に存じますが、なにとぞ宜しくご協力くださいますようお願い申し上げます。

結果の公表によって、皆様にご迷惑をおかけすることのないよう、細心の配慮をする所存でございます。どうか率直なご意見をお寄せ下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご協力いただきました皆様には、後日、調査結果の概要を送らせていただきます。

ご記入上の注意

1. 各設問にある選択肢の中から、該当する事項を選んで、その番号を○印で囲んでください。
2. ご意見を記入されるときは、() や [] 内にあてはまる値や事柄をご記入ください。
3. その他、ご意見がある場合には、余白の部分にご自由にお書きください。
4. 答えにくい質問もあるとは思いますが、その部分のご回答は保留していただいて結構ですので、最後までご回答ください。
5. 複数の学校に勤務されている場合は、この質問紙を受け取られた大学についてお答えください。
6. 結果はすべて統計的にまとめますので、お答えいただいた先生方に個人的にご迷惑をかけることは一切ございません。
7. ご回答いただいた調査票は、同封の返信用封筒に入れ、平成5年4月4日(日)までにご投函ください。
8. 調査についてのお問い合わせは下記にお願いします。

〒903-01 沖縄県中頭郡西原町千原1番地
琉球大学 法文学部内
「重要な研究者」の形成に関する研究会
電話 (098) 895-2221 (内線 2351) 大膳 司

質問をよくお読みいただき、ご回答ください。ご回答は選択肢の番号を○印で囲んでください。また、()内は数値で、[]内や[]内は文字でご回答ください。なお、下記の各設問に関連した資料をお持ちでしたら、その写しを同封いただければ幸いです。

【問1】～【問6】では、あなたご自身のことについてお尋ねします。

【問1】あなたの性別
 1. 男 357 (95.7%)
 2. 女 16 (4.3%)

【問2】あなたの誕生年 明・大・昭 ()年 ()月
 30才代 6 (1.6%) 60才代 166 (44.6%)
 40才代 40 (10.8%) 70才代 32 (8.6%)
 50才代 125 (33.6%) 80才代 3 (0.8%)
 注) 1993年現在での年齢を計算

【問3】あなたの出身地 ()都・道・府・県
 北海道 25 (6.7%) 東北地方 25 (6.7%) 関東地方 101 (27.2%)
 中部地方 62 (16.7%) 近畿地方 74 (19.9%) 中国地方 26 (7.0%)
 四国地方 15 (4.0%) 九州地方 39 (10.5%) 外国 5 (1.3%)

【問4】あなたの所属大学についてお尋ねします。

所属大学・学部の名称 []大学 []学部・[]学科
 研究所等

所属大学の設置者 1. 国立 180 (48.4%)
 2. 公立 28 (7.5%)
 3. 私立 164 (44.1%)

【問5】あなたが所属されている学科(学科相当も含む)は、つぎのいずれの分野に該当しますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 人文科学系(文学・史学・哲学など) 42 (11.4%)
 2. 社会科学系(法学・政治学・経済学・心理学など) 59 (16.0%)
 3. 理学系(数学・物理学・化学・生物学・地学など) 48 (13.0%)
 4. 工学系(機械工学・電気工学・応用化学など) 54 (14.6%)
 5. 農学系(農学・農業工学・水産学・畜産学など) 20 (5.4%)
 6. 医歯学系(医学・歯学・薬学など) 97 (26.3%)
 7. 保健学系(看護学・保健学など) 5 (1.4%)
 8. 家政学系(家政学・食物学・被服学・住居学など) 11 (3.0%)
 9. 教員養成系(小学校課程・中学校課程など) 10 (2.7%)
 10. 芸術学系(美術・デザイン・音楽など) 7 (1.9%)
 11. 体育学系(体育など) 5 (1.4%)
 12. 一般教養学系(教養学・総合科学など) 10 (2.7%)
 13. その他() 1 (0.3%)

【問6】あなたの現在の職階は何ですか。あてはまる番号をすべて選んでください。

1. 学長 2. 学部長 3. 研究所長 4. 教授 5. 助教授 6. その他()
 19 (5.1%) 15 (4.0%) 13 (3.5%) 295 (79.3%) 25 (6.7%) 5 (1.4%)

【問7】～【問11】では、あなたの生育家庭環境についてお尋ねします。

【問7】あなたのご両親の最終学歴をお尋ねします。あてはまる番号を1つ選んでください。

(1) あなたの父親	(2) あなたの母親
1. 小学校卒業程度 41 (11.0%)	1. 小学校卒業程度 47 (12.7%)
2. 中学校卒業程度 (旧制高等小学校卒) 59 (15.9%)	2. 中学校卒業程度 (旧制高等小学校卒) 70 (18.9%)
3. 高等学校卒業程度 (旧制中・女学校卒) 48 (12.9%)	3. 高等学校卒業程度 (旧制中・女学校卒) 183 (49.3%)
4. 短期大学卒業程度 (旧制高等専門学校卒) 77 (20.7%)	4. 短期大学卒業程度 (旧制高等専門学校卒) 53 (14.3%)
5. 大学・大学院卒業程度 147 (39.5%)	5. 大学・大学院卒業程度 18 (4.9%)

【問8】あなたの生育家庭の経済状況は、学友の平均的家計状況と比較してどうでしたか。学校段階別に、あてはまる番号を1つ選んでください。

(1) 小学校時代	1. 平均以上に裕福であった 121 (32.7%)	2. 平均的であった 194 (52.4%)	3. 貧しかった 55 (14.9%)
(2) 中学校時代	1. 平均以上に裕福であった 85 (23.0%)	2. 平均的であった 218 (58.9%)	3. 貧しかった 67 (18.1%)
(3) 高等学校時代	1. 平均以上に裕福であった 61 (16.6%)	2. 平均的であった 237 (64.4%)	3. 貧しかった 70 (19.0%)
(4) 大学・大学院時代	1. 平均以上に裕福であった 55 (15.1%)	2. 平均的であった 232 (63.7%)	3. 貧しかった 77 (21.2%)

【問9】あなた自身のご家族に研究者 (大学の教員や企業の研究所の研究員等) がおられますか。あてはまる番号をすべて選んでください。

1. 私の祖父は研究者である	はい	12 (3.2%)	いいえ	361 (96.8%)
2. 私の祖母は研究者である	はい	1 (0.3%)	いいえ	372 (99.7%)
3. 私の父親は研究者である	はい	56 (15.0%)	いいえ	317 (85.0%)
4. 私の母親は研究者である	はい	0 (0.0%)	いいえ	373 (100.0%)
5. 私のきょうだいに研究者がいる	はい	80 (21.4%)	いいえ	293 (78.6%)
6. まったくない	はい	202 (54.2%)	いいえ	171 (45.8%)
7. その他: 私の () が研究者である	はい	83 (22.3%)	いいえ	290 (77.7%)

【問10】あなたには、兄弟姉妹はそれぞれ何人おられましたか。該当する数字を () 内にご回答下さい。

兄 () 人、弟 () 人、姉 () 人、妹 () 人

【省略】

【問11】上記のきょうだい中、何人が大学に進学し、そのうち何人が研究者（大学の教員や企業の研究所の研究者等）になりましたか。あなたご自身を含めて、該当する数字を（ ）内にご回答下さい。

男きょうだいの内、（ ）人が大学に進学し、そのうち（ ）人が研究者になった。

女きょうだいの内、（ ）人が大学に進学し、そのうち（ ）人が研究者になった。

【省略】

【問12】～【問13】では、あなたのご家庭についてお尋ねします。

【問12】あなたの配偶者も研究者ですか。

1. はい 2. いいえ 3. 結婚していない => 【問14】にとんでください

40 (10.7%) 323 (86.6%) 10 (2.7%)

【問13】あなたの配偶者のご家族に研究者はおられますか。あてはまる番号をすべて選んでください。

- | | | | | |
|-----------------------|----|-------------|-----|--------------|
| 1. 配偶者の祖父が研究者である | はい | 15 (4.1%) | いいえ | 348 (95.9%) |
| 2. 配偶者の祖母が研究者である | はい | 0 (0.0%) | いいえ | 363 (100.0%) |
| 3. 配偶者の父親が研究者である | はい | 55 (15.2%) | いいえ | 308 (84.8%) |
| 4. 配偶者の母親が研究者である | はい | 0 (0.0%) | いいえ | 363 (100.0%) |
| 5. 配偶者の兄弟（姉妹）に研究者がいる | はい | 69 (19.0%) | いいえ | 294 (81.0%) |
| 6. まったくない | はい | 225 (62.0%) | いいえ | 138 (38.0%) |
| 7. その他：配偶者の（ ）が研究者である | はい | 29 (8.0%) | いいえ | 334 (92.0%) |

【問14】～【問26】では、あなたの学歴・職歴についてお尋ねします。

【問14】現在の専門分野において研究者となることを意識し始めたのはいつ頃ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。また、それは何年生の頃でしたか、（ ）内にご回答下さい。

- | | | | | |
|---------------|-------------|----|----------|-----------|
| 1. 小学校（ ）年生の頃 | 24 (6.6%) | => | その他 | 18 (4.9%) |
| 2. 中学校（ ）年生の頃 | 20 (5.5%) | | 大学卒業後 | 17 (4.6%) |
| 3. 高校（ ）年生の頃 | 48 (13.1%) | | 就職後 | 9 (2.5%) |
| 4. 大学（ ）年生の頃 | 149 (40.7%) | | 大学に残ってから | 6 (1.6%) |
| 5. 大学院修士課程の頃 | 47 (12.8%) | | 研究生中 | 1 (0.3%) |
| 6. 大学院博士課程の頃 | 27 (7.4%) | | | |
| 7. その他
（ ） | 51 (13.9%) | | | |

【問15】あなたが、現在の専門分野において研究者になることを意識し始める契機がありましたら、ご回答下さい。

【省略】

【問16】あなたの学歴を教えてください。

- 明・大・昭・平（ ）年 [] 大学 [] 学部 卒業
- 明・大・昭・平（ ）年 [] 大学大学院 [] 研究科修士課程 修了
- 明・大・昭・平（ ）年 [] 大学大学院 [] 研究科博士課程 修了

【問17】あなたの職歴（最初にその職に就いた年）をご回答ください。

- 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部・ 助手
 研究所等
- 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部・ 講師
 研究所等
- 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部・ 助教授
 研究所等
- 明・大・昭・平 ()年 [] 大学 [] 学部・ 教授

【問18】あなたは、これまでに、高等教育機関において、以下の役職を経験なさったことがありますか。あてはまる番号をすべて選んでください。

- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 学長 | 2. 理事長 | 3. 学生部長 | 4. 図書館長 |
| はい 22 (5.9%) | はい 3 (0.8%) | はい 23 (6.2%) | はい 29 (7.8%) |
| いいえ 350 (94.1%) | いいえ 370 (99.2%) | いいえ 350 (93.8%) | いいえ 344 (92.2%) |
-
- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 5. 学部長 | 6. 研究所長 | 7. 評議員 | 8. 理事 |
| はい 66 (17.7%) | はい 46 (12.3%) | はい 130 (34.9%) | はい 25 (6.7%) |
| いいえ 307 (82.3%) | いいえ 327 (87.7%) | いいえ 243 (65.1%) | いいえ 348 (93.3%) |
-
9. どの役職の経験もない
- はい 180 (48.3%)
- いいえ 193 (51.7%)

【問19】あなたが取得された最高学位についてお尋ねします。あてはまる番号を1つ選んでください。

- 1) あなたが取得された最高学位は何ですか。
1. 学士 2. 修士 3. 博士 4. その他 ()
- 17 (4.7%) 45 (12.4%) 300 (82.6%) 1 (0.3%)
- 2) いつ取得されましたか。 明・大・昭・平 ()年 取得
- | | | | | | |
|------|-------------|------|-------------|------|------------|
| 20才代 | 114 (32.4%) | 30才代 | 190 (54.0%) | 40才代 | 36 (10.2%) |
| 50才代 | 9 (2.6%) | 60才代 | 3 (0.9%) | | |
- 3) どの国で取得されましたか。
1. 日本 2. アメリカ合衆国 3. ドイツ 4. イギリス 5. フランス 6. その他 ()
- 349 (96.1%) 10 (2.8%) 2 (0.6%) 2 (0.6%)

【問20】あなたが最高学位をとられた専門分野は何ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| 1. 人文科学系 (文学・史学・哲学など) | 46 (12.7%) |
| 2. 社会科学系 (法学・政治学・経済学・心理学など) | 52 (14.3%) |
| 3. 理学系 (数学・物理学・化学・生物学・地学など) | 62 (17.1%) |
| 4. 工学系 (機械工学・電気工学・応用化学など) | 52 (14.3%) |
| 5. 農学系 (農学・農業工学・水産学・畜産学など) | 30 (8.3%) |
| 6. 医歯学系 (医学・歯学・薬学など) | 109 (30.0%) |
| 7. 保健学系 (看護学・保健学など) | 1 (0.3%) |
| 8. 家政学系 (家政学・食物学・被服学・住居学など) | 1 (0.3%) |
| 9. 教員養成系 (小学校課程・中学校課程など) | 1 (0.3%) |
| 10. 芸術学系 (美術・デザイン・音楽など) | 3 (0.8%) |
| 11. 体育学系 (体育など) | 5 (1.4%) |
| 12. 一般教養学系 (教養学・総合科学など) | 0 (0.0%) |
| 13. その他 () | 1 (0.3%) |

【問21】あなたはこれまでに外国の大学や研究所などに留学された経験がありますか。

1. ある => 最初に留学したのは () 歳の時である	2. ない => 【問23】に
259 (70.4%)	109 (29.6%)
↓	
20才代 47 (18.4%)	30才代 145 (56.9%)
40才代 49 (19.2%)	50才代 14 (5.5%)

【問22】留学経験のある方にお尋ねします。留学時の身分・資格としてあてはまる番号をすべて選んでください。

1. 学部学生として留学	ある	3 (1.2%)	ない	256 (98.8%)
2. 大学院生として留学	ある	26 (10.0%)	ない	233 (90.0%)
3. 研究者として留学	ある	236 (91.1%)	ない	23 (8.9%)
4. その他	ある	11 (4.2%)	ない	248 (95.8%)
[] として留学				

【問23】あなたご自身のこれまでの研究活動の成果を日本にいる同じ専門分野で同年代の研究者と比較して、どの位置にあると思われますか。量的、質的それぞれにおいて、あてはまる番号を1つ選んでください。

	上位		中位			下位	
1. 量的にみて	1	2	3	4	5	6	7
	85 (24.4%)	74 (21.0%)	56 (15.9%)	92 (26.1%)	26 (7.4%)	10 (2.8%)	9 (2.5%)
2. 質的にみて	1	2	3	4	5	6	7
	105 (30.1%)	93 (26.6%)	58 (16.6%)	74 (21.2%)	9 (2.6%)	6 (1.7%)	4 (1.1%)

【問24】これまで在職された高等教育機関についてお尋ねします（非常勤は除いてください）。

- 1) 就職後、これまでに何回、高等教育機関を移動なさいましたか。 ==> () 回
- | | | | | | |
|----|------------|----|-------------|----|------------|
| 0回 | 49 (16.3%) | 1回 | 116 (38.7%) | 2回 | 73 (24.3%) |
| 3回 | 42 (14.0%) | 4回 | 15 (5.0%) | 5回 | 4 (1.3%) |
| 6回 | 1 (0.3%) | | | | |
- 2) これまでに高等教育機関に在職された年数の合計は、今年を含めて、何年になりますか。 ==> () 年
【省略】
- 3) あなたが現在所属されている大学には、今年も含めて、これまでに何年勤務されていますか。 ==> () 年
【省略】
- 4) もし、あなたが高等教育機関以外の場で、常勤職の専門職につかれた経験がある場合、その年数の合計は何年になりますか。 ==> () 年
【省略】

【問25】あなたはこれまでに学術賞を受賞されたことがありますか。

1. はい、あります	2. いいえ、ありません → 【問32】へとんでください
155 (41.6%)	218 (58.4%)

↓

【問26】上記の質問で、「1. はい、あります」を選択された方へお尋ねします。学術賞すべてについて、その受賞年とその名称についてご回答ください。

受賞年	受賞学術賞名
1. 明・大・昭・平 [] 年 ()	

2. 明・大・昭・平 []年 ()
3. 明・大・昭・平 []年 ()
4. 明・大・昭・平 []年 ()
5. 明・大・昭・平 []年 ()
6. 明・大・昭・平 []年 ()
7. 明・大・昭・平 []年 ()
8. 明・大・昭・平 []年 ()

学 術 賞 受 賞 回 数

1回	72 (46.8%)	2回	38 (24.7%)	3回	22 (14.3%)	4回	2 (1.3%)
5回	4 (2.6%)	6回	7 (4.5%)	7回	2 (1.3%)	8回	5 (3.2%)
14回	1 (0.6%)	23回	1 (0.6%)				

【問27】～【問29】では、あなたが所属されている学会等の専門的組織・団体への加入・参加についてお尋ねします。

【問27】あなたは、現在、いくつの学会に所属されていますか。学会のレベルごとに所属学会数を()内にご回答ください。また、あなたが最も強く関与している学会はどのレベルの学会ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

1. 地方学会 ()つ	2. 全国学会 ()つ	3. 国際学会 ()つ
↓	↓	↓
0つ 192 (63.8%)	0つ 4 (1.3%)	0つ 120 (39.9%)
1つ 48 (15.9%)	1つ 27 (9.0%)	1つ 84 (27.9%)
2つ 32 (10.6%)	2つ 38 (12.6%)	2つ 52 (17.3%)
3つ 16 (5.3%)	3つ 49 (16.3%)	3つ 20 (6.6%)
4つ 3 (1.0%)	4つ 57 (18.9%)	4つ 8 (2.7%)
5つ 3 (1.0%)	5つ 37 (12.3%)	5つ 9 (3.0%)
6つ 4 (1.3%)	6つ 17 (5.6%)	6つ 4 (1.3%)
8つ 1 (0.3%)	7つ 15 (5.0%)	10つ 2 (0.7%)
10つ 2 (0.7%)	8つ 15 (5.0%)	12つ 1 (0.3%)
	9つ 7 (2.3%)	14つ 1 (0.3%)
	10つ 16 (5.3%)	
	11つ 2 (0.7%)	
	12つ 2 (0.7%)	
	13つ 1 (0.3%)	
	14つ 3 (1.0%)	
	15つ 4 (1.3%)	
	16つ 1 (0.3%)	
	17つ 2 (0.7%)	
	20つ 1 (0.3%)	
	22つ 1 (0.3%)	
	25つ 1 (0.3%)	
	36つ 1 (0.3%)	

【問28】あなたが入会している学会の中で、最も強く関与している学会での役職経験についてお尋ねします。あてはまる番号すべてを選択し○をつけてください。最初にその役職に就かれた年も()内にご回答下さい。

1. 紀要編集委員 → 19 ()年

		就 任 年 齢 分 布				
はい	121 (32.4%)	⇒	20才代	5 (4.9%)	30才代	24 (23.5%)
いいえ	252 (67.6%)		40才代	47 (46.1%)	50才代	23 (22.5%)
			60才代	3 (2.9%)		

2. 紀要編集委員長 → 19 ()年

		就 任 年 齢 分 布				
はい	39 (10.5%)	⇒	20才代	2 (5.6%)	30才代	5 (13.9%)
いいえ	334 (89.5%)		40才代	5 (13.9%)	50才代	16 (44.4%)
			60才代	7 (19.4%)	70才代	1 (2.8%)

3. 理事 → 19 () 年

		就 任 年 齢 分 布				
はい	183 (49.1%)	⇒	20才代	8 (5.0%)	30才代	21 (13.2%)
いいえ	190 (50.9%)		40才代	57 (35.8%)	50才代	62 (39.0%)
			60才代	11 (6.9%)		

4. 会長 → 19 () 年

		就 任 年 齢 分 布				
はい	76 (20.4%)	⇒	20才代	1 (1.4%)	30才代	3 (4.2%)
いいえ	297 (79.6%)		40才代	5 (7.0%)	50才代	33 (46.5%)
			60才代	28 (39.4%)	70才代	1 (1.4%)

5. どの役職の経験もない

はい	148 (39.7%)
いいえ	225 (60.3%)

【問29】今年度（平成4年度）、あなたは日本国内あるいは海外で開催された学会や学術会議に何回参加されましたか。

日本国内の学会や学術会議 () 回

海外の学会や学術会議 () 回

日本国内の学会や学術会議への出席回数

海外の学会や学術会議への出席回数

0回	9	3.2
1回	18	6.4
2回	53	18.9
3回	55	19.6
4回	38	13.5
5回	31	11.0
6～9回	30	10.7
10～12回	28	10.0
13回以上	19	6.8

0回	51	26.3
1回	74	38.1
2回	24	12.4
3回	17	8.8
4～6回	16	8.2
7回以上	12	6.2

【問30】～【問34】では、あなたが所属されている大学の最小研究単位についてお尋ねします。ここでの最小研究単位とは、人事権と予算の配分権をもち、かつ専門分野を同一とする大学自治を構成する単位のことです。以下では、便宜上、「研究室」と呼称します。

【問30】あなたの所属「研究室」には大学院課程あるいは大学院課程に相当する教育課程がありますか。次の中から1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1. 博士課程までの大学院がある 242 (79.9%)
- 2. 修士課程までの大学院がある 36 (11.9%)
- 3. 大学院課程はない 25 (8.3%)

【問31】あなたの所属「研究室」は、教育と研究の関係からみると次のどのタイプになりますか。

- 1. とりわけ研究を重視する研究室 67 (22.4%)
- 2. どちらかといえば研究を重視する研究室 66 (22.1%)
- 3. 研究と教育をほぼ等しく重視する研究室 135 (45.2%)
- 4. どちらかといえば教育を重視する研究室 21 (7.0%)
- 5. とりわけ教育を重視する研究室 10 (3.3%)

【問32】あなたの「研究室」の研究活動は、①日本の大学や②世界の大学のなかで専門分野の同じ「研究室」と比べてどのような位置にありますか。量的、質的それぞれにおいて、あてはまる番号を1つ選んでください。

①日本の大学

	上位			中位			下位		
1. 量的にみて	1	2	3	4	5	6	7		
	62 (17.8%)	66 (18.9%)	60 (17.2%)	110 (31.5%)	25 (7.2%)	17 (4.9%)	9 (2.6%)		
2. 質的にみて	1	2	3	4	5	6	7		
	85 (24.5%)	78 (22.5%)	73 (21.0%)	79 (22.8%)	13 (3.7%)	14 (4.0%)	5 (1.4%)		

②世界の大学

	上位			中位			下位		
1. 量的にみて	1	2	3	4	5	6	7		
	26 (7.7%)	60 (17.8%)	61 (18.1%)	80 (23.7%)	50 (14.8%)	35 (10.4%)	25 (7.4%)		
2. 質的にみて	1	2	3	4	5	6	7		
	42 (12.5%)	83 (24.8%)	59 (17.6%)	74 (22.1%)	47 (14.0%)	16 (4.8%)	14 (4.2%)		

【問33】あなたの所属「研究室」の研究活動を活発にするには次の事項はどの程度重要であると思われますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	あまり重要でない	全く重要でない	該当しない
1. 教官の研究活動に対する情熱	326 (91.6%)	27 (7.6%)	2 (0.6%)	1 (0.3%)		
2. 優秀な大学院生の存在	210 (62.5%)	94 (28.0%)	23 (6.8%)	9 (2.7%)		
3. 研究の支えとなる若手研究者の存在	253 (73.8%)	69 (20.1%)	16 (4.7%)	5 (1.5%)		
4. 世界の学界をリードする研究者との接触機会	158 (45.9%)	129 (37.9%)	44 (12.8%)	13 (3.8%)		
5. 専任教員の豊富な研究資金	174 (50.0%)	121 (34.8%)	36 (10.3%)	17 (4.9%)		
6. 先端の研究設備・施設の整備	124 (36.5%)	119 (35.0%)	76 (22.4%)	21 (6.2%)		
7. 新規の研究プロジェクトの企画	91 (27.0%)	139 (41.2%)	85 (25.2%)	22 (6.5%)		
8. 大学の自治と学問の自由の保証	142 (42.4%)	94 (28.1%)	73 (21.8%)	26 (7.8%)		
9. 所属大学・学科の研究志向の風土	147 (42.6%)	134 (38.8%)	52 (15.1%)	12 (3.5%)		
10. 企業との共同研究体制	29 (9.2%)	83 (26.4%)	121 (38.5%)	81 (25.8%)		
11. 研究活動以外の仕事(教育、管理運営・社会サービス等)が少ないこと	92 (26.9%)	127 (37.1%)	98 (28.7%)	25 (7.3%)		
12. 研究者の給与等の生活待遇	112 (32.9%)	132 (38.8%)	83 (24.4%)	13 (3.8%)		

【問34】あなたが所属する「研究室」では、以下に示した「研究室」の研究活動にとって重要だと思われる事項は、現在どのような状態ですか。あてはまる番号を1つ選んでください。

	大変良 好であ る	少し良 好であ る	どちら ともい えない	あまり 良好で ない	全く良 好でな い	該当し ない	
1. 教官の研究活動に対する情熱	158 (45.8%)	138 (40.0%)	33 (9.6%)	16 (4.6%)			6
2. 優秀な大学院生の存在	55 (18.0%)	117 (38.2%)	71 (23.2%)	63 (20.6%)			6
3. 研究の支えとなる若手研究者の存在	70 (22.4%)	121 (38.8%)	55 (17.6%)	66 (21.2%)			6
4. 世界の学界をリードする研究者との接触機会	57 (17.4%)	104 (31.7%)	75 (22.9%)	92 (28.0%)			6
5. 専任教員の豊富な研究資金	28 (8.2%)	62 (18.2%)	98 (28.8%)	152 (44.7%)			6
6. 先端の研究設備・施設の整備	23 (7.0%)	61 (18.9%)	105 (31.9%)	140 (42.6%)			6
7. 新規の研究プロジェクトの企画	32 (9.8%)	84 (25.8%)	120 (36.9%)	89 (27.4%)			6
8. 大学の自治と学問の自由の保証	102 (31.0%)	132 (40.1%)	77 (23.4%)	18 (5.5%)			6
9. 所属大学・学科の研究志向の風土	58 (17.2%)	116 (34.3%)	98 (29.0%)	66 (19.5%)			6
10. 企業との共同研究体制	20 (7.4%)	55 (20.4%)	109 (40.5%)	85 (31.6%)			6
11. 研究活動以外の仕事(教育、管理運営・社会サービス等)が少ないこと	10 (3.0%)	35 (10.6%)	114 (34.4%)	172 (52.0%)			6
12. 研究者の給与等の生活待遇	7 (2.1%)	50 (14.7%)	159 (46.6%)	125 (36.7%)			6
13. その他()							6

【問35】～【問47】では、教育活動についてお尋ねします。あなたが担当されている授業科目、指導されている学生、指導方針などについてお答えください。

【問35】これまでに大学院生を指導なさった経験がありますか。

1. あります 2. ありません => 【問47】にとんでください
348 (93.3%) 25 (6.7%)

【問36】研究者養成という面からみて、あなたご自身のこれまでの教育活動は、日本にいる同じ専門分野で同僚の研究者と比較して、どの位置にあると思われますか。あてはまる番号を1つ選んで下さい。

上位	中位				下位		
1	2	3	4	5	6	7	
77 (22.9%)	92 (27.4%)	63 (18.8%)	82 (24.4%)	11 (3.3%)	7 (2.1%)	4 (1.2%)	

() 3. 留学すること	1位	1 (0.3%)	2位	14 (3.8%)
	3位	13 (3.5%)	順位なし	345 (92.5%)
() 4. 研究職につくこと	1位	23 (6.2%)	2位	28 (7.5%)
	3位	43 (11.5%)	順位なし	279 (74.8%)
() 5. 研究者としての自覚を持つこと	1位	23 (6.2%)	2位	22 (5.9%)
	3位	16 (4.3%)	順位なし	312 (83.6%)
() 6. 共同研究に参加すること	1位	2 (0.5%)	2位	1 (0.3%)
	3位	6 (1.6%)	順位なし	364 (97.6%)
() 7. 科研費等の研究費を獲得すること	1位	1 (0.3%)	2位	10 (2.7%)
	3位	18 (4.8%)	順位なし	344 (92.2%)
() 8. 学会に加入すること			2位	3 (0.8%)
	3位	3 (0.8%)	順位なし	367 (98.4%)
() 9. 学会で発表すること	1位	10 (2.7%)	2位	35 (9.4%)
	3位	40 (10.7%)	順位なし	288 (77.2%)
() 10. 専門雑誌に論文を発表すること	1位	93 (24.9%)	2位	85 (22.8%)
	3位	22 (5.9%)	順位なし	173 (46.4%)
() 11. 著書を刊行すること	1位	3 (0.8%)	2位	4 (1.1%)
	3位	9 (2.4%)	順位なし	357 (95.7%)
() 12. 学術賞を授与されること	1位	5 (1.3%)	2位	4 (1.1%)
	3位	8 (2.1%)	順位なし	356 (95.4%)
() 13. その他	1位	5 (1.3%)	2位	2 (0.5%)
()	3位	4 (1.1%)	順位なし	362 (97.1%)

【問46】 これまでにあなたが院生を指導された経験から、一人前の研究者になるためには、次の事項はどの程度重要であると思われますか。あてはまる番号を1つ選んで下さい。また、以下の事項の内、特に重要であると思われるものを3つ選択し、下の〔 〕内に重要と思われる順に番号をご記入下さい。

	大変重要である	少し重要である	どちらともいえない	あまり重要でない	全く重要でない	該当しない
1. 学生の才能	166 (65.1%)	81 (31.8%)	7 (2.7%)	1 (0.4%)		
2. 学生のパーソナリティ	109 (44.5%)	105 (42.9%)	26 (10.6%)	5 (2.0%)		
3. 学生の研究に対する情熱(気概)	232 (91.7%)	17 (6.7%)	2 (0.8%)	2 (0.8%)		
4. 学生の性別	1 (0.4%)	16 (7.0%)	58 (25.4%)	153 (67.1%)		
5. 学生の育った家庭環境	5 (2.1%)	42 (17.9%)	76 (32.3%)	112 (47.7%)		
6. 学生への奨学金	57 (23.9%)	96 (40.3%)	59 (24.8%)	26 (10.9%)		
7. 学生の受けた初等・中等教育	13 (5.4%)	68 (28.5%)	80 (33.5%)	78 (32.6%)		
8. 学生の受けた学部教育	47 (19.4%)	130 (53.7%)	47 (19.4%)	18 (7.4%)		
9. 学生の受ける大学院教育	117 (48.0%)	93 (38.1%)	24 (9.8%)	10 (4.1%)		

10. 学生の指導教授 (あなた自身) ……	1	2	3	4	5	6
	130 (52.2%)	104 (41.8%)	12 (4.8%)	3 (1.2%)		
11. 留学経験 ……	1	2	3	4	5	6
	27 (11.3%)	89 (37.4%)	75 (31.5%)	47 (19.7%)		
12. 世界の学界をリードする研究者… の下で研究を行うこと	1	2	3	4	5	6
	70 (29.2%)	88 (36.7%)	64 (26.7%)	18 (7.5%)		
13. 研究情報データベースへの接近 …	1	2	3	4	5	6
	38 (16.0%)	111 (46.6%)	70 (29.4%)	19 (8.0%)		
14. 所属大学・学科の風土 ……	1	2	3	4	5	6
	71 (29.3%)	139 (57.4%)	28 (11.6%)	4 (1.7%)		
15. 所属大学・学科の研究施設・設備 …	1	2	3	4	5	6
	66 (27.2%)	140 (57.6%)	31 (12.8%)	6 (2.5%)		
16. 学生への研究費 ……	1	2	3	4	5	6
	43 (18.0%)	114 (47.7%)	59 (24.7%)	23 (9.6%)		
17. 他の教員とのコミュニケーション網…	1	2	3	4	5	6
	43 (17.7%)	131 (53.9%)	55 (22.6%)	14 (5.8%)		
18. 独創性を求める科学の規範を …… 身につけること	1	2	3	4	5	6
	160 (66.1%)	63 (26.0%)	17 (7.0%)	2 (0.8%)		
19. 科学の先取権競争 ……	1	2	3	4	5	6
	30 (13.3%)	64 (28.3%)	92 (40.7%)	40 (17.7%)		
20. 研究活動以外の活動 (アルバイト、… 子供の世話等) を少なくすること	1	2	3	4	5	6
	59 (24.9%)	118 (49.0%)	49 (20.3%)	15 (6.2%)		
21. その他 () …	1	2	3	4	5	6

1番目に重要な事項 []			2番目に重要な事項 []			3番目に重要な事項 []		
1	86	(36.8%)	1	39	(16.7%)	1	19	(8.3%)
2	12	(5.1%)	2	31	(13.2%)	2	13	(5.7%)
3	102	(43.6%)	3	55	(23.5%)	3	23	(10.1%)
9	3	(1.3%)	5	2	(0.9%)	6	11	(4.8%)
10	13	(5.6%)	6	2	(0.9%)	8	7	(3.1%)
11	1	(0.4%)	7	1	(0.4%)	9	23	(10.1%)
12	6	(2.6%)	8	3	(1.3%)	10	36	(15.8%)
13	1	(0.4%)	9	17	(7.3%)	11	6	(2.6%)
14	1	(0.4%)	10	29	(12.4%)	12	14	(6.1%)
18	9	(3.8%)	11	2	(0.9%)	13	1	(0.4%)
			12	5	(2.1%)	14	17	(7.5%)
			13	1	(0.4%)	15	13	(5.7%)
			14	5	(2.1%)	16	4	(1.8%)
			15	6	(2.6%)	17	2	(0.9%)
			16	1	(0.4%)	18	29	(12.7%)
			17	1	(0.4%)	20	10	(4.4%)
			18	32	(13.7%)			
			19	1	(0.4%)			
			21	1	(0.4%)			

【問47】 これまでにあなたが一人前の研究者として成長する上で、次の各事項はどの程度重要であったと思われますか。あてはまる番号を1つ選んでください。

	大変重要であった	少し重要であった	どちらともいえない	あまり重要でなかった	全く重要でなかった	該当しない
1. 自分の才能	127 (36.7%)	153 (44.2%)	60 (17.3%)	6 (1.7%)		
2. 自分のパーソナリティ	129 (37.6%)	144 (42.0%)	67 (19.5%)	3 (0.9%)		
3. 研究に対する情熱 (気概)	272 (77.7%)	65 (18.6%)	12 (3.4%)	1 (0.3%)		
4. 自分の性別	15 (4.8%)	49 (15.6%)	112 (35.7%)	138 (43.9%)		
5. 自分の育った家族の環境	31 (9.3%)	118 (35.2%)	99 (29.6%)	87 (26.0%)		
6. 自分の配偶者の協力	104 (30.8%)	141 (41.7%)	61 (18.0%)	32 (9.5%)		
7. 自分の基本給与	30 (9.1%)	89 (27.1%)	135 (41.2%)	74 (22.6%)		
8. 自分の受けた初等・中等教育	46 (13.6%)	95 (28.1%)	110 (32.5%)	87 (25.7%)		
9. 自分の受けた学部教育	84 (24.6%)	122 (35.7%)	86 (25.1%)	50 (14.6%)		
10. 自分の受けた大学院教育	90 (35.2%)	97 (37.9%)	46 (18.0%)	23 (9.0%)		
11. 自分の指導教授	188 (53.4%)	107 (30.4%)	32 (9.1%)	25 (7.1%)		
12. 留学経験	125 (46.8%)	86 (32.2%)	34 (12.7%)	22 (8.2%)		
13. 世界の学界をリードする研究者の下で研究を行ったこと	103 (41.0%)	73 (29.1%)	49 (19.5%)	26 (10.4%)		
14. 研究情報データベースへの接近	31 (10.1%)	96 (31.4%)	104 (34.0%)	75 (24.5%)		
15. 所属大学・学科の風土や知的雰囲気	87 (25.4%)	151 (44.0%)	79 (23.0%)	26 (7.6%)		
16. 所属大学・学科の研究施設・設備	54 (15.9%)	149 (43.8%)	99 (29.1%)	38 (11.2%)		
17. 自分の研究費	80 (23.7%)	124 (36.7%)	90 (26.6%)	44 (13.0%)		
18. 研究の支えとなる若手研究者の存在	99 (30.2%)	114 (34.8%)	70 (21.3%)	45 (13.7%)		

19. 他の教員とのコミュニケーション網…	1	2	3	4	5	6
	65 (19.0%)	146 (42.6%)	97 (28.3%)	35 (10.2%)		
20. 独創性を求める科学の規範を 身につけること	1	2	3	4	5	6
	158 (50.5%)	111 (33.3%)	44 (13.2%)	10 (3.0%)		
21. 科学の先取権競争	1	2	3	4	5	6
	41 (14.0%)	74 (25.3%)	103 (35.3%)	74 (25.3%)		
22. 研究活動以外の仕事（教育、管理運 営、社会サービス等）を少なくすること	1	2	3	4	5	6
	60 (17.9%)	112 (33.3%)	115 (34.2%)	49 (14.6%)		
23. その他（	1	2	3	4	5	6
	12 (80.0%)	2 (13.3%)	1 (6.7%)			

【問48】～【問50】では、あなたご自身の科学的社会化についてお尋ねします。

【問48】あなたが研究者として成長する上で、これまでに障害となったことがありましたら教えて下さい。また、その障害をどのようにして克服なさいましたか。

【省略】

【問49】あなたの研究生活をふり返って、あなたが研究者として社会化*される上で、以下に示す各時期での家庭、学校、社会における出会いや体験は、どの程度重要だったと思われますか。各時期ごとに、あてはまる番号を1つ選んでください。（* 社会化とは、研究者としての（基礎的な）能力や行動様式・心構えなど研究活動に影響を与える資質を身につけること）

	大変重要 だった	重要だ った	どちらとも 言えない	重要でな かった	全く重要で なかった	該当し ない
1. 小学校入学まで	18 (5.5%)	32 (9.8%)	172 (52.6%)	105 (32.1%)		
2. 小学校時代	36 (10.7%)	69 (20.9%)	139 (41.4%)	92 (27.4%)		
3. 中学校時代	50 (14.8%)	96 (28.4%)	123 (36.4%)	69 (20.4%)		
4. 高等学校時代	71 (21.5%)	114 (34.4%)	99 (29.9%)	47 (14.2%)		
5. 大学学部時代	133 (38.2%)	135 (38.8%)	67 (19.3%)	13 (3.7%)		
6. 大学院時代	159 (62.4%)	73 (28.6%)	20 (7.8%)	3 (1.2%)		
7. 初職当時	177 (52.5%)	98 (29.1%)	51 (15.1%)	11 (3.3%)		
8. 30歳代	211 (62.4%)	84 (24.9%)	38 (11.2%)	5 (1.5%)		
9. 40歳代	150 (47.0%)	105 (32.9%)	57 (17.9%)	7 (2.2%)		
10. 50歳代	75 (29.1%)	93 (36.0%)	72 (27.9%)	18 (7.0%)		
11. 60歳代	22 (13.8%)	47 (29.4%)	72 (45.0%)	19 (11.9%)		

【問50】【問49】で「たいへん重要だった」か「重要だった」を選択した時期の家庭、学校、社会での出会いや体験について教えてください。

- ① 小学校入学まで（例. 家のまわりの自然環境との接触が、自分を生物好きにした）
- ② 小学校時代（例. 算数の先生との出会いが、現在の数学者としての資質形成に影響した）
- ③ 中学校時代
- ④ 高等学校時代（例. 父親が、進路選択に際して適切な指導をしてくれた）
- ⑤ 大学学部時代（例. 卒論の指導教官のおかげで、大学院進学を決意できた）
- ⑥ 大学院時代（例. 論文指導教官の後ろ姿から、研究者としての基本的な態度を身につけた）
- ⑦ 初職当時（例. 最初の職場の同僚教師との研究会から重要なヒントを得ることができた）
- ⑧ 30歳代
- ⑨ 40歳代
- ⑩ 50歳代
- ⑪ 60歳代

【以上は省略】

【問51】あなたご自身の体験やあなたが学生を指導した経験などから、現在の日本の大学における研究者養成についてご意見をお聞かせいただければ幸いです。

【省略】

御多忙のところ長時間にわたり御回答まことにありがとうございます。

同封の返信用封筒で、平成5年4月4日（日）までにご投函いただければまことに幸甚に存じます。

御回答は無記名でお願いしておりますが、本調査結果の概要を入手御希望の場合は御氏名を明記していただければ、調査がまとまった時点（平成5年10月頃）でお送り申し上げます。

結果はすべて統計的にまとめますので、ご回答いただきました先生方に個人的にご迷惑をおかけすることのないよう細心の注意を払わせていただきます。

御氏名（ ）

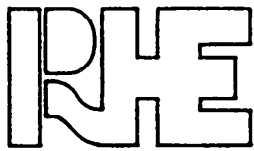
重ねて御協力にあつく御礼申し上げます。

執筆者紹介(※印は編者)

※ 大 膳 司 琉球大学法文学部助教授 (教育社会学, 高等教育の社会学)

加 野 芳 正 香川大学教育学部助教授 (教育社会学)

浦 田 広 朗 麗澤大学外国語学部助教授 (教育社会学, 高等教育論)



大学人の形成に関する研究
—日本の大学人へのアンケート—
(高等教育研究叢書 38)

1996 (平成8) 年3月31日 発行

編 者 大 膳 司
発行所 広島大学大学教育研究センター
〒739 東広島市鏡山一丁目2-2
電話 (0824) 24-6240
印刷所 鯉城印刷株式会社
〒730 広島市中区十日市二丁目8-2
電話 (082) 232-8247

ISBN 4-938664-38-0

REVIEWS IN HIGHER EDUCATION

No.38 (March 1996)

STUDY ON THE ACADEMIC SOCIALIZATION

Based on the Survey of Japanese Professors

RESEARCH INSTITUTE FOR
HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY

ISBN4-938664-38-0